

**土地分類基本調査（土地履歴調査）  
説明書**

**名古屋南部**

5 万 分 の 1

平成 2 4 年 3 月

国土交通省 国土政策局 国土情報課

# 土地分類基本調査（土地履歴調査）説明書「名古屋南部」

## 目 次

はじめに

|     |                           |    |
|-----|---------------------------|----|
| 1   | 調査の概要                     | 1  |
| 1.1 | 調査の目的                     | 1  |
| 1.2 | 調査方法及び成果の概要               | 1  |
| 1.3 | 調査実施体制                    | 2  |
| 2   | 調査地域の概要                   | 3  |
| 2.1 | 地域の位置                     | 3  |
| 2.2 | 地域の行政概要                   | 3  |
| 2.3 | 地域の特性                     | 6  |
| 3   | 調査地域の地形及び土地の開発、保全及び利用との関係 | 9  |
| 3.1 | 地形概説                      | 9  |
| 3.2 | 地形細説                      | 12 |
| 3.3 | 地形と土地の開発、保全及び利用との関係       | 18 |
| 3.4 | 地形と災害及び保全との関係             | 21 |
| 4   | 土地利用の変遷の概要                | 22 |
| 4.1 | 過去の土地利用状況の概要              | 22 |
| 4.2 | 土地利用の変遷の概要                | 29 |
| 5   | 調査地域の災害履歴概要               | 35 |
| 5.1 | 災害履歴概説                    | 35 |
| 5.2 | 災害履歴詳説                    | 35 |
| 6   | 調査成果図の見方・使い方              | 40 |
| 6.1 | 地形分類図                     | 40 |
| 6.2 | 土地利用分類図                   | 43 |
| 6.3 | 災害履歴図                     | 43 |
| 6.4 | 成果図面の使い方                  | 44 |
| 7   | 引用資料及び参考文献                | 46 |
| 7.1 | 引用資料                      | 46 |
| 7.2 | 参考文献                      | 50 |

資料

災害年表

はじめに

国土交通省国土政策局では、国土調査の一環として、全国の都道府県と協力して「土地分類基本調査」を実施し、5万分の1地形図を単位に、土地の自然的条件（地形、表層地質、土壌）等について調査した結果を、調査図及び調査簿として整備・提供してきました。

近年、集中豪雨や大地震の多発により、毎年のように水害や地盤災害が発生していますが、これらの災害の中には、土地本来の自然条件を無視した開発や利用に起因するものもあり、土地の安全性に対する関心が高まっています。

このため、平成22年度から新たな土地分類基本調査として、地域ごとの土地の改変履歴や本来の自然地形、過去からの土地利用変遷状況、自然災害の履歴等に関する情報を総合的に整備し、土地の安全性に関連する自然条件等の情報を、誰もが容易に把握・利用できる土地分類基本調査（土地履歴調査）に着手しました。

この「名古屋南部」図幅の調査成果は、中部圏地区の土地分類基本調査（土地履歴調査）の最初の成果として、平成23年度に実施した調査の結果をとりまとめたものです。本調査成果については、行政関係者や研究者等の専門家だけでなく、学校教育・生涯学習・地域の活動等に取り組む団体や住民の方々、居住地域の地形状況を知りたい方、新たに土地の取引をされようとする方々、不動産の仲介・開発等に関係する企業の方々、その他地域の自然環境、土地利用、災害等に関心を持つ方々等に、幅広く利用していただきたいと考えています。

最後に、調査の実施にあたり終始ご指導をいただいた地区調査委員会の皆様をはじめ、ご協力をいただいた関係行政機関、調査担当機関の関係の方々に深く感謝申し上げます。

平成24年3月

国土交通省 国土政策局 国土情報課

## 1 調査の概要

### 1.1 調査の目的

本調査は、自然災害等に対する土地の安全性に関連して、土地本来の自然条件等の情報を誰もが容易に把握・活用できるように、過去からの土地の状況の変遷に関する情報を整備するとともに、各行政機関が保有する災害履歴情報等を幅広く集約し、総合的な地図情報として分かりやすく提供することにより、災害等にも配慮した土地取引、災害時の被害軽減、被災しにくい土地利用への転換を促すなど、安全・安心な生活環境の実現を図ることを目的とする。

### 1.2 調査方法及び成果の概要

これまでの土地分類基本調査の調査項目に加え、土地の開発等により不明となった土地本来の自然地形や改変履歴等を明らかにするとともに、過去からの土地利用変遷情報を整備し、災害履歴情報を編集するため、主に次の方法により以下の土地状況変遷及び災害履歴情報からなる調査成果を作成した。

調査成果図は、概ね縮尺 5 万分 1 の精度で編集し、同縮尺の地形図を背景図として地図画像（PDF ファイル）を作成した。

#### (1) 調査方法

土地状況変遷情報は、5 万分の 1 都道府県土地分類基本調査成果や国土地理院作成の土地条件図等既存の地形分類図、明治以降に作成された旧版地図、昭和 20 年頃の米軍撮影空中写真、最新の空中写真等を活用して作成した。

災害履歴情報は、地方公共団体や関係行政機関等が調査した水害、地震災害等の現地調査図等の資料より編集した。

#### (2) 本調査による調査成果

##### ① 土地状況変遷情報

###### i. 自然地形分類図

土地本来の自然地形である山地・丘陵地、台地、氾濫原低地、自然堤防、旧河道、湿地、三角州・海岸低地等に分類した図である。なお、現況の人工改変地にあっては改変前の自然地形を復元し分類している。

###### ii. 人工地形分類図

人工改変地を埋立地、盛土地、切り盛り造成地等に分類した図である。なお、本調査成果図では、人工地形及び自然地形を重ねて「人工地形及び自然地形分類図」にまとめて作成している。

###### iii. 土地利用分類図（2 時期分）

明治期（現在から概ね 120 年前）と昭和 40 年代（同概ね 40 年前）の 2 時期の土地利用状況を復元し分類した図である。

##### ② 災害履歴情報

###### i. 災害履歴図

浸水状況、地震被害等の既存資料図を基に、被害分布等の図にとりまとめて編集し

たものである。

ii. 災害年表・災害関連情報

年表形式の災害記録、災害に関する文献情報等を取りまとめたものである。

③ 調査説明書

調査成果図等の利用の参考とするため、本説明書を作成している。

④ 調査成果図 GIS データ

各調査成果図の GIS データを作成している。

### 1.3 調査実施体制

#### (1) 地区調査委員会（敬称略 順不同）

委員長

海津 正倫 奈良大学文学部 教授(名古屋大学名誉教授)

委員

(学識経験者)

藤本 潔 南山大学総合政策学部 教授

堀 和明 名古屋大学大学院環境学研究科 准教授

(関係県・政令市)

愛知県 地域振興部 土地水資源課

岐阜県 都市建築部 都市政策課

名古屋市 緑政土木局 企画経理課

#### (2) 実施機関

① 計画機関

国土交通省 国土政策局 国土情報課

② 受託機関

地形分類調査及び土地利用履歴分類調査

株式会社東京地図研究社

災害履歴調査

北海道地図株式会社

実施管理

株式会社 パスコ

## 2 調査地域の概要

### 2.1 地域の位置

本調査の対象地域（以下「本図幅」という。）は、国土交通省国土地理院発行5万分の1地形図の「名古屋南部」の全域、北緯  $35^{\circ} 00' \sim 10'$ 、東経  $136^{\circ} 45' \sim 137^{\circ} 00'$ （座標は日本測地系）、愛知県西部、三重県東部にまたがる面積約  $375.57\text{km}^2$  の範囲である。図 2-1 に本図幅の位置図を示す。

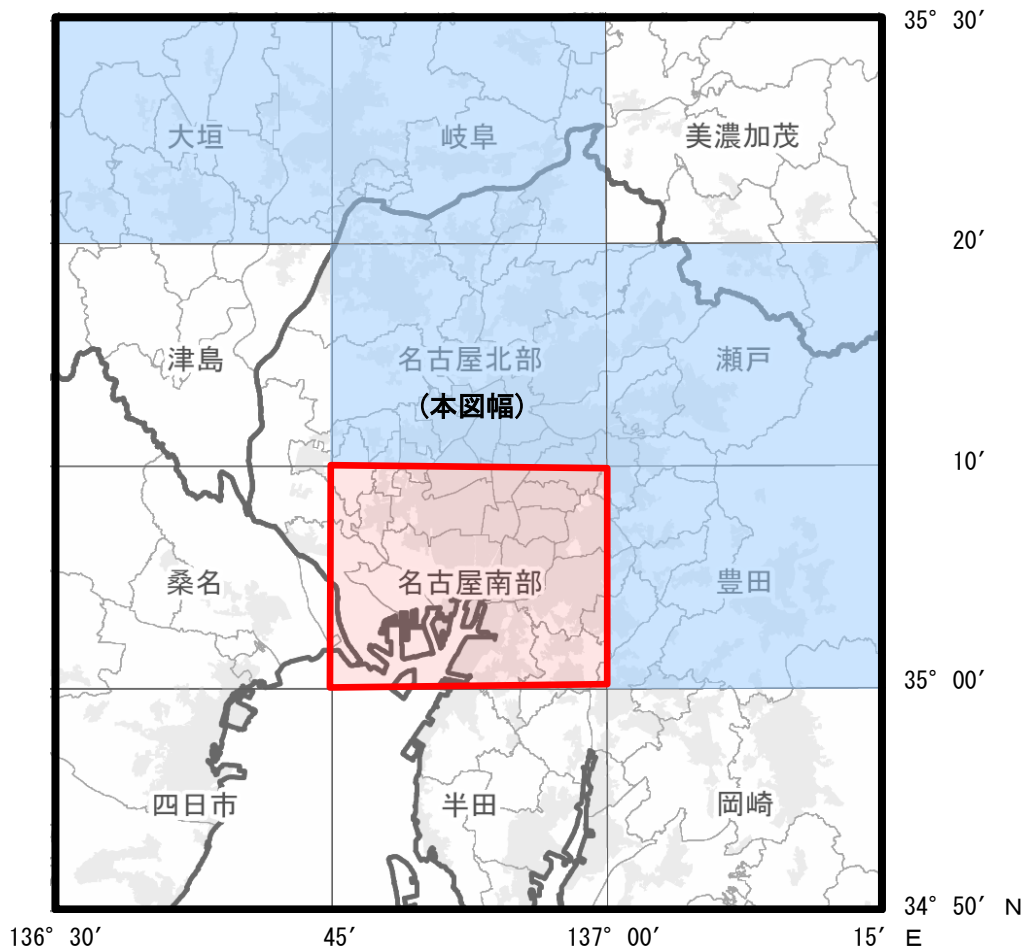


図 2-1 調査位置図

### 2.2 地域の行政概要

本図幅に関係する市区町村は、愛知県西部の 10 市 2 町 1 村（名古屋市、津島市、刈谷市、東海市、大府市、知多市、豊明市、愛西市、弥富市、あま市、海部郡大治町、海部郡蟹江町、海部郡飛島村）と三重県東部の 1 市 1 町（桑名市、桑名郡木曾岬町）である（図 2-2、表 2-1）。

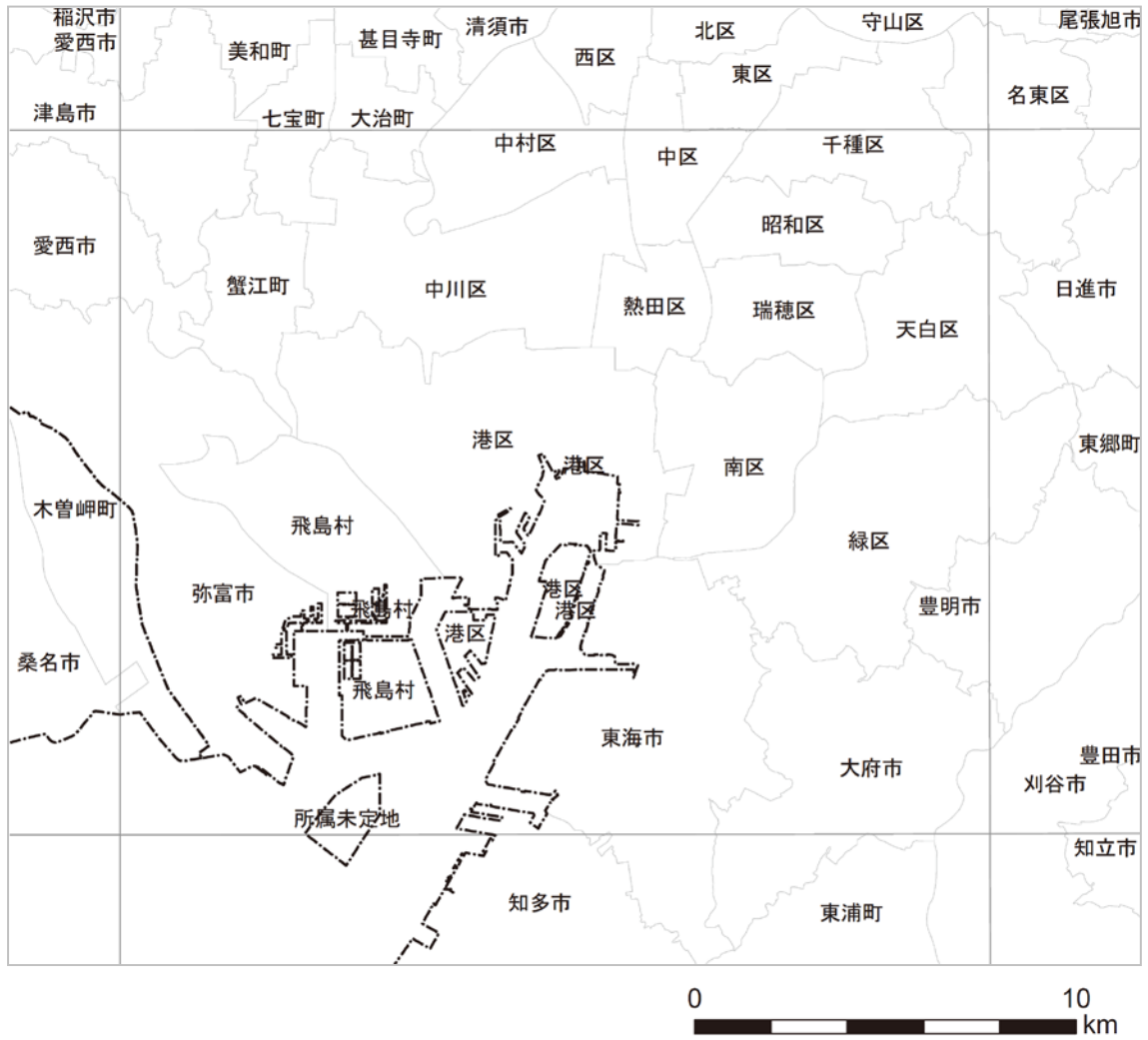


図 2-2 関係市区町村

| 表 2-1 関係市町村 (面積、人口、世帯数) | 図幅内面積 | 行政面積   | 行政区域内世帯数 | 人口総数    |
|-------------------------|-------|--------|----------|---------|
| 愛知県                     | ha    | ha     | 世帯       | 人       |
| 名古屋市                    |       |        |          |         |
| 千種区                     | 978   | 1,823  | 80,411   | 160,015 |
| 東区                      | 2     | 770    | 38,562   | 73,272  |
| 中村区                     | 1,007 | 16,331 | 68,877   | 136,164 |
| 中区                      | 689   | 938    | 50,000   | 78,353  |
| 昭和区                     | 1,093 | 1,094  | 53,782   | 105,536 |
| 瑞穂区                     | 1,119 | 1,123  | 47,826   | 105,061 |
| 熱田区                     | 823   | 813    | 30,098   | 64,719  |
| 中川区                     | 3,202 | 3,203  | 92,639   | 221,521 |

|         |        |        |           |           |
|---------|--------|--------|-----------|-----------|
| 港区      | 4,878  | 4,569  | 59,274    | 149,215   |
| 南区      | 1,848  | 1,846  | 61,757    | 141,310   |
| 緑区      | 3,137  | *3,784 | 87,672    | 229,592   |
| 名東区     | 202    | *1,944 | 71,894    | 161,012   |
| 天白区     | 1,639  | 2,162  | 70,574    | 158,793   |
| 津島市     | 973    | 2,508  | 23,509    | 65,258    |
| 刈谷市     | 187    | 5,045  | 58,917    | 145,781   |
| 東海市     | 3,648  | 4,336  | 42,859    | 107,690   |
| 大府市     | 2,667  | 3,368  | 33,484    | 85,249    |
| 知多市     | 156    | 4,576  | 31,263    | 84,768    |
| 豊明市     | 564    | *2,318 | 26,872    | 69,745    |
| 愛西市     | 468    | 6,663  | 20,747    | 64,978    |
| 弥富市     | 3,511  | *4,892 | 15,041    | 43,272    |
| あま市     | 424    | 2,759  | 31,355    | 86,714    |
| 海部郡大治町  | 213    | 659    | 11,285    | 29,891    |
| 海部郡蟹江町  | 1,109  | 1,110  | 14,078    | 36,688    |
| 海部郡飛島村  | 2,308  | 2,253  | 1,288     | 4,525     |
| 三重県     |        |        |           |           |
| 桑名市     | 62     | 13,661 | 51,525    | 140,290   |
| 桑名郡木曾岬町 | 517    | *1,572 | 2,250     | 6,855     |
| 所属未定地   | 195    | —      | —         | —         |
| 計       | 37,557 | 96,120 | 1,177,839 | 2,756,267 |

- 1.行政面積は国土地理院「平成23年全国都道府県市区町村面積調」(平成23年10月1日現在)による。  
\*印は、境界未定のため総務省「全国市町村要覧平成22年版」記載の便宜上の概算数値を参考値とした。
- 2.図幅内面積は、本調査における図上計測値。
- 3.人口、世帯数は平成22年国勢調査人口速報集計結果による。



## 2.3 地域の特性

### (1) 沿革

本図幅は、大部分がかつての旧尾張国に属し、南西部のごく一部が旧伊勢国に属している。明治4年(1871)年廃藩置県により、名古屋県、安濃津県がそれぞれ設置され、名古屋県は明治5(1872)年に愛知県に改称された後、額田県(三河・知多地域)を編入してほぼ現在の県域となり、安濃津県は明治5(1872)年に三重県に改称された後、明治9(1876)年度合県(伊勢・志摩地域)と合併して現在の三重県となった。

本図幅内の大部分は、江戸時代には、徳川御三家筆頭である尾張徳川家によって治められ、特に第7代藩主徳川宗春の時代には商業都市として大きく栄えた。本図幅南西部は、広い範囲で海部であったが、干拓による新田開発等により農業も栄えたが、低湿地帯であったことから、たびたび氾濫による水害が発生した。明治時代に入ってから、木曾川、長良川、揖斐川の三川分流工事が行われ、水害被害は大きく軽減された。

また、名古屋南部は、古くから、京都と関東方面を結ぶ東海道が通り、江戸時代には鳴海宿、宮宿が置かれ、特に宮宿は、中山道垂井宿に至る脇街道美濃路との分岐点であり、熱田神宮の門前町であったことから、東海道でも最大の宿場として栄えた。また、宮宿と桑名宿の間は、東海道唯一の海路である七里の渡しで結ばれていた。

明治以降は、名古屋市街地を中心に鉄道網が順次整備され、現在の東海道本線にかかわる路線としては、明治19(1886)年には武豊駅―木曾川駅間が開業し、明治21(1888)年には浜松駅―大府駅間が延伸開業した(浜松駅―木曾川駅間は現在の東海道本線、武豊駅―大府駅間は現在の武豊線)。また、現在の名古屋鉄道にかかわる路線としては、名古屋鉄道の前身企業である名古屋電気鉄道が明治31(1898)年に名古屋市街地内で電車運行を開始し、市内各所へ網の目のように路線網を構築していった。大正以降には名古屋以東の郊外線が愛知電気鉄道(後に名古屋電気鉄道と合併し、現在の名古屋鉄道となる)によって整備された。

また、近年のモータリゼーションの進展により名古屋高速道路等の高速自動車道路網の整備が進んでいる。

本図幅内では、東海地方の中心地域として、また、海部の埋め立てによる陸部の増加により市街地が徐々に拡大し、人口増加や町村合併などによって新市が多く誕生した。平成の大合併でも、愛西市(佐屋町、立田村、八開村、佐織町)、弥富市(弥富町、十四山村)、あま市(七宝町、美和町、甚目寺町)が新市として誕生した。

### (2) 気候

名古屋南部の気候を1981～2010年の名古屋地方気象台(名古屋市千種区日和町)の平年値(表2-2)からみると、年平均気温は15.8℃、最寒月(1月)の日最低気温の月平均は0.8℃、最暖月(8月)の日最高気温の月平均は32.8℃となり、太平洋岸の温暖な気候となっている。

年降水量は1,535.3mmで、月降水量は3月から10月にかけて100mm/月を超え、秋霖期の9月に234.4mmで極大となる。月降水量の極小は12月の45.0mm/月で、11月～2月の降雨は50～70mm/月前後で推移する。風向は、6月から8月は南寄りの頻度が最も高いが、それ以外は北寄りの風が卓越する。風速は3月に極大となるが、月ごとの変動

は大きくない。また、年間日照時間は2,091.6時間で、梅雨期の6月に極小(149.9h/月)、夏季の8月に極大(200.4h/月)となり、6月を除き各月とも150時間/月を越える。

表 2-2 名古屋の気候表(1981~2010年の平年値)

| 要素   | 降水量           | 気温            |               |               | 風向・風速         |               | 日照時間          |
|------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|
|      | (mm)          | (°C)          |               |               | (m/s)         |               | (時間)          |
|      | 合計            | 平均            | 最高            | 最低            | 平均            | 最多風向          | 合計            |
| 統計期間 | 1981<br>~2010 | 1981<br>~2010 | 1981<br>~2010 | 1981<br>~2010 | 1981<br>~2010 | 1990<br>~2010 | 1981<br>~2010 |
| 資料年数 | 30            | 30            | 30            | 30            | 30            | 21            | 30            |
| 1月   | 48.4          | 4.5           | 9.0           | 0.8           | 3.1           | 北北西           | 170.1         |
| 2月   | 65.6          | 5.2           | 10.1          | 1.1           | 3.4           | 北北西           | 170.0         |
| 3月   | 121.8         | 8.7           | 13.9          | 4.2           | 3.5           | 北北西           | 189.1         |
| 4月   | 124.8         | 14.4          | 19.9          | 9.6           | 3.3           | 北北西           | 196.6         |
| 5月   | 156.5         | 18.9          | 24.1          | 14.5          | 3.0           | 北北西           | 197.5         |
| 6月   | 201.0         | 22.7          | 27.2          | 19.0          | 2.7           | 南南東           | 149.9         |
| 7月   | 203.6         | 26.4          | 30.8          | 23.0          | 2.7           | 南南東           | 164.3         |
| 8月   | 126.3         | 27.8          | 32.8          | 24.3          | 2.9           | 南南東           | 200.4         |
| 9月   | 234.4         | 24.1          | 28.6          | 20.7          | 2.7           | 北北西           | 151.0         |
| 10月  | 128.3         | 18.1          | 22.8          | 14.1          | 2.6           | 北北西           | 169.0         |
| 11月  | 79.7          | 12.2          | 17.0          | 8.1           | 2.6           | 北北西           | 162.7         |
| 12月  | 45.0          | 7.0           | 11.6          | 3.1           | 2.8           | 北北西           | 172.2         |
| 年    | 1,535.3       | 15.8          | 20.7          | 11.9          | 2.9           | 北北西           | 2,091.6       |

「日本気候表(気象庁,2011)」による名古屋地方気象台の平年値。

統計期間は1981~2010年の30年間。但し最多風向は、1990~2010年の21年間。

### (3) 地形及び地質の概要

本図幅の範囲は、愛知県の西部に位置し、東側には丘陵状の山地が連なり、台地面を挟んで、北西部は濃尾平野の低地の末端部分となっている。また、図幅中央から南東にかけては埋立地や干拓地など人工的に形成された陸地が広がっており、伊勢湾の北端、名古屋港に面している。

地形についてみると、図幅の南西端で木曾川が伊勢湾に注ぎ、北西部はこの木曾川の三角州の末端で、旧河道の入り組んだ低湿地帯となっている。その南側は干拓地帯となっており、これらの地域は、古くから農業的に最も高度に利用されてきた地域である。しかし、もともと低湿地帯や干拓地で標高の低い地域であったところに、近年、農地の土壌中塩分の除去や工業用水利用を目的とした地下水の汲み上げが活発に行われた影響で、広い範囲で地盤沈下が発生し、海拔0m地帯となっている。

図幅の南東部は、知多半島の付け根部にあたり、知多半島の主体をなす大府-東海丘陵が、北東部は尾張丘陵が、それぞれ連続して南北に連なっており、近年、名古屋都心

部のベッドタウンとして大規模な宅地造成が行われている。

尾張丘陵の西側には、本図幅北側の「名古屋北部」から台地面が続き、台地上には名古屋市を中心市街地が形成されている。

地質についてみると、本図幅内は鮮新世以降の堆積物で構成され、固結堆積物は分布しない。丘陵部を構成する地層は、半固結の砂・粘土・礫からなり、これを覆って更新世中・後期の地層が、多くは平坦面をつくって分布する。これらのそうは砂を主体とする熱田層（名古屋市街地一帯）を除いて全て礫層であり、一部に粘土層をはさむ。

濃尾平野では、沖積層がその最上部を構成し、未固結の砂・粘土からなる。丘陵部で見られる地層は、濃尾平野の地下に連続して分布し、これらの地層は一般に南西へ傾斜している。濃尾平野地域は、ところによっては厚い沖積層が分布し、近年では地下水汲み上げ等に起因する地盤沈下によって0 m地帯となっている地域が多く、水害、軟弱地盤による震災など、自然災害による被害を受けやすい地域といえる。

(5万分の1土地分類基本調査「桑名・名古屋南部」説明書による)。

### 3 調査地域の地形及び土地の開発、保全及び利用との関係

#### 3.1 地形概説

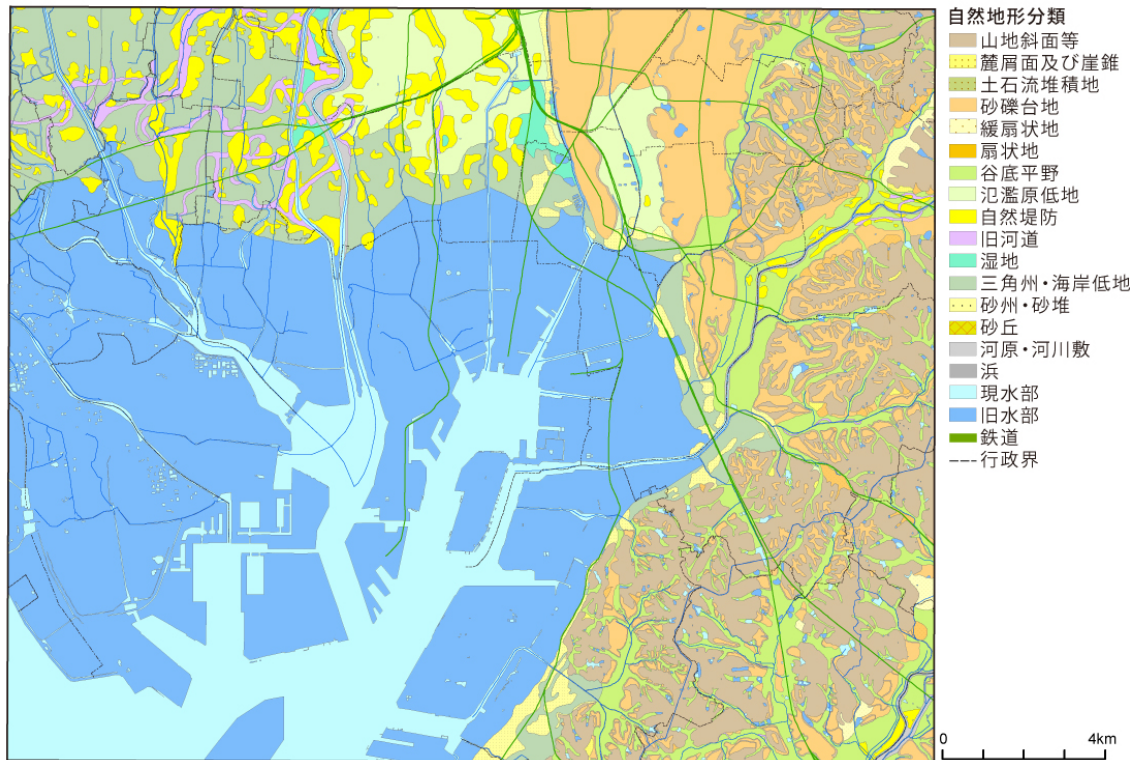


図 3-1 名古屋南部地域の自然地形分類図

本図幅は濃尾平野南部から知多半島北部にあたり、中部地方の中心都市である名古屋市が調査地域のほぼ半分（約 206km<sup>2</sup>、表 3-1）を占める。自然地形は丘陵地、台地、低地および水部に分類され、標高 0 m 以下の低地と 100m 前後の丘陵地があり、約 20km 四方の図郭内に約 100m の高低差を持つ（図 3-1）。1/20 万程度の小縮尺で濃尾平野全体をみると、東部には「豊田」図にあるよう猿投山の山地や丘陵地が、本図や「名古屋北部」図には台地や扇状地が発達する。台地や扇状地は沖積低地へ埋没して低地へと漸移し、南は伊勢湾まで、西は養老山地東縁まで続く。このように濃尾平野は東ほど高く西ほど低い地形構造となっており、これは猿投山断層と養老断層に限られた間の地塊が西方に傾き沈む濃尾傾動（地塊）運動によるもので、沈降部分に河成堆積物や海成堆積物が充填されて現在の低地がつけられたと考えられている（桑原、1968）。沈降速度は養老断層の影響も受けて 1 m/1000 年と推定されている（須貝・杉山、1999）。

本図幅の東半分は尾張丘陵とも総称される**丘陵地**で、北から南へと東山丘陵、豊明丘陵、知多丘陵が連なる。東山丘陵と豊明丘陵の間は天白川の谷底低地で、豊明丘陵と知多丘陵は大高川と鞍流瀬川（大高-共和-大府）を結ぶ谷底低地で隔てられる。丘陵の頂部は概ねなだらかで、東山丘陵では標高 100m 前後あるが、豊明丘陵では約 60～80m、知多丘陵では 50m 前後と、南へ向かって低下する。斜面は急傾斜で侵食が進み、狭長な

谷底低地は樹枝状に幾筋も形成されている。

丘陵地の地質は名称こそ異なるが概ね同様である。東山丘陵および豊明丘陵では、砂礫、砂、シルト、粘土からなる鮮新世の東海層群矢田川累層が、更新世の唐山層や八事層などの高位礫層に不整合に覆われている。丘陵背面は矢田川累層を切る猪高面である（坂本ほか、1986）。八事層は高位面相当の八事面を形成し、さらに八事層が侵食されて上位面相当の覚王山面となる。知多丘陵は松田（1969）に詳しく、東山丘陵や豊明丘陵に対応した各地層や地形面が認められている。東海層群は常滑層群に、猪高面は横須賀小起伏面に、唐山層及び八事層は加木屋層に相当するが、各地形面の発達には地域的な差異がある。

丘陵地は、宅地造成による大規模な切り盛り造成が進み、とりわけ名古屋市街地に近い東山丘陵と豊明丘陵北部では著しい。豊明丘陵南部や知多丘陵では農業的な性格が強くなる地域であり、切り盛り造成による農地もみられる。

**台地**は、海や河川の堆積または浸食作用によって形成された広い平坦面を持つ地形で、砂や礫などの堆積物がみられる。段丘はその堆積物に火山灰などの時代指標が含まれている場合や、他の地形面との関係を読み取って発達史を検討することで、地形の絶対的あるいは相対的な形成年代を推定することが可能である。本図幅においては高位、上位、中位、下位、低位に相当する砂礫段丘が発達し、その形態は熱田台地のような広い平坦面から、丘陵頂部あるいは麓にみられる小規模なものまで多様である。高位面および上位面は丘陵地の頂部にみられるもので、丘陵地の項で述べた通りである。中位面は名古屋市街地が乗る熱田台地をはじめ、天白川、扇川、境川の各流域や、丘陵地の周縁に認められるなど、本図幅の東側には広く分布する。熱田台地の中央を谷状に窪ませているのは、下位面相当の大曾根面である。低位面は、熱田台地南部の笠寺周縁や天白川右岸に広がりを見せる。丘陵地内の谷底低地にも、小規模な下位面や低位面がみられる。本図幅の東南部には西三河台地の一部が含まれ、碧海面と称される熱田面に相当する中位面が分布する。台地と低地との境は明瞭な崖や斜面で隔てられる場合と、大曾根面のように沖積面へ埋没し不明瞭な場合がある。成因と形成年代については、熱田台地と西三河台地は更新世後期の海進時に形成された堆積段丘で、他は河成段丘である。

台地は低地より高く平坦なため、居住地や農地として人々の暮らしの舞台となってきた地形である。本図幅においても熱田台地や周辺の上位面、中位面は建物や交通用地として都市的な利用がなされ、豊明丘陵や知多丘陵周縁の小規模な段丘面は畑、桑畑、果樹園など農業的土地利用の適地である。

**低地**は、河川が運搬してきた砂や泥を河道や河口周辺に堆積させる場所である。濃尾平野では従来から微地形や沖積層に関する地形学的、地質学的な多数の研究が行われ、地形発達史や地質構造が明らかにされてきた（例えば井関：1956、松田：1967、国土地理院：1975a、海津：1988 など）。地形分類図は、国土地理院（1968、1975b）、愛知県（1985）、建設省（1979）、国土交通省（2004）などの複数の機関により調査、作製、改訂などが行われている。昭和 31（1956）年に作製された「木曾川下流濃尾平野水害地形分類図」（大矢、1956）は、昭和 34（1959）年の伊勢湾台風の浸水被害地域と微地形分布とが対応し、水害における微地形分類の重要性が認識されると共に、国土地理院の土地条件調査が開始される契機にもなった。

本図幅の中央には、庄内川下流域の氾濫原低地が広がる。氾濫原低地は河川が勾配の小さな低地で蛇行を繰り返して土砂を堆積させた地形で、かつての河川跡である旧河道や、河道に沿って砂などの粗流物質が堆積した微高地の自然堤防、その背後で排水環境が悪くなったために形成される湿地など、低地における典型的な地形配列がみられる。庄内川以西にはさらに低湿な濃尾平野の海津・蟹江三角州地帯が続き、小規模な自然堤防や幾筋もの旧河道が認められる。沿岸部の前面は江戸時代以降の干拓地と埋立地による人工地形であり、本図幅では自然の海岸線が失われている。

低地において自然堤防や三角州の形態や形成時代は、気候変動や地殻変動に伴って変化する海と河川との作用のバランスに左右される。海津（1979）によると、濃尾平野では縄文海進時には、海岸線が大垣-稲沢-名古屋市西部付近で現在よりも北側にあり、岐阜県側へ入り込んでいたと考えられている。その後も、小規模な海水準変動を繰り返しながら海岸線を南側へシフトさせ、1600年頃に現在の水準に達したようである（小野、2004）。沖積層の層序は、沖積層基底礫層の上に下部砂層、中部泥層、上部砂層、最上部砂層・泥層で構成される。このうち中部泥層より上位は縄文海進以降の三角州を形成していた層、最上部砂層・泥層は洪水・氾濫堆積物である（山口ほか、2006）。

名古屋市南部、熱田台地の南側の氾濫原低地や、知多丘陵の海岸線に沿った狭長な低地、丘陵地内を開析する天白川や境川などの河川も谷底低地を形成する。丘陵と谷底低地との間には小規模な扇状地がある地域や、谷底低地と三角州との境界には砂州・砂堆の堆積地形も確認出来る。

低地は水害の危険性が高いが、古くから人々は微高地を活用して住居や畑をつくり、低地は水田として利用したことで軟弱地盤への開発が自ずと抑制されてきた。しかし都市化や工業化に伴う地域の変容と共に、氾濫原低地や谷底低地、さらに干拓地や埋立地の宅地化や工業化が進むことになった。

表 3-1 は、自然地形を本図幅における市区町村ごとの面積の集計結果である。

表 3-1 調査地域内の市区町村別地形分類面積

| 区分  | 名古屋市         |      |       |      |       |       |      |       |       |       |       |       |       | 愛知県    |       |      |       |       |       |      |       |      |      | 計     |       |      |       |       |      |       |        |        |
|-----|--------------|------|-------|------|-------|-------|------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|-------|------|-------|-------|-------|------|-------|------|------|-------|-------|------|-------|-------|------|-------|--------|--------|
|     | 千種区          | 東区   | 中村区   | 中区   | 昭和区   | 瑞穂区   | 熱田区  | 中川区   | 津区    | 南区    | 緑区    | 名東区   | 天白区   | 小計     | 津島市   | 刈谷市  | 東海市   | 大府市   | 大治町   | 知多市  | 蟹江町   | 豊明市  | 愛西市  |       | 弥富市   | あま市  | 東浦町   | 飛島村   | 三惠島  | 所属未定  |        |        |
| 山地  | 山地斜面等        | 3.81 | 0.00  | -    | 0.22  | 2.32  | 1.92 | 0.13  | -     | -     | 0.47  | 14.77 | 1.37  | 6.44   | 31.25 | -    | 0.13  | 8.57  | 13.07 | -    | -     | -    | -    | -     | -     | -    | -     | -     | -    | -     | 56.74  |        |
|     | 農耕地及び農地      | -    | -     | -    | -     | -     | -    | -     | -     | -     | -     | 0.11  | -     | 0.19   | 0.30  | -    | -     | 0.08  | -     | -    | -     | -    | -    | -     | -     | -    | -     | -     | -    | -     | 0.38   |        |
|     | 土石流発露地       | -    | -     | -    | -     | -     | -    | -     | -     | -     | -     | 0.01  | -     | -      | 0.01  | -    | -     | -     | -     | -    | -     | -    | -    | -     | -     | -    | -     | -     | -    | -     | 0.01   |        |
| 山地計 | 3.81         | 0.00 | 0.00  | 0.22 | 2.32  | 1.92  | 0.13 | 0.00  | 0.00  | 0.47  | 14.89 | 1.37  | 6.63  | 31.56  | 0.00  | 0.13 | 8.65  | 13.07 | 0.00  | 0.00 | 0.00  | 0.00 | 0.00 | 0.00  | 0.00  | 0.00 | 0.00  | 0.00  | 0.00 | 57.13 |        |        |
| 低地  | 砂礫台地         | 3.82 | 0.02  | -    | 5.90  | 5.45  | 4.75 | 1.47  | -     | -     | 2.14  | 4.90  | 0.01  | 3.34   | 31.90 | -    | 0.35  | 1.81  | 3.55  | -    | -     | -    | -    | -     | -     | -    | -     | -     | -    | -     | 38.06  |        |
|     | 扇状地          | -    | -     | -    | 0.08  | -     | -    | -     | -     | -     | -     | -     | -     | -      | -     | -    | -     | -     | -     | -    | -     | -    | -    | -     | -     | -    | -     | -     | -    | -     | 1.42   |        |
|     | 扇状地          | -    | -     | -    | -     | 0.29  | -    | -     | -     | -     | -     | 0.53  | 0.14  | 0.63   | 1.59  | -    | -     | 0.08  | 0.14  | -    | -     | -    | -    | -     | -     | -    | -     | -     | -    | -     | 1.90   |        |
|     | 砂堆低地         | 1.99 | -     | -    | 1.46  | 1.47  | -    | -     | -     | -     | 1.96  | 8.56  | 0.29  | 3.31   | 17.04 | -    | 0.81  | 3.72  | 8.26  | -    | -     | -    | -    | -     | -     | 0.00 | -     | -     | -    | -     | 30.85  |        |
|     | 氾濫原低地        | -    | -     | 8.17 | 0.64  | 1.34  | 1.00 | 1.62  | 4.75  | -     | -     | 0.04  | -     | -      | 15.65 | -    | -     | -     | -     | -    | -     | -    | -    | -     | -     | -    | -     | -     | -    | -     | 15.65  |        |
|     | 扇状地          | -    | -     | 3.06 | -     | -     | 0.10 | 0.01  | 8.92  | 0.25  | 0.03  | -     | -     | 0.96   | 11.33 | 1.18 | 0.10  | -     | 0.23  | 0.76 | -     | 1.27 | -    | 0.43  | -     | 1.04 | -     | -     | -    | -     | -      | 19.34  |
|     | 旧河道          | -    | -     | 0.07 | -     | -     | -    | -     | 2.01  | 0.02  | -     | 0.06  | 0.01  | 0.22   | 2.30  | 0.55 | -     | 0.02  | 0.39  | -    | 0.87  | -    | 0.16 | -     | 0.82  | -    | -     | -     | -    | -     | -      | 5.00   |
|     | 湿地           | -    | -     | -    | -     | 0.04  | 0.08 | 0.33  | 1.35  | -     | -     | -     | -     | -      | 1.80  | -    | -     | -     | -     | 0.17 | -     | -    | -    | -     | -     | -    | -     | -     | -    | -     | -      | 1.97   |
|     | 三角州・海岸低地     | -    | -     | -    | -     | 0.46  | 1.52 | 11.52 | 0.53  | 1.79  | 1.57  | -     | -     | 17.39  | 7.47  | -    | 1.97  | -     | 0.57  | 0.01 | 3.71  | -    | 1.91 | 0.17  | 2.47  | -    | -     | -     | -    | -     | -      | 35.87  |
|     | 砂州・砂堆(環洲・埋堆) | -    | -     | 0.16 | -     | 0.23  | 0.82 | 0.29  | -     | 1.06  | 0.84  | -     | -     | 3.20   | -     | -    | 2.14  | -     | -     | 0.14 | -     | -    | -    | -     | -     | -    | -     | -     | -    | -     | -      | 5.48   |
|     | 砂丘           | -    | -     | -    | -     | -     | -    | -     | -     | -     | -     | -     | -     | 0.00   | -     | -    | -     | -     | -     | -    | -     | -    | -    | -     | -     | -    | -     | -     | -    | -     | -      | -      |
|     | 河原・河川敷       | -    | -     | 0.42 | -     | -     | 0.04 | -     | 0.73  | 0.01  | 0.10  | 0.10  | -     | 0.34   | 1.74  | -    | 0.35  | 0.00  | 0.10  | 0.11 | -     | 0.00 | -    | -     | -     | -    | -     | -     | -    | -     | -      | 2.30   |
|     | 浜            | -    | -     | -    | -     | -     | -    | -     | -     | -     | -     | -     | -     | -      | 0.00  | -    | -     | -     | -     | -    | -     | -    | -    | -     | -     | -    | -     | -     | -    | -     | -      | -      |
| 低地計 | 1.99         | 0.00 | 9.88  | 0.64 | 2.92  | 3.76  | 4.30 | 27.57 | 0.81  | 4.94  | 9.50  | 0.56  | 8.02  | 72.89  | 9.20  | 1.26 | 7.91  | 9.11  | 2.00  | 0.15 | 5.85  | 1.41 | 2.50 | 0.17  | 4.13  | 0.00 | 0.00  | 0.00  | 0.00 | 0.00  | 116.58 |        |
| 水郷  | 埋立部          | 0.05 | -     | 0.18 | 0.08  | 0.07  | 0.13 | 0.24  | 1.50  | 7.28  | 0.61  | 0.02  | 0.03  | 0.24   | 11.33 | 0.40 | 0.13  | 1.20  | 0.48  | 0.13 | 0.03  | 1.28 | 0.10 | 0.27  | 1.88  | 0.11 | 0.00  | 3.45  | 0.00 | 0.52  | 0.00   | 21.31  |
|     | 旧水郷          | 0.21 | -     | 0.01 | 0.05  | 0.17  | 0.63 | 2.09  | 2.95  | 40.69 | 10.32 | 1.16  | 0.05  | 0.16   | 58.46 | 0.13 | 0.00  | 16.81 | 0.46  | 0.00 | 1.36  | 3.96 | 0.06 | 1.91  | 33.06 | 0.00 | -     | 19.63 | 0.82 | 3.84  | 1.95   | 142.48 |
|     | 水郷計          | 0.26 | 0.00  | 0.19 | 0.13  | 0.24  | 0.76 | 2.33  | 4.45  | 47.97 | 10.93 | 2.08  | 0.08  | 0.40   | 69.82 | 0.53 | 0.13  | 18.01 | 0.94  | 0.13 | 1.41  | 5.24 | 0.16 | 2.18  | 34.94 | 0.11 | 0.00  | 23.08 | 0.82 | 5.17  | 1.95   | 163.80 |
| 合計  | 5.78         | 0.02 | 10.07 | 8.69 | 10.93 | 11.19 | 8.23 | 32.02 | 48.78 | 18.48 | 31.37 | 2.02  | 16.39 | 206.17 | 9.73  | 1.87 | 36.48 | 26.67 | 2.13  | 1.96 | 11.09 | 5.94 | 4.66 | 35.11 | 4.24  | 0.00 | 23.08 | 0.82  | 5.17 | 1.95  | 375.97 |        |

資料：「自然地形及び人工地形分類図」の図上計測による。

注：所属未定は名古屋港ポートアイランド地区。

### 3.2 地形細説

本図幅における地形地域区分は、20 万分の 1 土地分類基本調査（経済企画庁、1974）（国土庁、1975）、5 万分の 1 土地分類基本調査（地形分類図）（経済企画庁：1972、愛知県：1985、1986、岐阜県：1984、1986）、その他の文献（例えば町田・海津ほか、2006 など）を参考に、本調査として、濃尾平野全域で統一の区分及び呼称を採用した（図 3-2）。

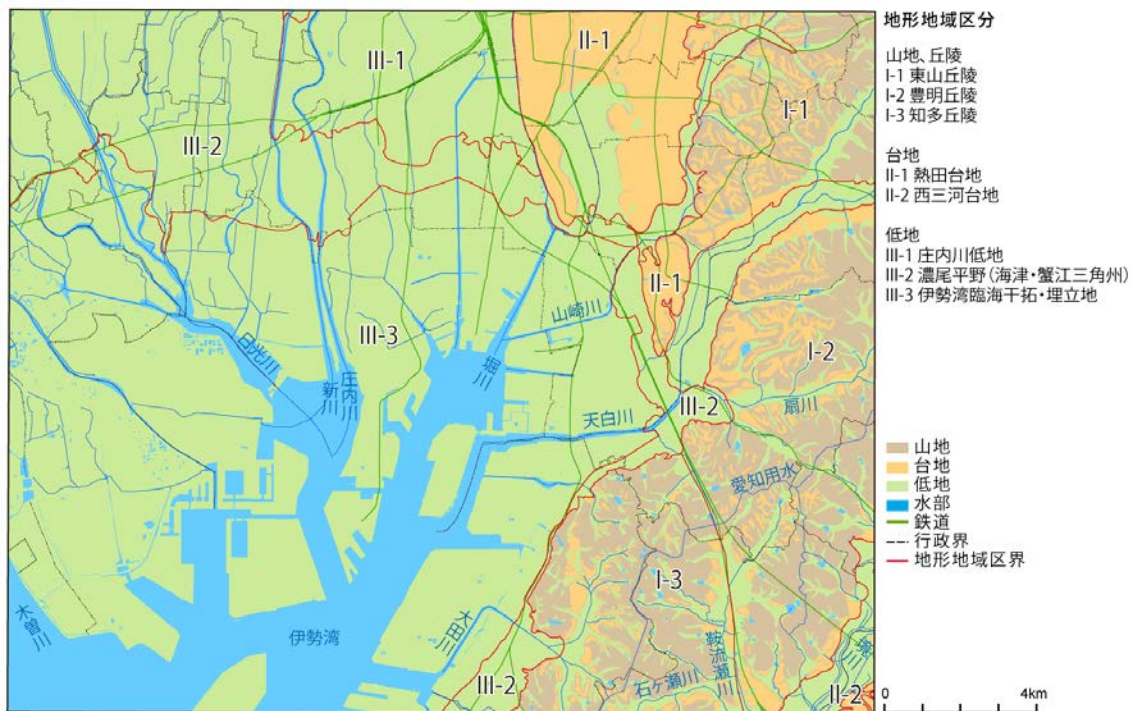


図 3-2 調査地域における地形地域区分

#### (1) 丘陵地

**東山丘陵（I-1）**は、「瀬戸」、「豊田」、「名古屋南部」の3図面にかけて広がる丘陵地で、東山動植物園の周辺では標高 100mほどになり、南西へ向かって高度を下げ、八事周辺で約 60m、それより南では約 30mである。丘陵頂部には八事面が発達し、斜面は比較的緩く侵食が進む。八事面を形成する八事層は数 cm 大のチャート礫からなり、北西の一部では礫、砂、シルトからなる唐山層が八事層を不整合に覆う（坂本ほか、1986）。唐山層は堆積面を持たないことと、八事層よりは古く更新世前期から中期頃に形成されたことは推察されているが、詳細は解明されていない。また八事面は、丘陵背面の猪高面よりも相対的に侵食に強いいため標高が高く、丘陵背面とは地形の逆転を起こしている。上位段丘の覚王山面は、千種区覚王山周辺を模式地とする標高 40～50mの段丘で、平坦面の発達が良い。

本図幅の北東端、名東区亀の井や代万町、植田周辺では丘陵地の人工平坦化が進み、自然地形が不明瞭である。名古屋大学、名城大学などの規模の大きい学校なども丘陵地を切り開いてキャンパスを造成しているところがみられる。丘陵南西端の瑞穂運動場は

切土地で、造成時に縄文時代の貝塚（大曲輪貝塚）が発見された。八事周辺は大正末から昭和初期に開発され、地形に対応した道路を建設するなど住宅地として自然との共存を試みられた（堀田、1995）。その結果、丘陵地に造成された住宅地でありながら、自然地形の改変は小規模で、丘陵頂部の段丘面や斜面の小改変に留まっている。

東山丘陵の南に続く**豊明丘陵**（I-2）は、東山丘陵とほぼ同様に矢田川累層とそれらを不整合に覆う八事層からなる。段丘は丘陵頂部の高位面と、それより一段低い面が確認できる。丘陵は開析が進み、谷底低地やその支谷が複雑に入り組む。狭長な谷底低地は古くから街道や鉄道などの交通用地として利用され、宿場町の形成や合戦の舞台になるなど、人々の暮らしと密に関わってきた。現在の様子を見ると、古い集落は周縁の小規模な台地上にみられるが、丘陵地の大半で住宅地建設のための大規模な造成が行われ、自然地形は大きく損なわれている。丘陵南部では宅地造成に伴う改変工事中の地域がある。島田から若田にかけては名古屋第二環状自動車道の造成地で、2011年3月に開通した。

**知多丘陵**（I-3）は知多半島北部にあたり、前述の通り地質は東山丘陵および豊明丘陵と同様である。丘陵周縁部には中位、下位段丘がみられるが、頂部には発達しない。石ヶ瀬川や大田川の支谷は丘陵の内部まで侵食し、谷底低地を延長させている。知多丘陵の土地利用は、他の2つの丘陵と異なり農業的土地利用が多いことが特徴である。丘陵の分水嶺には愛知用水が敷かれ、周辺地域を潤しながら半島南部まで導水されている。住宅の造成に伴う人工平坦地は、丘陵北部や東海市富貴ノ台、上ノ台の大府飛行場跡地などにみられる。丘陵の中心の一部には農地造成による人工平坦地もあるが、概ね自然地形が取り残されている。

なお、豊明丘陵南東部には猿投-境川断層が、知多丘陵東縁には大高-大府断層が、同丘陵東部には加木屋断層（活断層研究会：1980、1991、国土地理院：1996など）が認められている。それぞれ段丘面を変位させているため、詳細は台地の項目で述べる。

## （2）台地・盆地

調査地域では高位～低位の各段丘が確認されているが、高位、上位面は丘陵地内で述べた。そのため、本項では中位～低位面相当の段丘を中心に解説する。また、本図幅および周辺図幅の地形面の対比を表3-2に示した。

**熱田台地**（II-1）は、北隣「名古屋北部」図幅から続き、名古屋の中心市街を乗せる台地である。標高30～10m前後の平坦面で、西縁の崖と東縁および南縁も斜面によって丘陵地や低地と境されている。熱田台地の平坦面は、熱田層が形成する中位面相当の熱田面である。熱田層は約8～15万年前の海成粘土層よりなる下部層と、その後、約4万年前までに堆積した上部砂層の2層からなり、シルトや軽石もはさむ（土質工学会、1988）。西部は東西方向の短い谷が数本みられる程度で、起伏はほとんどない。東側の千種区や昭和区では段丘上に浅い谷が発達し、旧水部で表されたかつての池がみられるように起伏がある。本図幅における明治期の土地利用図をみると、このような場所は田であったことがわかる。久屋大通りから今池にかけては、熱田面より一段低く、台地の中央を約1.5kmの谷幅を持って南北に貫く大曾根面が分布する。大曾根面は熱田台地の北側を流れる旧矢田川が、1.8～2万年前の最終氷期極大期に熱田面を侵食して形成し



た下位段丘面で、層厚5～6mの大曾根礫層を持ち、北から南へかけて高度を下げながら鶴舞公園以南で沖積面下に没する（愛知県：1985、坂本ほか：1986 など）。笠寺周辺に島状に発達する台地は北側の台地より開析が進んでいるが、熱田台地の延長と考えられ、熱田面とその周縁には一段低い下位面が発達する。

熱田面では概ね平坦であることから、人工平坦地は少ない。段丘面上の浅い谷は盛土や埋土がされて市街地になり、かつての池や水田のような軟弱な場所は不明瞭で、一部の地名にかつて池があったことや田であったことを想起させる程度である。JR金山駅は熱田面を切り取り、線路を台地の西から東へ通した切土地である。大曾根面南端の人工平坦地は鶴舞公園で、明治後期に新堀川の開削による残留土砂を利用して造成した公園である（名古屋市みどりの協会、2012）。名古屋市営地下鉄名城線は、久屋大通駅から金山駅までの間を熱田面と大曾根面に沿うように走る。

**西三河台地**（II-2）は本図幅の南東端、境川左岸にみられる。東隣「豊田」図幅では広く発達し、本図幅にはその西端が含まれる。低地とは明瞭な崖で隔てられ、台地面である碧海面は熱田台地東部と同様に極めて平坦で、中位面に相当する。碧海面をつくる碧海層は、河口-海浜成の堆積物で熱田層に対比される（坂本ほか、1986）。台地上は平坦面を利用した刈谷市街である。

**その他の台地**には、丘陵地を開析する天白川、扇川、境川右岸、鞍流瀬川、石ヶ瀬川、大田川の各流域で中位面から下位面に相当する小規模な段丘がみられる。しかし、低位面相当の段丘面はほとんどみられない。中位、下位面は主に住宅地として利用され、畑や果樹園などの農地は少ない。

表 3-2 名古屋および周辺の地形面・地層との対比（愛知県、1986）

| 地域／地形面<br>分類・構成層 | 春日井    |       | 名古屋    |         | 矢作川流域      |       |
|------------------|--------|-------|--------|---------|------------|-------|
|                  | 沖積面    | 沖積層   | 沖積面    | 南陽層、濃尾層 | 沖積面        | 沖積層   |
| 低位               | 鳥居末面   | 鳥居末礫層 | (矢田川面) | (矢田川礫層) | 籠川面(上・下2段) | (籠川層) |
| 下位               | 小牧面    | 小牧礫層  | 大曾根面   | 大曾根礫層   | 越戸面        | 越戸層   |
| 中位               | 田楽面    | 田楽礫層  | 熱田面    | 熱田層     | 碧海面        | 碧海層   |
| 上位               | 高位段丘Ⅲ面 | 桃山礫層  | 覚王山面   |         | 拳母面        | 拳母層   |
|                  | 高位段丘Ⅱ面 | 桃花園礫層 |        |         |            |       |
| 高位               | 高位段丘Ⅰ面 | 潮見坂礫層 | 八事面    | 八事層     | 三好面        | 三好層   |
|                  | 上末面    | 上末層   |        | 唐山層     |            |       |
| 丘陵背面             | 猪高面    | 矢田川累層 | 猪高面    | 矢田川累層   | 藤岡面        | 矢田川累層 |
|                  |        |       |        | (猪高部層)  |            |       |

資料：春日井団研グループ（1971）、国土地理院（1968）、坂本ほか（1984）、町田ほか（1962）

なお、本図幅では猿投-高浜断層帯に属する複数の活断層が確認されている。境川右岸では、猿投-境川断層から続く高根山撓曲による段丘の変形がみられる。猿投-境川断層は西側隆起の逆断層で、単位変位量は上下成分で約4m、平均変位速度は0.1m/1000年、活動周期は約4万年と想定される。大府市の鞍流瀬川の右岸の法林坊から石ヶ瀬川の合流点にかけては大高-大府断層が推定されている。中位、下位段丘を変位させてはいるが、年代などの資料は得られていない。大田川上流の東海市寺中から南方へは加木

屋断層が知られている。東側隆起の逆断層で、南知多町まで全長約 35km に及ぶ。加木屋断層については単位変位量や活動間隔を直接示す資料が得られていないが、段丘の変位から単位変位量は約 3 m、段丘の変位量から平均変位速度は 0.1m/1000 年程度、活動間隔は 3 万年程度と推定されている（地震調査研究推進本部地震調査委員会：2004、国土地理院：1996）。

### (3) 低地

**庄内川低地**（III-1）を形づくる庄内川は、恵那山地に端を發し、瑞浪、土岐、多治見などの各盆地を流れ下り、春日井市高蔵寺付近で平野に出る河川である。平野に出るからは西流し、清須市で南へ向きを変えて伊勢湾へ注ぐ。庄内川下流域では氾濫原低地と、南北方向に成長した自然堤防が發達しているが、濃尾平野ほど大規模ではない。自然堤防は下流ほど小さくなり、やがて三角州へと漸移する。春山・大矢（1986）は、庄内川低地の自然堤防の發達が小さいことについて、庄内川上流域で生産された土砂が中流域の各盆地に留まり、下流域への運搬が少ないことと、濃尾平野の影響が大きく庄内川の氾濫原低地が狭いことが影響していることを指摘している。人工地形をみると、庄内川左岸地域は名古屋市域であり、低地は微高地を除くほぼ全面が盛土を行い、住宅地あるいは工場用地などになっている。

本図幅では、濃尾平野における標高 0 m 以下の土地を**濃尾平野（海津・蟹江三角州）**（III-2）として分類した。海津・蟹江三角州は、木曾川やその支川および庄内川が河口周辺に細粒物質を堆積させた地形である。三角州では堆積場所が徐々に前進していき、前方へと拡大していく。三角州は粘土や砂層で形成されるが、粘土層のうち南陽層とよばれる浅海底堆積物は、地盤沈下を起こしやすい軟弱な粘土やシルトからなり、層厚 10～30m と西部ほど厚く堆積している。また三角州には、周囲より約 2～3 m 低い旧河道が幾筋もみられ、細砂やシルトが堆積する。これらの河道の変遷は、歴史時代における流路変遷の記録から、約 400～600 年周期で繰り返されていたことが確認されている（安田、1971）。三角州はほぼ全面が湿地状で、排水のためのクリークや複数の排水機場が設けられている。また、日光川などの多くの河川が改修工事の末に直線状の流路形態を取るが、佐屋川の三日月湖や戸田川の蛇行流路はかつての自由蛇行の名残である。

また、海津・蟹江三角州には小規模な自然堤防が形成されている。安田（1971）はこれらの自然堤防について、10 世紀中頃から 14 世紀初頭にかけて大量の土砂を供給するような気候変化があり、集中的に形成されたことを報告している。自然堤防は周囲に比べて相対的に高燥で地盤も良いことから、畑や住宅地として利用されている。

本図幅においても、庄内川左岸ではほぼ全面に盛土が行われている。庄内川以西では、自然堤防上に集落をつくり三角州面を水田として保全しているが、国道 302 号沿線や J R 蟹江駅から近鉄蟹江駅にかけての地域、津島市の永和団地などで三角州面への盛土と宅地造成がみられる。

**その他の低地**には山崎川、天白川、境川などの丘陵地を流れる河川に沿った谷底低地があげられる。いずれも幅 1 km 程の谷底低地を持ち、谷頭は丘陵地を複雑に開析する。天白川や境川低地の一部では自然堤防もみられる。豊明丘陵や知多丘陵では、谷底低地もしくは谷頭に堰堤を築いたため池が非常に多い。知多半島には水源として利用できる

大きな河川がなく、ため池により農業用水や生活用水を確保していたためである（近藤、2005）。丘陵地の河川がつくる谷底低地の前面には、小規模ながら砂州・砂堆および三角州が発達する。砂州・砂堆は北側では東海道線や国道1号に沿うように、南側では国道155号に沿って島状に、あるいは台地や丘陵の斜面直下に分布する。本図幅においては、東海市横須賀町周辺で最も広く分布する。

現在では、山崎川や天白川沿いの低地は名古屋市内という都市的な性格上、微高地を除きほぼ全面が盛土地で、住宅や工場になっている。一方、境川沿いの低地や知多丘陵を開析する谷底低地、東海市横須賀町の三角州面では水田として利用されている。また、旧水部で表示された古いため池が縮小し、谷底低地などに変わっているところもみられる。

三角州の地先、概ねJR関西本線から南側をみると自然地形は旧水部である。現在は陸地だが、人為的に排水あるいは埋め立てて陸地させた場所なので、この地域を**伊勢湾臨海干拓・埋立地**（III-3）と称する。干拓地は三角州の前面に広がる干潟に堤防を築いて締め切り、排水の後に畑や水田として利用してきた。干拓事業は17世紀から始まり、江戸末期までの250年間で最大9km（10年で360m）にも達しており、自然の堆積作用の7倍というハイペースで進んだ（馬場：1991、図3-3）。その後は事業数を減少させるが、昭和30年代には鍋田干拓地が、平成元（1989）年には木曾岬干拓地が誕生している。明治期の地形図をみると、干拓地には新田地名が付けられ、排水のための堤防と干拓地の陸地寄りに形成された集落が特徴的である。

伊勢湾岸の埋立ては、明治後期から開始された事業である。名古屋港は、今でこそ日本を代表する大型の国際港湾だが、明治以前の伊勢湾岸は河川から多量の土砂が供給量されるため水深が浅く、築港が難しい海域として知られていた（馬場、1991）。しかし明治になると、産業の変化から大型船が寄港できるような近代的な港湾が必要とされ、土木技術の進歩も追い風となって、明治36（1903）年、堀川河口周辺から埋立てがはじまり熱田港が築港された。その後、埋立ては徐々に沖合へと展開され、現在では伊勢湾全体を取り囲むように埋立地があり、港湾施設のほか工場や発電所が建設されている。

干拓地のなかでも名古屋市に属する地域では既に農地が消失し、住宅や工場へと変換している。そのため、干拓地であっても建物等があれば盛土を行っていると考え、本図幅では盛土地として分類した。農地として利用されている干拓地は蟹江町、弥富町、飛島村、東海市横須賀町周辺にみられる。



図 3-3 伊勢湾における干拓、埋立の変遷 (大矢、1993)

### 3.3 地形と土地の開発、保全及び利用との関係

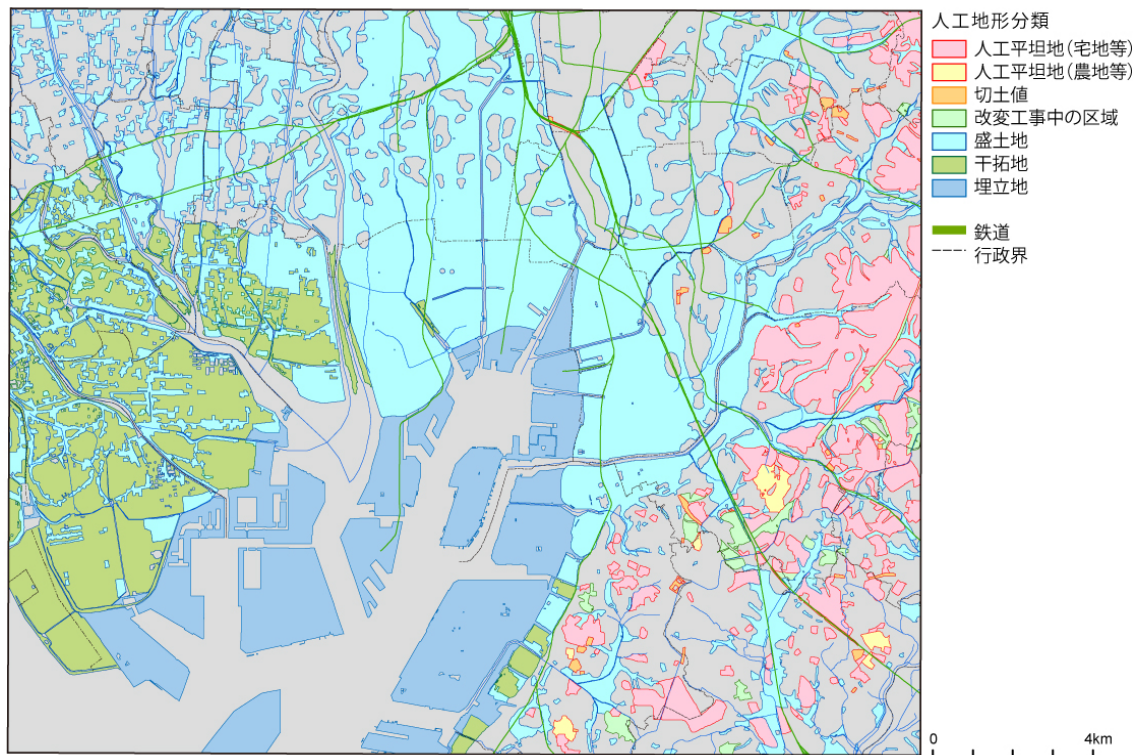


図 3-4 名古屋南部地域の人工地形分類図

本図幅における人工地形をみると、低地を中心にした盛土と丘陵地にみられる人工平坦地が目立つ(図 3-4)。名古屋市内の谷底低地や三角州などの低地では、自然堤防や砂州・砂堆の微高地を除いた全面が盛土地である。名古屋市域外の三角州や干拓地などの低地は水田であるが、鉄道駅や国道沿線においては湿地状の土地にも関わらず盛土がされ、建物が建設されている。海部・蟹江三角州では標高 0 m 以下の干拓地に対して埋立地は標高 3 ~ 5 m 程度あることから、高潮や水害時には干拓地の排水が妨げられ、浸水被害が大きくなりやすい。昭和 34 (1959) 年の伊勢湾台風では干拓地ほど浸水日数が長く、浸水期間が 3 ヶ月以上に及んだ地域もあった(建設省地理調査所、1960)。

丘陵地における人工地形は、主に住宅の大規模造成に伴う人工平坦地(宅地等)である。丘陵地の尾根を切り取り、その土砂で谷に厚く盛土を行い、緩斜面あるいは平坦面を形成した地域で、地震動による液状化や斜面崩壊、降雨による土砂災害が懸念される。特に名古屋市天白区および緑区で著しく、豊明丘陵の天白川と扇川に挟まれた地域はほぼ全域が人工平坦地である。このような造成地には本来の自然地形の面影もなく、新しい景観がつくられ、篠の風、潮見が丘、平子が丘などの新しい地名や新しい地域社会が誕生する(図 3-5)。このような土地区画整理事業は、昭和 35 (1960) 年から昭和 40 (1965) 年にかけて行われ、また、農地に対する土地改良事業も昭和 35 (1960) 年から昭和 45 (1975) 年頃がピークであった(吉田・奥部、2000)。

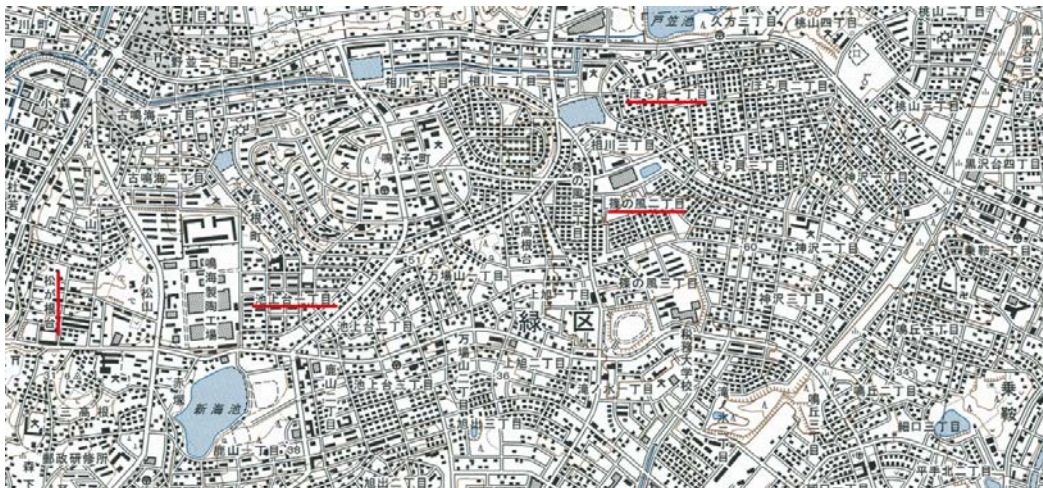
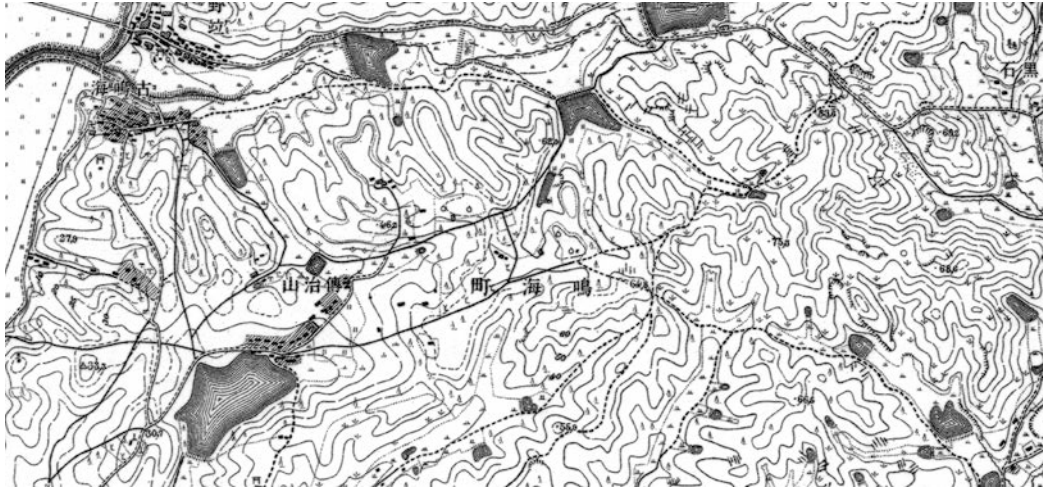


図 3-5 豊明丘陵南部地域の変遷

1:25000 地形図「名古屋南部」(上から) 大正9年測図、昭和46年修正、平成16年更新(×0.85、部分)

本地域は豊明丘陵のなかでも人工改変が著しい。大正期には古鳴海、伝治山、黒石の集落があるのみであったが、昭和期には丘陵地の起伏が崩されて住宅造成地が形成され始め、「鳴子町」「螺貝」などの新しい居住地名も誕生し始めている。平成期には全面的に住宅地となり、昭和期と比べると「篠の風」「滝ノ水」「鳴丘」などの新地名が増加している。また、「ほら貝」が昭和期の漢字表記から平仮名表記に変わっているように、「松が根台」、「池上台一丁目」なども昭和期の地名から変更された地名もある。

表 3-2 調査地域内の人工地形面積

(単位: km<sup>2</sup>)

| 分類 | 人工平坦地        |       | 盛土地  | 埋立地    | 干拓地   | 切土地   | 変更工事中の区域 | 人工地形計(a) | 自然地形計(b) | (a/b)% |       |
|----|--------------|-------|------|--------|-------|-------|----------|----------|----------|--------|-------|
|    | 宅地等          | 農地等   |      |        |       |       |          |          |          |        |       |
| 山地 | 山地斜面等        | 19.94 | 1.10 | 0.63   | -     | -     | 0.75     | 2.09     | 24.52    | 56.74  | 43.2% |
|    | 麓斜面及び崖錐      | 0.16  | 0.02 | 0.00   | -     | -     | -        | -        | 0.18     | 0.38   | 46.8% |
|    | 土石流堆積地       | -     | -    | -      | -     | -     | -        | -        | 0.00     | 0.01   | 0.0%  |
|    | 山地 計         | 20.10 | 1.12 | 0.63   | 0.00  | 0.00  | 0.75     | 2.09     | 24.70    | 57.13  | 43.2% |
| 台地 | 砂礫台地         | 5.08  | 0.06 | 2.42   | -     | -     | 0.29     | 0.33     | 8.19     | 38.06  | 21.5% |
| 低地 | 緩扇状地         | 0.01  | -    | 0.09   | -     | -     | 0.00     | -        | 0.09     | 1.42   | 6.6%  |
|    | 扇状地          | 0.26  | -    | 0.06   | -     | -     | 0.08     | 0.04     | 0.45     | 1.90   | 23.8% |
|    | 谷底低地         | 1.11  | 0.10 | 20.57  | -     | -     | 0.08     | 0.48     | 22.34    | 30.85  | 72.4% |
|    | 氾濫原低地        | 0.00  | -    | 15.43  | -     | -     | -        | -        | 15.43    | 15.65  | 98.6% |
|    | 自然堤防         | -     | -    | 0.24   | -     | -     | -        | -        | 0.24     | 16.34  | 1.4%  |
|    | 旧河道          | -     | -    | 3.26   | -     | -     | 0.00     | 0.01     | 3.27     | 5.00   | 65.4% |
|    | 湿地           | -     | -    | 1.87   | -     | -     | -        | -        | 1.87     | 1.97   | 95.0% |
|    | 三角洲・海岸平野     | 0.10  | 0.00 | 22.57  | -     | -     | 0.01     | -        | 22.68    | 35.67  | 63.6% |
|    | 砂州・砂堆(礫洲・礫堆) | 0.02  | -    | 0.05   | 0.01  | -     | -        | -        | 0.08     | 5.48   | 1.5%  |
|    | 砂丘           | -     | -    | -      | -     | -     | -        | -        | 0.00     | 0.00   | 0.0%  |
|    | 河原・河川敷       | -     | -    | 0.21   | -     | -     | -        | -        | 0.21     | 2.30   | 9.2%  |
|    | 浜            | -     | -    | -      | -     | -     | -        | -        | 0.00     | 0.00   | 0.0%  |
|    | 低地 計         | 1.50  | 0.10 | 64.35  | 0.01  | 0.00  | 0.17     | 0.54     | 66.67    | 116.58 | 57.2% |
| 水部 | 現水部          | -     | -    | -      | -     | -     | -        | -        | 0.00     | 21.31  | 0.0%  |
|    | 旧水部          | 0.26  | 0.02 | 55.86  | 42.07 | 43.45 | 0.03     | 0.04     | 141.73   | 142.49 | 99.5% |
|    | 水部 計         | 0.26  | 0.02 | 55.86  | 42.07 | 43.45 | 0.03     | 0.04     | 141.73   | 163.80 | 86.5% |
| 合計 |              | 26.94 | 1.30 | 123.29 | 42.08 | 43.45 | 1.25     | 3.01     | 241.32   | 375.57 | 64.3% |

「自然地形及び人工地形分類図」の図上計測による。

人工地形の面積を改変前の自然地形の分類別に集計したものが表 3-2 で、自然地形の約 64%が人為的に改変されたことがわかる。自然地形の中分類ごとに改変率をみると、山地で約 43%、台地で約 21%、低地では約 57%、水部においては約 86%にのぼる。

山地では山地斜面のうち宅地等の人工平坦地への改変が約 19km<sup>2</sup>を占め、丘陵地の住宅造成の多さを示す。改変工事中の約 2 km<sup>2</sup>は高速道路の建設のほかは、住宅造成に伴うもので、後々、宅地等へ移行するものと考えられる。

台地における人工平坦地は、東山丘陵や豊明丘陵において山地斜面と共に八事面などの段丘を含めて改変した場所である。台地の盛土地は凹地や浅い谷への盛土を表す。低地では三角洲・海岸平野および旧河道が各々約 60%以上も盛土地となり、谷底低地でも約 70%、氾濫原低地では約 98%と概ね全域で盛土地になる。谷底低地では約 1 km<sup>2</sup>が人工平坦地(宅地等)へ改変されているが、これは切り盛り造成で本来の谷底低地が判読できないほどの厚い盛土地を指す。住宅造成地などにおいて、谷底低地の谷筋が判読できる場合には、前者と区別して通常の盛土地として分類している。

水部においては、旧水部の約 99%が消失している。調査地域においては臨海部の干拓や埋立てが主な要因であるが、丘陵地での住宅造成や、谷底低地のため池やあるいは河川改修に伴う埋土なども含まれ、いずれも地盤条件は悪い。

### 3.4 地形と災害及び保全との関係

本図幅において地形条件と密接な関係を有する自然災害としては、地震における低地部の建物被害（軟弱地盤地での建物被害、液状化被害など）、地形の人工改変を誘因とする地盤災害（地震による造成地の崩壊、地盤変形等）、低地への宅地の拡大に伴う浸水被害等の増加（従来の水田冠水が宅地浸水となるような被害対象変化）、急傾斜地の崩壊や地すべり等の土砂災害等をあげることができる。

#### (1) 地震災害

本図幅を含む東海地方は、たびたび大規模な地震災害に見舞われ、明治以降では明治24（1891）年10月28日に発生した濃尾地震の被害は顕著である。総戸数に対する建物被害の割合は、本図幅では氾濫原低地、三角州の広がる西側の地域で、台地や丘陵地が占める東側に比べ、全壊率、半壊率が高くなっている。特に、庄内川河口部付近で被害が大きく、その周辺の地盤状況が悪いことがうかがい知れる。

#### (2) 降雨災害

本図幅では、図幅中部から西部にかけての広い範囲で地盤沈下量が大きく、標高が海水面より低い、いわゆる0m地帯が広がっていることから、近年においてもたびたび浸水被害が生じている。浸水地域は、氾濫原低地や三角州などの低地部の広範囲にわたり、複数回に渡り被害を受けている地域も多い。

図幅東部の山地・丘陵地では、低地部との境界線に崖が形成されている箇所が多く分布し、異常降雨時などには、かけくずれの危険性が高いといえる。



## 4 土地利用の変遷の概要

### 4.1 過去の土地利用状況の概要

#### (1) 明治 24 (1891) 年頃 (現在から概ね 120 年前) の土地利用

本図幅において最も古い地形図は、明治 24 (1891) 年測図、明治 33 (1900) 年刊行の 5 万分の 1 地形図「熱田町」<sup>※1</sup>である。同地域では時期を同じくして明治 24 (1891) 年～明治 31 (1898) 年にかけて 2 万分の 1 正式図もつくられていた。2 万 5 千分の 1 地形図はそれより 20 年以上後の大正 9 (1920) 年頃に測図、大正 13 (1924) 年頃に刊行された。

明治期の土地利用分類図 (第 1 期) は、明治 24 (1891) 年測図、明治 33 (1900) 年刊行の 5 万分の 1 地形図「熱田町」と、同じく明治 24 (1891) 年測量、明治 33 年刊行の 5 万分の 1 地形図「桑名町」(明治期と現在の地形図の図郭のずれの補正に使用<sup>※2</sup>)との判読により土地利用分類を行ったものである (図 4-1)。

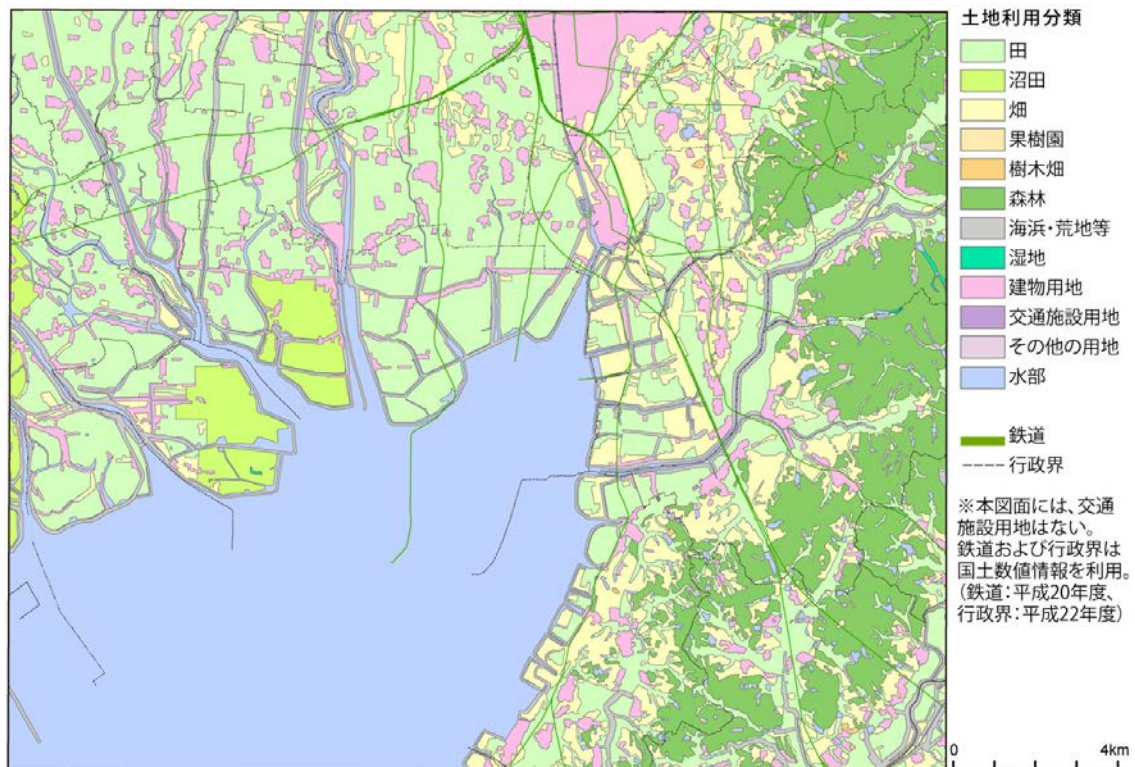


図 4-1 名古屋南部における約 120 年前 (明治 24 (1891) 年頃) の土地利用

#### ①山地・丘陵地における土地利用

本図幅の西部に広がる**東山丘陵**、**豊明丘陵**は広く森林に覆われる。森林にはため池

※1 本地域には、明治 22 (1889) 年測量、明治 25 (1892) 年製版の 5 万分 1 迅速測図「熱田」もあるが、2012 年 3 月現在、国土地理院の地形図図歴リストには未記載である。

※2 明治期の地形図図郭は測量原点の違いにより、現在の地形図図郭より 10 秒 4 東側にずれている。そのため明治期の地形図を刊行図に一致させるには、このずれの補正が必要になる。

がみられ、その数は南ほど多い。植生は主に針葉樹林だが、名古屋市天白区植田や緑区鳴海の一部は広葉樹林や松林である。山麓に発達する小規模な段丘や扇状地には畑が分布する。豊明丘陵には天白川支流が流れる狭長な谷底低地があり、水田やため池が分布している。鳴海や有松などの旧東海道の宿場町として栄えた集落もあり、地形図には街道に沿って並木が表現されている（図 4-2）。

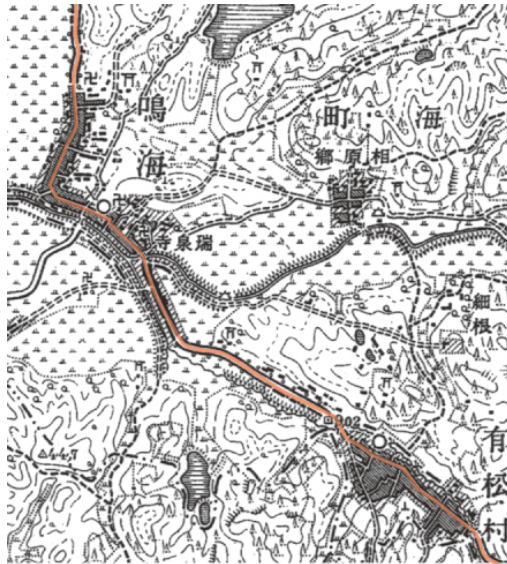


図 4-2 旧東海道の並木 1:50000 地形図「熱田町」明治 24 年測図（×1.2、部分）

旧東海道を赤で着色した。有松村から鳴海へ向かう街道に沿って丸印の並木記号が確認できる。

知多丘陵では丘陵背面を針葉樹林の森林が覆うが、海に近い名和や荒尾には広葉樹林もみられる。山腹の緩斜面から山麓の段丘や扇状地にかけては、畑の広がりが目立ち、たまねぎやふきなどを代表とする野菜栽培が行われていた。丘陵は東側を石ヶ瀬川などの境川水系に、西側は大田川の支流に開析され、谷頭部のため池と谷底低地の水田による土地利用の組み合わせが特徴的である。集落は小規模な段丘面に分布する。

#### ②台地における土地利用

熱田台地東部、千種区から瑞穂区までの平坦面は専ら畑であり、丸山、川名、石佛、常磐などの集落が点在し、山崎川の低地を挟んで呼読、笠寺、本星崎に至る台地も同様に畑と集落がみられる。台地上の凹地や浅い谷は、水田やため池として利用されている。熱田台地の西側には、碁盤の目状に区画された名古屋市街から熱田町にかけて市街地が続く。市街地は一旦、金山周辺で途切れて畑になるが、やがて熱田の市街へと繋がる。鉄道は東海道線が明治 19（1886）年に熱田駅から清洲駅間で開通し、熱田駅と名古屋駅のほぼ中間に位置する金山では熱田台地を東側から西側へと乗り越えていた。

#### ③低地における土地利用

羽島・一宮氾濫原および海部・蟹江三角州は、一宮市付近から南方へと広がり、自然堤防上の畑と集落、氾濫原低地や湿地に立地する水田という、微地形と土地利用との関係が明確な地域である。羽島・一宮氾濫原の中心地は、本調査「名古屋北部」図幅に含まれるが、本図幅にもその南端の庄内川左岸の一部が含まれる。また、庄内川

低地においても畑や集落は自然堤防に、水田は氾濫原低地や湿地に広がっている。名古屋駅は明治19(1886)年に庄内川低地上へ建設され、台地にあった名古屋市街の低地への拡大を進める要因となった。

海部・蟹江三角州においても微高地と土地利用との対応は良好で、自然堤防の発達が抑えられるに伴って畑や集落も減少し、概ね水田になっている。また、庄内川低地と海部・蟹江三角州の一部は、自然堤防を掘削して島状に畑を残し、周囲を水田として利用する島畑がつけられている(金田、1976)。

山崎川沿いの低地や天白川沿いの低地は、概ね水田として利用されている。これらの低地は上流部の丘陵地では谷底に築堤し、猫ヶ洞池、大根池、戸笠池など多くのため池をつくっている。

伊勢湾臨海干拓・埋立地では、JR関西本線以南と東岸のJR東海道本線以西および知多半島沿岸の干拓地における新田開発がみられる。土地利用は荒地で表現される築堤および集落の微高地と、干潟を排水することでつくられた低湿地の水田あるいは沼田が配置され、干拓年代が新しいほどその配置は明瞭である(図4-3)。ただし、知多半島の沿岸、横須賀町周辺の干拓地には畑が分布している。名古屋港の埋め立て工事は明治29(1896)年に着工されていることから、本図面では埋立地はみられない。

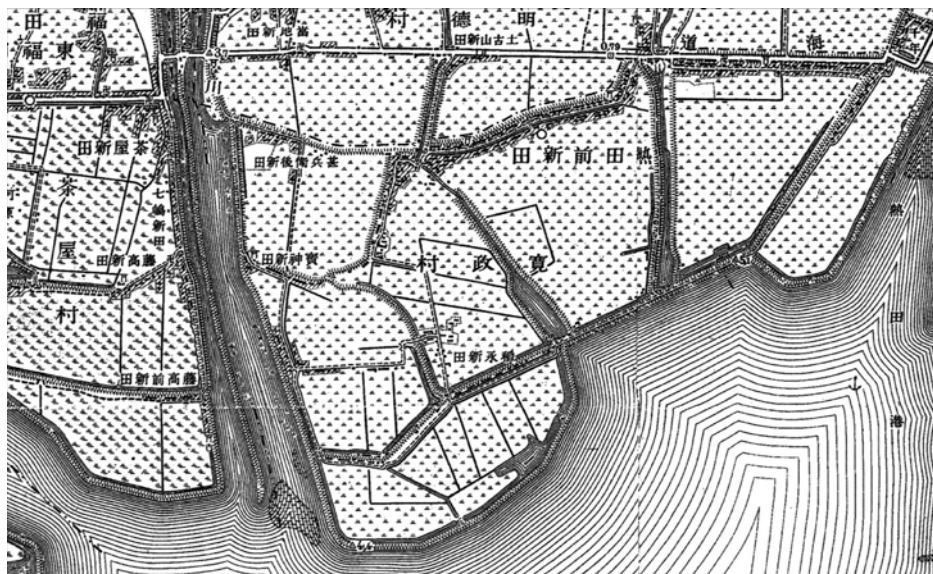


図4-3 庄内川河口に広がる干拓地 1:50000地形図「熱田町」明治24年測図(×0.8、部分)  
干拓地では開発時の堤防がそのまま残されている。「新田」地名が付けられ、集落は各干拓地の北縁に形成される。土地利用は庄内川右岸の茶屋村では沼田記号だが、左岸では水田である。

本図幅における明治期の土地利用をみると、人々の暮らしの場は平坦で安定した地盤の熱田台地や低地の微高地、丘陵地の小規模な段丘にあり、起伏の大きい丘陵地は森林に、段丘や丘陵の緩斜面には畑を、氾濫原低地や谷底低地、干拓地などの軟弱地盤地域は概ね水田であった。このような土地利用は、地形条件に適ったものであり、度重なる水害による人的被害を自ずと軽減してきたものと考えられる。

## (2) 昭和 45 (1970) 年頃 (現在から概ね 40 年前) の土地利用

昭和期の土地利用分類図 (第 2 期) は、昭和 45 (1970) 年に編集、昭和 46 (1971) 年に刊行された 5 万分の 1 地形図「名古屋南部」の判読により土地利用分類を行った (図 4-4)。昭和 46 (1971) 年刊行の 5 万分の 1 地形図「名古屋南部」は、昭和 45 (1970) 年に空中写真測量により作成された 2 万 5 千分の 1 地形図を編集したものである。

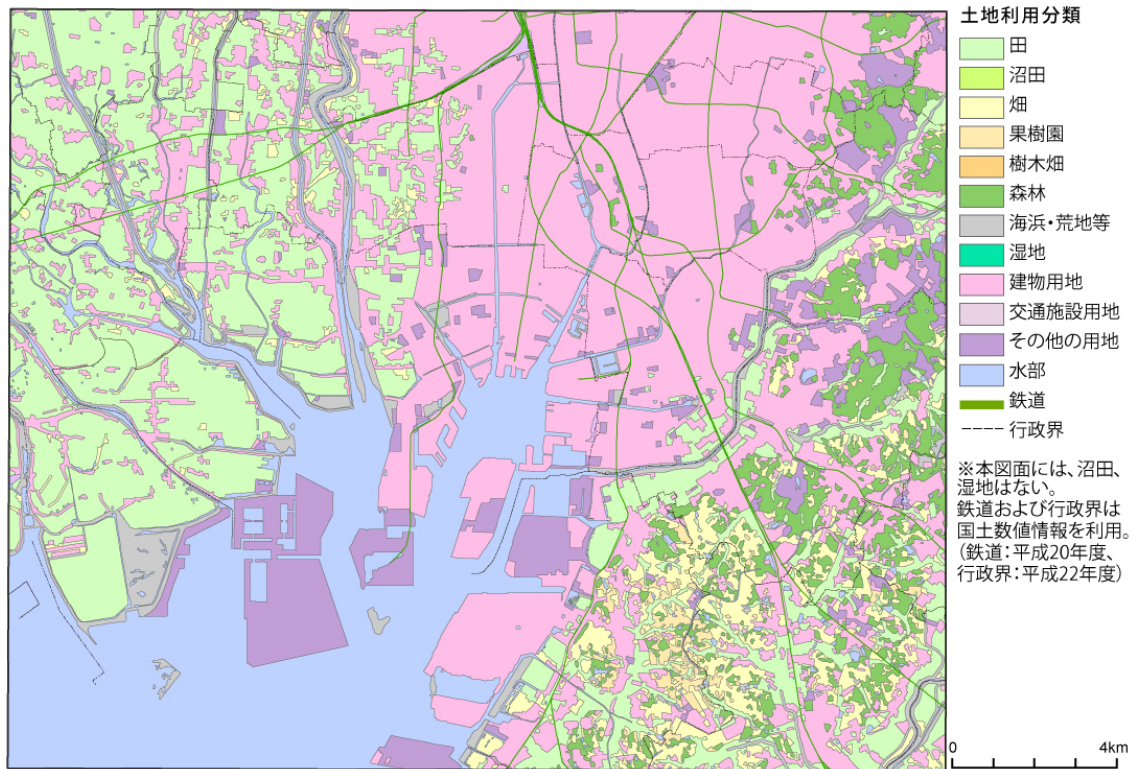


図 4-4 名古屋南部における約 40 年前 (昭和 45 (1970) 年頃) の土地利用

### ①山地・丘陵地における土地利用

いずれの丘陵地においても森林の減少が著しい。東山丘陵と豊明丘陵北部～中部にかけては、八事、権現山、笹原、籠山、大高緑地周辺にまとまった規模の森林があるが、ほかには建物用地のなかにパッチ状に存在する程度である。植生はモチツツジ-アカマツ群集とクロマツ植林が多く、アラカシ群落もみられる (環境庁, 1981)。とりわけ、八事と東山では森林から住宅地またはその他の用地への転換が著しい。住宅地の造成は、これらの地域が大正 10 (1921) 年に名古屋市に合併してから進み、昭和 12 (1937) 年に昭区和および千種区となる頃には都市区画整備により網の目状に道路が結ばれ、市街地が形成されていた。昭和 40 (1960) 年代には名古屋大学、南山大学、名城大学などの学校が当地へ移転し、地域随一の文教地区にもなっている。その他の用地には東山動物園、八事霊園、大高緑地などの施設もあるが、ほとんどが住宅造成地で、地形図では区画整理された更地と道路網で表現される (図 4-5)。

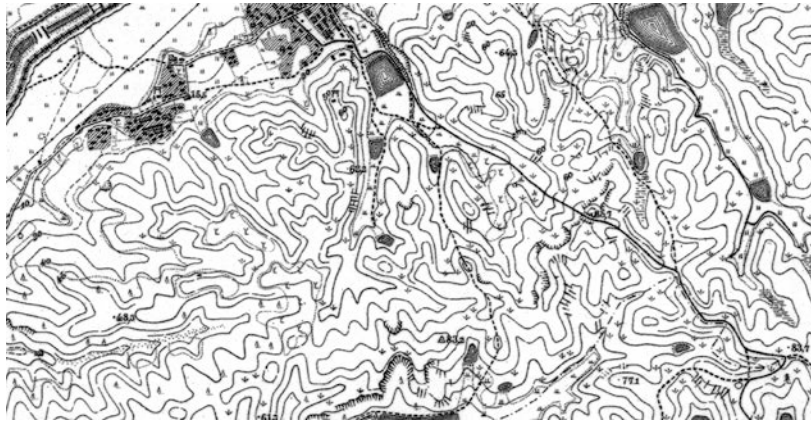


図 4-5 名古屋市緑区島田周辺の変遷

1:25000 地形図「名古屋南部」(上から)大正9年測図、昭和46年修正、平成16年更新(×0.85、部分)  
 大正期の丘陵地をみると松林や針葉樹樹の茂る場所であり、丘陵周縁の台地には集落や畑、桑畑になっている。谷底低地には田や大小のため池があった。昭和期はかつての丘陵の起伏を切り崩し、住宅地を造成している様子がみられる。平成期には一部を除いて全面的に住宅地が広がる。

豊明丘陵南部と知多丘陵では、森林から農地への転換が行われている。消費地である名古屋の近郊農業地域として、野菜栽培はもとより果樹栽培が盛んになり、特にみかん栽培が広がりを見せた。丘陵地の分水嶺を走る愛知用水は昭和36(1961)年に完

成し、沿線の農業用水、工業用水として利用されている。

### ②台地における土地利用

昭和期における**熱田台地**の土地利用をみると、概ね建物用地になり、名古屋市街の拡大がみられる。戦争では市域の約 40km<sup>2</sup>が消失したが、戦災復興には幹線道路網の整備を中心とした大規模な都市整備が計画され、現在の街区が形成された。東西方向の若宮大路と、南北方向の久屋大通は通称 100m道路とも呼ばれる道路が建設され、沿道には大型百貨店などが建ち並ぶ商業地域を形成する。

### ③低地における土地利用

庄内川左岸の**羽島・一宮氾濫原**、**海部・蟹江三角州**、**山崎川沿いの低地**や**天白川右岸の低地**では都市化が急激に進行し、一部に水田を残し、ほぼ全域が住宅地や工場、鉄道敷地などに利用されている。庄内川右岸の**庄内川低地**、**海部・蟹江三角州**では、畑はほとんど建物に変わったが、微高地上の集落と氾濫原や三角州には水田が広がり、明治期と同様の土地利用が続いている。一部には地盤の悪い低湿地上に建物がみられるものの、明治期から続く微地形と土地利用との関係は良く保たれている。

**伊勢湾臨海干拓・埋立地**の干拓地部分においても、明治期と同様に築堤および集落の微高地と、低湿地の水田との土地利用の組み合わせが維持されている。水田では、水郷地帯の特性を活かしたれんこん栽培や金魚養殖などが行われている。なお、弥富町南端に位置する鍋田は、昭和 31（1956）年より入植が開始された国内でも新しい農地用の干拓地である。鍋田干拓地は、昭和 34（1956）年に伊勢湾台風で壊滅的な被害を受けたが、その後、干拓地の西半分を公共用地として、東半分を農地として再整備がはかられた（小笠原：1963、山野：1998）（図 4-6）。



図 4-6 明治期および現在の鍋田干拓地周辺

左) 1:50000 地形図「熱田町」明治 24 年測図 (×0.6、部分) 右) 1:50000 地形図「名古屋南部」平成 12 年要部修正 (×0.6、部分)

両時期の地図を比較すると鍋田干拓地は両国村の干拓地先の干潟を排水して陸地化したことが読み取れる。入植当初の集落は道路沿う路村形態を取っていたが、伊勢湾台風後に干拓地内でも微高地の北西端に集団移転し、集落の外側にも堤防を築いて二重の水害対策を施した集落へと変わった（小笠原、1963）。

名古屋港の埋立地は、明治 29（1896）年の名古屋港第一期工事に始まり、現在でも国際港湾として拡張を続けている。埋立地には、港湾施設のほか製鉄所や金属加工など重工業の工場が立地し、それら工場へ続く道路や貨物線も建設された。本図面では

金城ふ頭や金岡、東浜などは埋立てが進行中の地域として分類しているが、地形図では空き地や水部になっている（図 4-7）。

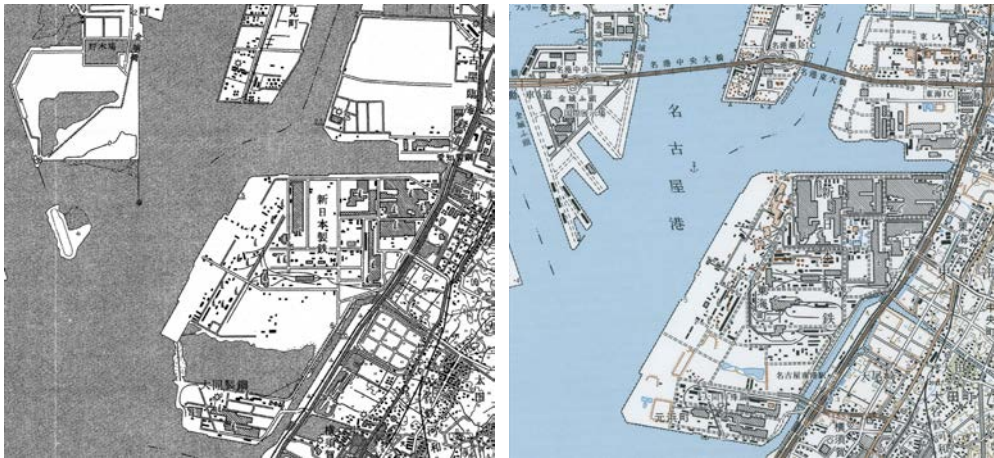


図 4-7 昭和期および現在の名古屋港周辺

1:50000 地形図「名古屋南部」(左) 昭和 46 年修正 (右) 平成 12 年要部修正 (×0.6、部分)

昭和期では金城ふ頭や大同製鋼の北側ではまだ埋立て工事の様子がみられる。平成期には埋立地のさまざまな利用方法が読み取れる。交通網も発達し、伊勢湾岸道路が各埋立地を接続するように建設されている。

本図幅における昭和期の土地利用は、名古屋市域の拡大により隣接地域の都市化が促され、森林や水田、臨海域が住宅地や学校、工業用地へ転用されつつある時代を捉えている。知多半島では愛知用水の開削により森林を畑や果樹園に替え、大規模な農地整備が行われた場所もある。このような地形条件を顧みない土地利用は、昭和 34 (1959) 年の伊勢湾台風で知られるように、災害時には深刻な被害をもたらす。一方、濃尾平野には、従来の微高地を利用した土地利用パターンが多く残り、水郷地帯に暮らす人々の生活様式や暮らしの知恵が引き継がれているものと考えられる。

## 4.2 土地利用の変遷の概要

### (1) 土地利用面積の推移

図 4-8 と表 4-1 は現在から概ね 120 年前及び 40 年前の 2 時期の土地利用分類図と、土地利用細分メッシュデータ（国土数値情報、2006）から、名古屋南部図幅における田、畑（畑・その他の農用地）、森林等（森林・荒地・水面）、宅地等（建物・その他の用地）の主要な土地利用 4 項目についての面積集計結果である。

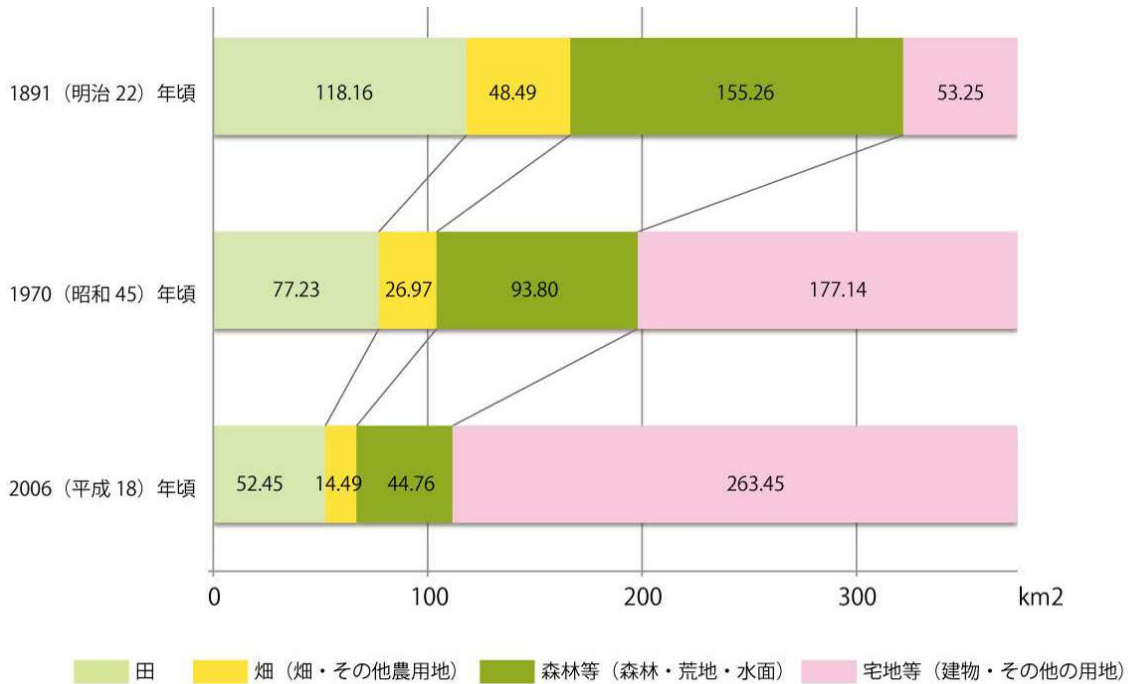


図 4-8 土地利用別面積の推移 (1891、1970、2006 年)

表 4-1 土地利用別面積の推移 (1891、1970、2006 年)

| 区分              | 名古屋市内 |      |       |      |       |       |      |       |       |       |       |      |       |        |      |      |       |       |      | 愛知県  |      |      |      |       |      |       |       |      |      | 三重県    |       | 計 |
|-----------------|-------|------|-------|------|-------|-------|------|-------|-------|-------|-------|------|-------|--------|------|------|-------|-------|------|------|------|------|------|-------|------|-------|-------|------|------|--------|-------|---|
|                 | 千種区   | 東区   | 中川区   | 中区   | 昭和区   | 瑞穂区   | 熱田区  | 中川区   | 港区    | 南区    | 緑区    | 名東区  | 天白区   | 小針     | 津島市  | 刈谷市  | 豊橋市   | 犬守市   | 大治市  | 知多市  | 豊田町  | 岡崎市  | 安城市  | 新城市   | あま市  | 扶桑町   | 南名古屋市 | 宝飯郡  | 定住   |        |       |   |
| 1891 (明治 24) 年頃 | 2.41  | 0.02 | 3.95  | 1.23 | 2.39  | 2.96  | 2.78 | 15.24 | 18.66 | 6.03  | 7.63  | 0.43 | 3.06  | 66.66  | 4.81 | 0.90 | 8.00  | 7.48  | 0.71 | 0.00 | 4.74 | 1.59 | 2.57 | 10.49 | 1.67 | 6.18  | 0.00  | 0.29 | 0.00 | 118.16 |       |   |
| 1970 (昭和 45) 年頃 | 1.84  | 0.01 | 3.65  | 0.71 | 2.65  | 3.22  | 2.64 | 2.41  | 0.94  | 4.39  | 8.91  | 0.52 | 1.40  | 30.81  | 0.27 | 0.19 | 4.76  | 5.97  | 0.66 | 0.18 | 0.69 | 0.68 | 0.26 | 0.81  | 0.87 | 0.61  | 0.00  | 0.03 | 0.00 | 48.49  |       |   |
| 2006 (平成 18) 年頃 | 4.90  | 0.00 | 0.50  | 0.02 | 2.07  | 1.96  | 0.40 | 4.95  | 25.31 | 4.34  | 15.18 | 1.82 | 10.10 | 23.45  | 2.05 | 0.89 | 19.90 | 9.78  | 0.10 | 1.21 | 3.46 | 3.08 | 1.29 | 19.10 | 1.08 | 12.88 | 0.02  | 4.34 | 1.94 | 155.26 |       |   |
| 増減              | 0.59  | 0.01 | 2.57  | 4.82 | 1.88  | 1.60  | 2.44 | 8.23  | 4.94  | 2.30  | 9.94  | 0.84 | 1.12  | 35.76  | 2.33 | 0.22 | 3.30  | 1.37  | 0.53 | 0.07 | 1.92 | 0.16 | 1.30 | 4.63  | 1.13 | 1.47  | 0.00  | 0.35 | 0.00 | 53.25  |       |   |
| 田               | 0.00  | 0.00 | 0.00  | 0.00 | 0.00  | 0.00  | 0.00 | 0.00  | 0.00  | 0.00  | 0.00  | 0.00 | 0.00  | 0.00   | 0.00 | 0.00 | 0.00  | 0.00  | 0.00 | 0.00 | 0.00 | 0.00 | 0.00 | 0.00  | 0.00 | 0.00  | 0.00  | 0.00 | 0.00 | 0.00   | 77.23 |   |
| 畑 (畑・その他の農用地)   | 0.00  | 0.00 | 0.00  | 0.00 | 0.00  | 0.00  | 0.00 | 0.00  | 0.00  | 0.00  | 0.00  | 0.00 | 0.00  | 0.00   | 0.00 | 0.00 | 0.00  | 0.00  | 0.00 | 0.00 | 0.00 | 0.00 | 0.00 | 0.00  | 0.00 | 0.00  | 0.00  | 0.00 | 0.00 | 0.00   | 26.97 |   |
| 森林等 (森林・荒地・水面)  | 0.66  | 0.00 | 0.43  | 0.48 | 1.31  | 1.31  | 1.38 | 4.12  | 16.07 | 2.45  | 8.98  | 0.38 | 3.82  | 44.98  | 2.82 | 0.81 | 6.47  | 8.26  | 0.51 | 0.16 | 2.45 | 1.70 | 0.94 | 11.26 | 1.58 | 0.22  | 0.02  | 4.24 | 1.84 | 93.80  |       |   |
| 宅地等 (建物・その他の用地) | 8.10  | 0.11 | 7.39  | 0.38 | 9.41  | 9.31  | 9.79 | 18.66 | 22.18 | 18.32 | 9.82  | 1.08 | 8.06  | 128.21 | 2.98 | 0.12 | 13.66 | 6.66  | 0.93 | 1.01 | 6.00 | 1.56 | 1.93 | 8.92  | 1.41 | 8.88  | 0.00  | 0.22 | 0.00 | 177.14 |       |   |
| 田               | 8.07  | 0.03 | 4.79  | 1.47 | 7.53  | 7.85  | 4.30 | 10.33 | 10.14 | 11.03 | 0.78  | 1.54 | 0.30  | 90.51  | 0.11 | 0.11 | 12.34 | 4.60  | 0.41 | 0.38 | 2.00 | 1.50 | 0.50 | 3.37  | 0.34 | 7.41  | 0.00  | 0.13 | 0.00 | 123.90 |       |   |
| 畑 (畑・その他の農用地)   | 0.00  | 0.00 | 0.02  | 0.00 | 0.00  | 0.00  | 0.00 | 2.80  | 4.78  | 0.04  | 0.27  | 0.08 | 0.00  | 7.59   | 5.42 | 0.69 | 2.39  | 3.97  | 0.26 | 0.01 | 2.64 | 0.39 | 3.10 | 17.43 | 1.92 | 0.66  | 0.00  | 0.21 | 0.00 | 32.40  |       |   |
| 森林等 (森林・荒地・水面)  | 0.61  | 0.00 | 0.01  | 0.00 | 0.00  | 0.00  | 0.00 | 0.33  | 0.21  | 0.00  | 1.71  | 0.50 | 0.13  | 2.68   | 0.07 | 0.00 | 6.68  | 4.14  | 0.14 | 0.03 | 0.63 | 0.34 | 0.52 | 0.23  | 0.08 | 0.19  | 0.00  | 0.02 | 0.00 | 44.76  |       |   |
| 宅地等 (建物・その他の用地) | 1.58  | 0.00 | 0.25  | 0.25 | 0.23  | 0.13  | 0.40 | 2.12  | 13.23 | 1.08  | 7.84  | 0.21 | 1.60  | 24.13  | 0.11 | 0.15 | 2.80  | 1.90  | 0.47 | 0.38 | 1.60 | 0.32 | 0.40 | 4.40  | 0.08 | 5.75  | 0.06  | 0.81 | 0.00 | 141.70 |       |   |
| 田               | 6.82  | 0.11 | 10.42 | 0.64 | 10.35 | 10.70 | 7.70 | 20.97 | 20.21 | 16.78 | 21.18 | 2.05 | 14.02 | 172.62 | 3.22 | 1.25 | 23.19 | 15.07 | 1.63 | 1.16 | 6.28 | 4.58 | 1.92 | 12.00 | 2.38 | 3.32  | 0.54  | 3.97 | 1.31 | 263.45 |       |   |
| 畑 (畑・その他の農用地)   | 7.50  | 0.03 | 7.84  | 1.71 | 6.87  | 9.94  | 0.00 | 18.74 | 26.27 | 14.08 | 24.12 | 2.01 | 13.40 | 130.86 | 0.90 | 1.03 | 21.89 | 13.05 | 1.10 | 1.06 | 4.51 | 4.09 | 0.93 | 8.17  | 1.46 | 2.85  | 0.54  | 3.03 | 1.33 | 263.45 |       |   |

1. 1891 年及び 1970 年は土地利用分類図の図上計測値。2006 年は国土数値情報（土地利用細分メッシュ）による集計値。
2. 1970 年及び 2006 年の下段は、1891 年からの増減量。
3. 行政区域は 2011（平成 22）年 3 月 31 日現在の区域を当てはめた。
4. 所属未定地名古屋港ポートアイランド地区。

1891 年には森林等が最も多く約 155km<sup>2</sup>あり、次いで田が 118km<sup>2</sup>、畑は約 48km<sup>2</sup>と、これらの自然的・農業的土地利用は全体の約 86%を占め、宅地等は全体の約 14%の 53km<sup>2</sup>程であった。地域別では干拓地の多い名古屋市中川区、港区、弥富市では田の面積が 10km<sup>2</sup>を越え、次いで東海市、大府市なども約 7～8 km<sup>2</sup>の田が広がっていた。畑は名古屋市中



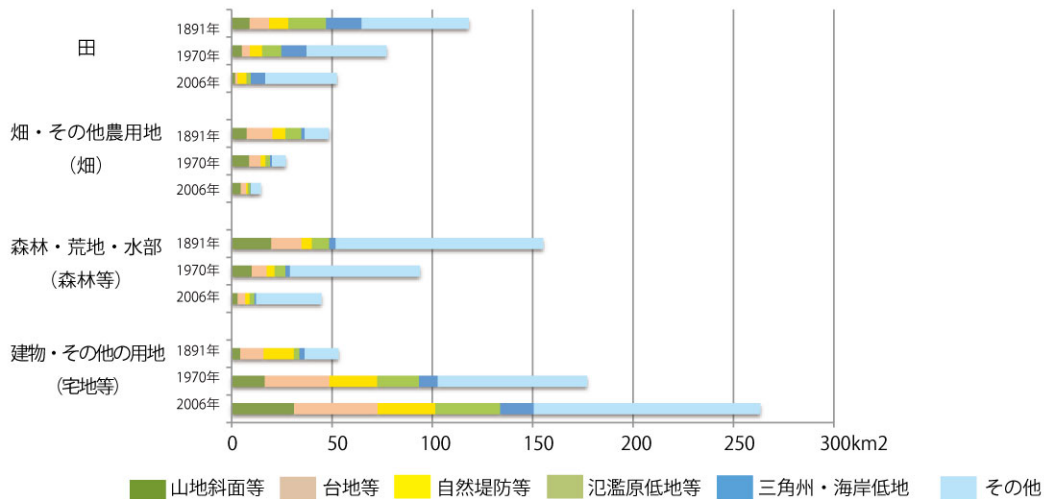
種区、南区、緑区、東海市、大府市などの丘陵地で5~6km<sup>2</sup>と多い。森林等は、名古屋市港区、緑区、天白区、東海市、大府市、弥富市、飛島村ではそれぞれ10km<sup>2</sup>以上にもなる。このうち港区、東海市、弥富市、飛島村などの沿岸地域は森林よりも、臨海域の埋立て造成前を表した旧水部の割合が高いものと考えられる。宅地等はいずれの市町村においても概ね1~3km<sup>2</sup>であるが、名古屋市中区、港区、弥富市では4km<sup>2</sup>と他の地域よりも若干高めであり、中川区では8km<sup>2</sup>と多かった。

1970年になると、田、森林、畑などの農地は明治期の約6割減の一方で、宅地等は約177km<sup>2</sup>と明治期の3倍にのぼった。田は名古屋市中川区や港区では約8~10km<sup>2</sup>も減少し、明治期の半分以下になった。他の地域においても田はほとんど姿を消しつつあり、特に名古屋市では千種区、東区、中区、昭和区、熱田区ではほとんど見られない。一方、弥富市は本図幅のなかでは、田の面積が明治期より3km<sup>2</sup>以上も増加に転じ、約14km<sup>2</sup>になっているが、これは地先で鍋田干拓などの干拓が進んだためと推察される。畑が5km<sup>2</sup>以上あるのは、名古屋緑区、東海市、大府市である。名古屋市の各区においては、明治期よりも2~4km<sup>2</sup>も減少あるいは消失した地域もみられる。森林等は、名古屋市千種区、緑区、天白区、大府市においては概ね丘陵地の森林が明治期より3~5km<sup>2</sup>ほど失われた。名古屋市港区、東海市、弥富市、飛島村における森林等の消失は、主に水部の埋立てによるもので、その面積は明治期より7~10km<sup>2</sup>減である。これらの土地利用の減少の傍らで、宅地等は一躍広がりを見せ、昭和期の土地利用の約半数に至った。宅地等はほぼ全ての地域で明治期よりも増加しているが、とりわけ名古屋市各区の増加が著しく、港区の約23km<sup>2</sup>（明治期より約19km<sup>2</sup>増）を始めに、千種区、昭和区、瑞穂区、中川区、南区、天白区で約8~18km<sup>2</sup>に増加した（明治期より約7~11km<sup>2</sup>増）。名古屋市以外では、東海市の約15km<sup>2</sup>（明治期より約12km<sup>2</sup>増）と飛島村の約8km<sup>2</sup>（明治期より約7km<sup>2</sup>増）が大きい。

昭和から平成にかけても田は約52km<sup>2</sup>、畑は約14km<sup>2</sup>、森林等は約44km<sup>2</sup>と昭和期の3割程に減少し、明治期から比較すると3分の1にまで落ち込んだが、宅地等の都市的土地利用は昭和期から1.4割増の約263km<sup>2</sup>になった。田は名古屋市内ではほぼ0に近く、多くても港区の約5km<sup>2</sup>に留まる。明治期からの減少面積は名古屋市全体で約61km<sup>2</sup>に達する。その他の地域でも概ね減少傾向であるが、弥富市は昭和期よりもさらに3.3km<sup>2</sup>ほど増加した。畑も名古屋市内ではほとんど失われたが、緑区には辛うじて1.8km<sup>2</sup>程度の畑が残されている。名古屋市以外でも1km<sup>2</sup>以下であるが、東海市（約6km<sup>2</sup>）や大府市（約4km<sup>2</sup>）では他の地域よりも畑が多い。森林等は名古屋市では港区（約13km<sup>2</sup>）および緑区（約2.6km<sup>2</sup>）に残っている。ただし、港区は水部を表現していると考えられる。その他の地域では飛島村（約5.7km<sup>2</sup>）、弥富市（約4.4km<sup>2</sup>）の面積が大きい。いずれも水部を表現したものである。宅地等は名古屋市中川区（約26km<sup>2</sup>）、港区（約30km<sup>2</sup>）、南区（約16km<sup>2</sup>）、緑区（約27km<sup>2</sup>）、天白区（約14km<sup>2</sup>）では10~30km<sup>2</sup>以上にのぼり、明治期から比べると3~14倍も増加している。その他の市町村では東海市（約25km<sup>2</sup>）、大府市（約15km<sup>2</sup>）、弥富市（約12km<sup>2</sup>）において宅地等の面積が大きく、特に東海市では明治期からの増加が約21km<sup>2</sup>に達する。

## (2) 地形分類別土地利用面積の推移

図4-9と表4-2は、明治期、昭和期、平成期の土地利用の面積を主要な自然地形分類項目ごとに集計したものである。全体を通してみると、全ての時期および土地利用において**その他**の自然地形を利用している割合が際立つ。この**その他**の大部分を占めるのは旧水部で、既に述べた通り干拓や埋立て造成によって陸地になった部分で、本図幅の地域特性のひとつである。



- 区分ごとの面積は、本調査成果図の自然地形分類図及び土地利用分類図（1891年、1970年）、国土数値情報の土地利用細分メッシュ（2006年）を100mメッシュデータに変換し、各図のメッシュごとの分類の組み合わせで積み上げ集計したもの。
- 地形分類の内訳は次の通り。  
 山地斜面等：山地斜面、麓斜面及び崖錐、土石流堆積地、台地等：砂礫台地、自然堤防等：自然堤防、砂州・砂堆、氾濫原低地等：緩扇状地、扇状地、谷底低地、氾濫原低地、旧河道、湿地、その他：河原・河川敷、現水部、旧水部の各合計。

図4-9 地形分類別の土地利用面積の推移（1891、1970、2006年）

土地利用ごとにみると、**田**は三角州・海岸低地、氾濫原低地などの低地に多い。台地や山地斜面にみられるものは、熱田台地の浅い谷や山地の狭長な谷底低地にある場合と考えられる。微高地である自然堤防にも田がみられるが、このことから島畑などの微高地特有の景観が残っていることが推測される。氾濫原低地、台地、山地斜面では時代を追うごとに面積は減少し、平成期には田のうち約68%が干拓地などのその他の地形となっている。

**畑・その他農用地**は台地に最も多く、山地斜面、自然堤防、氾濫原低地などにもみられ、いずれの地形項目も時代と共に減少傾向にある。唯一、明治期から昭和期にかけて山地斜面等が増加しているが、これは愛知用水によって丘陵地の斜面を利用した畑作や果樹栽培が盛んになった影響と考えられる。

明治期の**森林・荒地・水部**は旧水部を示すその他の地形以外には、山地斜面、台地に占める割合が高い。山地斜面は主に森林を、台地では丘陵地の高位面や上位面に樹木記号がある場所を、氾濫原低地にみられるものは河川敷の灌木等を捉えたものである。山地斜面と台地では昭和期から平成期にかけての減少が著しく、丘陵地の改変が進んだことが推察できる。その他の地形に含まれる旧水部のなかには、干拓地や埋立地のほかに

丘陵地のため池も表現されるが、それらも多くが盛土により失われている。

建物・その他の用地は、都市的土地利用をまとめたものである。他の土地利用が時代を追うごとに減少する一方で増加の一途をたどり、本図幅の都市化を明確にするものである。明治期には台地や自然堤防などの水害や地震動に強く、地盤条件の良い場所に集落がつけられていたが、昭和期になると一転し、山地斜面や氾濫原、三角州・海岸平野などの不安定な地盤上にも住宅の増加がみられる。台地においても、それまでは畑や浅い谷の田としていたような場所にも住宅がつけられるようになった。旧水部の埋立地につくられた建物・その他の用地には大規模工場や港湾施設が建ち並び、中京工業地帯の中心地となってきた。平成期にはそのスピードが更に加速し、延べ 263km<sup>2</sup>程が建物・その他の用地となっている。

表 4-2 地形分類別の土地利用面積の推移 (1891、1970、2006 年)

(単位: km<sup>2</sup>)

| 地形分類                 |                | 山地斜面等  | 台地等     | 自然堤防等   | 氾濫原低地等  | 三角州・海岸低地 | その他    | 計       |
|----------------------|----------------|--------|---------|---------|---------|----------|--------|---------|
| 年代                   | 土地利用区分         |        |         |         |         |          |        |         |
| 1891年<br>(明治<br>24)頃 | 田              | 0.90   | 16.84   | 27.75   | 75.86   | 10.29    | 5.68   | 137.33  |
|                      | 畑(畑・その他の農用地)   | 2.72   | 19.80   | 46.07   | 44.95   | 1.32     | 5.47   | 120.34  |
|                      | 森林等(森林・荒地・水面)  | 11.64  | 12.51   | 8.59    | 13.18   | 1.72     | 10.54  | 58.18   |
|                      | 宅地等(建物・その他の用地) | 2.01   | 30.72   | 44.64   | 24.37   | 0.42     | 2.00   | 104.15  |
| 1970年<br>(昭和<br>45)頃 | 田              | 0.25   | 16.18   | 20.16   | 58.09   | 7.21     | 3.26   | 105.15  |
|                      |                | △ 0.65 | △ 0.66  | △ 7.59  | △ 17.78 | △ 3.08   | △ 2.43 | △ 32.18 |
|                      | 畑(畑・その他の農用地)   | 3.82   | 16.41   | 35.36   | 28.49   | 1.01     | 5.00   | 90.09   |
|                      |                | 1.10   | △ 3.39  | △ 10.71 | △ 16.46 | △ 0.32   | △ 0.47 | △ 30.25 |
|                      | 森林等(森林・荒地・水面)  | 7.50   | 3.05    | 7.28    | 7.58    | 2.04     | 10.73  | 38.17   |
|                      |                | △ 4.15 | △ 9.46  | △ 1.31  | △ 5.60  | 0.32     | 0.19   | △ 20.01 |
| 宅地等(建物・その他の用地)       | 5.70           | 44.24  | 64.25   | 64.21   | 3.50    | 4.70     | 186.60 |         |
|                      | 3.70           | 13.51  | 19.61   | 39.84   | 3.08    | 2.71     | 82.45  |         |
| 2006年<br>(平成<br>18)頃 | 田              | 1.27   | 10.63   | 25.11   | 27.36   | 4.71     | 2.97   | 72.05   |
|                      |                | 0.37   | △ 6.22  | △ 2.65  | △ 48.50 | △ 5.58   | △ 2.71 | △ 65.28 |
|                      | 畑(畑・その他の農用地)   | 1.65   | 1.69    | 11.41   | 11.60   | 0.42     | 0.78   | 27.55   |
|                      |                | △ 1.07 | △ 18.11 | △ 34.66 | △ 33.35 | △ 0.90   | △ 4.69 | △ 92.79 |
|                      | 森林等(森林・荒地・水面)  | 4.37   | 2.26    | 5.78    | 4.59    | 0.24     | 2.51   | 19.74   |
|                      |                | △ 7.28 | △ 10.25 | △ 2.81  | △ 8.59  | △ 1.48   | △ 8.03 | △ 38.44 |
| 宅地等(建物・その他の用地)       | 9.99           | 65.30  | 84.76   | 114.81  | 8.38    | 17.43    | 300.66 |         |
|                      | 7.98           | 34.58  | 40.12   | 90.44   | 7.96    | 15.44    | 196.51 |         |

1. 調査結果の自然地形分類図及び2時期の土地利用分類図、国土数値情報データをそれぞれ 100m メッシュに変換し、メッシュごとに分類の組み合わせを積み上げて集計した。
2. 土地利用区分は、1891年、1970年は本調査の土地利用分類図、2006年は国土数値情報(土地利用細分メッシュ)による。
3. 地形分類の内訳は以下の通り。  
山地斜面等：山地斜面、麓斜面及び崖錐、土石流堆積地、台地等：砂礫台地、自然堤防等：自然堤防、砂州・砂堆、氾濫原低地等：緩扇状地、扇状地、谷底低地、氾濫原低地、旧河道、湿地、その他：河原・河川敷、現水部、旧水部の各合計。
4. 1970年及び2006年の下段は、1891年からの増減量。

### (3) 人口集中地区の変遷

図 4-10 および表 4-3 は国勢調査の人口集中地区 (DID<sup>※</sup>) データから作製した、名古

<sup>※</sup>人口集中地区 (DID= densely inhabited district) : 1960年国勢調査以降、新たに設定された統計表章地域。調査区(約 50 世帯)を単位として、原則として調査区の人口密度は 1km<sup>2</sup>につき 4000人以上あり、そのような調査区が

屋都市圏の1960（昭和35）年、1980（昭和55）年、2005（平成17）年の3時期にわたる都市域の変遷を示したものである。1960年のDIDは名古屋市を中心に中区、昭和区、中村区、熱田区、瑞穂区、南区、港区東部、中川区東部などの台地や低地に広がり、他は東海市横須賀町周辺に若干見られる程度であった。

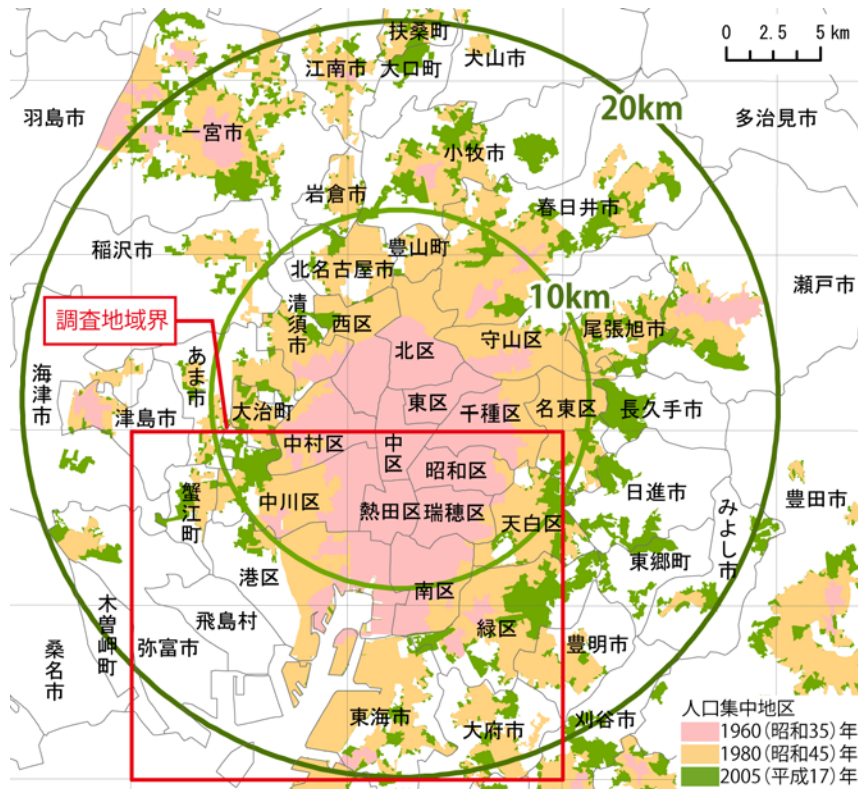


図 4-10 名古屋都市圏における人口集中地区の推移（1960、1980、2005年）

資料：国土数値情報（人口集中地区）

表 4-3 名古屋20km圏内におけるDIDの地形分類別面積

（単位：km<sup>2</sup>）

| 区域          | 地形分類別面積 |       |       |        |       | 合計     |
|-------------|---------|-------|-------|--------|-------|--------|
|             | 山地      | 丘陵地   | 台地    | 低地     | 水部    |        |
| 名古屋都市圏      | -       | 56.91 | 37.46 | 246.60 | 51.83 | 392.79 |
| うち1960年DID内 | -       | 6.35  | 23.09 | 60.01  | 2.61  | 92.04  |
| うち1980年DID内 | -       | 28.48 | 32.05 | 131.53 | 5.43  | 197.49 |
| うち2005年DID内 | -       | 36.68 | 33.53 | 146.59 | 5.04  | 221.84 |

資料：自然地形分類図、国土数値情報（人口集中地区）より集計。  
名古屋都市圏全体の面積には海域を含む。

当時は町村合併促進法（1953；昭和28年施行）や新市町村建設促進法（1956；昭和31年施行）などの法律の下で、「昭和の大合併」とも呼ばれる市町村の分割や合併、編

互いに隣接して、その合計が5000人以上に達する場合に、これを一つの人口集中地区として区画する。実質的には市街地を形成する区域を表すといえる（浜、1989）。

入が進み、1960年はその末期にあたる。名古屋市は1956（昭和31）年に政令指定都市になり、1960～1980年の間には1963（昭和38）年の緑区の新設に始まり、1964（昭和39）年には旧大高町、旧有松町を緑区へ編入、さらに1975（昭和50）年に千種区を名東区と天白区に分割した。また、東海市は1969年に、大府市は1970（昭和45）年に、豊明市は1972（昭和47）にそれぞれ市制を開始するなど、周辺地域の都市化も進んだ。1980年には東部から南部にかけてDIDの拡大が著しく、名古屋市の中心部から約20kmに達する。一方、西部では概ね名古屋市中心部から10km圏内に留まる。市区町村別にみると、1980年のDIDは名古屋市周辺地域の天白区、緑区、中川区西部、港区西部、東海市、豊明市へ拡大がみられ、丘陵地の改変や、西部あるいは南部の低地および干拓地の盛土や埋立地の増加を意味する。ただし1980年時点では、蟹江町と大府市のDIDは名古屋市のDIDとは繋がっていない。

2005（平成17）年は、名古屋市東部の天白区および緑区から東側へDIDが拡大し、日進市、東郷町などにも分布することから、丘陵地の改変の進行が推察される。西部では、中村区東部や蟹江町の低地にもDIDが広がり、名古屋市を中心としたDIDに繋がる形となった。大府市や東海市においてもDIDの広がりが認められる。なお、2005年のDIDは1995年に改正された合併特例法による市町村合併が再加速中の様子を反映しているが、本図幅においてはこの間の市町村合併はなかった。

## 5 調査地域の災害履歴概要

### 5.1 災害履歴概説

#### (1) 地震

愛知県に被害を及ぼす地震には、①南海トラフ沿いで発生する海溝型巨大地震、②陸域の浅い場所で発生する地震の2タイプが存在する。

①のタイプは太平洋沖合のプレート境界で発生する地震で 1854 年の安政東海地震 (M8.4) や 1944 年の東南海地震 (M7.9) が該当し、広い範囲に揺れや津波による被害をもたらす。

②のタイプは陸域の活断層によってもたらされる地震で 1586 年の天正地震 (M7.8)、1891 年の濃尾地震 (M8.0) や 1945 年の三河地震 (M6.8) などが該当する。

1854 (嘉永7) 年 12 月 23 日に発生した安政東海地震は、熊野灘から駿河湾にかけてを震源域としたプレート境界型地震と考えられており、駿河湾沿岸から遠州灘沿岸にかけて震度 6~7 の揺れが生じたと推定されている。名古屋市では震度 6 相当と推定されている。またこの地震の 32 時間後には紀伊半島沖から四国沖にかけての南海トラフを震源域とする安政南海地震 (M8.4) が発生している。

天正地震は 1586 (天正13) 年 1 月 18 日に発生し、岐阜県の全域、富山県西部、滋賀県東部、名古屋市など広範囲で震度 6 相当の揺れが生じたと推定されている。この地震の際に、阿寺断層帯主部 (南部) が活動した可能性がある (地震調査研究推進本部, 2009)。

#### (2) 風水害

本地域の大半を占める濃尾平野は木曾三川 (木曾川、長良川、揖斐川) 及び庄内川によって形成された典型的な沖積平野で、上流部には扇状地が発達し、その下流部には氾濫原、さらに伊勢湾に接して三角州が広がる。

本図幅の西側大部分は木曾川や庄内川によって形成された三角州性の沖積低地と、砂州・干潟を埋め立てて造成された干拓地・埋立地からなる低地で、度々これら大河川の氾濫や高潮による風水害を生じてきた。また図幅東側は標高 30m~100m 程度の台地・丘陵地によって画され、内水氾濫や土砂災害などの被害を生じている。

### 5.2 災害履歴詳説

#### (1) 地震

##### ① 濃尾地震

明治 24 (1891) 年 10 月 28 日午前 6 時に発生した濃尾地震 (M8.0) は過去日本の内陸で発生した最大級の地震である。濃尾地震によって福井県南部から岐阜県根尾村を経て木曾川まで複数の地表地震断層が出現し、根尾谷地震断層帯と呼ばれている。これらの断層は水平変位を主成分とする横ずれ断層で、もっとも顕著な根尾谷断層では数mから最大 8m 左横ずれしている。濃尾地震の断層モデルとしてはこれら地表に現れた横ずれ断層のみを想定するモデルと、濃尾平野の地下の伏在断層を組み合わせるモデルの二つが提示されているが、濃尾平野の地下伏在断層の認定には必ずしも決着がついていな

い（内閣府，2005）。

濃尾地震の震動は北海道や南西諸島を除く全国で観測され、震源断層から濃尾平野にかけて震度7、福井県、岐阜県、滋賀県、愛知県、三重県の広い範囲で震度6の揺れが生じたと推定されている。濃尾地震の死者は7,273名、住家全壊14万棟、半壊8万棟以上と推定されている（宇佐美，2003）。

愛知県では、震度6～7、死者2,638名、住家全壊85,511棟、半壊55,655棟で、県の地震災害史上最大の被害を受けた（愛知県地域防災計画）。

本図幅範囲では下ノ一色村（現名古屋市中川区）で建物の全壊率56.8%、一柳村、荒子村（現名古屋市中川区）、須成村（現蟹江町）では全壊率40%前後など、図幅西側の市町村で大きな被害が生じている。一方、図幅東側の市町村では全壊率は数%から10%程度にとどまっている。

## ② 東南海地震

昭和19（1944）年12月7日午後1時に発生した東南海地震（M7.9）は、駿河トラフと南海トラフ沿いを震源域として発生し、三重県から静岡県御前崎町までの沿岸域で震度6弱となった。また伊豆半島から三重県沿岸部にかけて津波による被害も発生している。この地震による被害は飯田（1977）の推計によると全国で死者・行方不明者1,223名、住家全壊17,611棟、半壊36,565棟を数える。特に愛知県は最も甚大な被害を受け、死者・行方不明者438名、住家全壊6,411棟、半壊19,408棟となった（地震調査研究推進本部，2009）。

本図幅範囲では沿岸部の飛鳥村、鍋田村（現弥富市）などで建物の全壊率10～20%の被害のほか、日光川流域の町村では建物の半壊率が数%の被害が生じている。また庄内川や堀川の河口付近では液状化による被害も発生している。

## ③ 三河地震

東海地方を中心として広い範囲に被害を与えた東南海地震の約1ヶ月後の昭和19（1944）年1月13日午前3時38分に愛知県東部を震源とする内陸直下型地震である三河地震（M6.8）が発生し、地表に現れた断層は10数kmにも渡った（内閣府ホームページより）。

愛知県では、大部分で震度5以上、死者2,306名、住家全壊16,408棟、半壊31,679棟の被害があった（愛知県地域防災計画）。

三河地震の被害は現在の西尾市を中心とした幡豆郡と、現在の安城市を中心とした碧海郡に集中している（飯田，1995）。

本図幅範囲では、富士松村、刈谷町（現刈谷市）で6～8%の建物が半壊被害のほか、名古屋市昭和区、瑞穂区で各1棟の建物全壊被害、大府町、東浦村（現大府市）、名古屋市港区、南区で0.4～0.7%の建物が半壊被害を生じている。

## (2) 水害

### ① 昭和 34 (1959) 年 9 月 26 日 伊勢湾台風

9 月 21 日にマリアナ諸島の東海上で発生した台風 15 号 (伊勢湾台風) は発達しながら北西に進行し、23 日には中心気圧 895 hPa にまで到達した。その後ほとんど勢力が衰えることなく日本に接近し、26 日 18 時頃和歌山県に上陸。上陸後 6 時間で本州を縦断し、27 日に東北地方北部を横切る形で太平洋側に抜けたが、勢力が強く広い範囲に暴風と降雨による被害をもたらした (気象庁ホームページより)。

伊勢湾台風の最大の特徴は伊勢湾で発生した高潮が愛知県・三重県のゼロメートル地帯に甚大な被害をもたらした点にある。台風による伊勢湾への海水の流入とその後の湾水震動減少によって高潮が発生し、9 月 26 日 8 時には名古屋港で T. P. +3. 89m の潮位を記録するなど、伊勢湾全体の海面を 1 時間近くにわたって 2m 程度上昇させた (中央防災会議, 2008)。

この高潮と強風による高波によって名古屋港では、港湾護岸の決壊、破損が生じ、膨大な海水が濃尾平野に浸入したため、三重県では死者・行方不明者が 1, 281 名に達する大きな被害をもたらした。高潮によって平野部にもたらされた海水がそのまま陸域にとどまり、名古屋港臨海部では 90 日以上にわたって滞留した (中央防災会議, 2008)。

愛知県では死者 3, 168 名、行方不明者 92 名、住家全壊 23, 334 棟、半壊 97, 046 棟、流出 3, 194 棟、住家浸水床上 53, 560 棟、床下 62, 831 棟の被害があった (愛知県地域防災計画)。

本図幅範囲では東側の丘陵地を除くほぼ全域が高潮による浸水被害を受けている。名古屋市では死者・行方不明者 1, 851 名、住家全壊 6, 166 棟、半壊 43, 249 棟、流出 1, 557 棟、住家浸水床上 34, 883 棟、床下 32, 469 棟の被害があった (名古屋市地域防災計画)。

### ② 昭和 47 (1972) 年 7 月 12 日 (集中豪雨)

7 月 3 日～6 日にかけて、黄海から日本海北部に伸びた前線を伴った低気圧に暖湿気流が流れ込み、九州と四国に局地的な大雨をもたらした。9 日～13 日にかけては前線が南下し、本州南岸から四国、九州付近に停滞した。日本南海上には台風 6, 7, 8 号があり、この影響で前線が活発化し、西日本で 400～600mm、山間部で 1, 000mm 前後の大雨となった。名古屋地方気象台で 7 月 11 日に日降水量 93. 5mm を記録し、7 月 3 日～15 日の期間降水量は 331mm に達した (気象庁ホームページより)。また、愛知県では西三河を中心に被害を生じ、死者 64 名、行方不明者 4 名、住家全壊 16 棟、半壊 70 棟、住家浸水床上 20, 075 棟、床下 12, 077 棟が報告されている (愛知県地域防災計画)。

本図幅範囲では境川低地に位置する刈谷市で浸水被害を生じている。

### ③ 昭和 49 (1974) 年 7 月 24 日 (豪雨)

7 月 24 日～28 日にかけては紀伊半島から日本海に進んだ低気圧が東海地方を中心に大雨となり、浸水害が多発した。名古屋地方気象台で総降水量 130mm を記録し (気象庁ホームページより)、愛知県では尾張、海部、知多を中心に浸水被害が多数発生した。これにより死者 1 名、住家浸水床上 7, 248 棟、床下 74, 035 棟の被害が発生した (愛知県地域防災計画)。



本図幅範囲では西側の沖積低地の大部分で浸水被害が生じ、名古屋市内で住家浸水床上 2,884 棟、床下 40,463 棟の被害があった（名古屋市地域防災計画）。

④ 昭和 51（1976）年 9 月 8 日（台風 17 号）

9 月 8 日にトラック島周辺に発生した台風 17 号は北西に進み 10 日～12 日朝にかけて九州の南西海上で停滞した。その後北上し 13 日 1 時 40 分ごろ長崎市に上陸した後、日本海を北上した。台風 17 号と前線の影響で各地に大雨をもたらし、九州から中部地方にかけて期間降水量が 500mm～1,000mm に達した。名古屋地方気象台で 9 月 12 日に日降水量 161.5mm を記録し、9 月 8 日～14 日の期間降水量は 422.5mm に達した（気象庁ホームページより）。

愛知県では尾張、海部、知多に中小河川氾濫等により死者 1 名、住家全壊 14 棟、半壊 437 棟、住家浸水床上 13,050 棟、床下 102,677 棟の被害が発生した（愛知県地域防災計画）。

本図幅範囲では庄内川・日光川周辺の海岸低地から干拓地の広い範囲が浸水し、名古屋市でも中川区、港区、熱田区などで浸水害が生じた。名古屋市内では住家浸水床上 3,610 棟、床下 62,959 棟の被害があった（名古屋市地域防災計画）。

⑤ 平成 12（2000）年 9 月 11 日（台風 14 号：東海豪雨）

9 月 2 日にマリアナ近海で発生した台風 14 号は 16 日に沖縄本島を通過し、その後日本海で温帯低気圧に変わった。この台風によって本州付近に停滞していた前線が活発化し、愛知・三重・岐阜の東海地方を中心に記録的な大雨となった。愛知県では名古屋地方気象台で 9 月 11 日に観測史上最高の日降水量 428mm を記録し、9 月 8 日～17 日の期間降水量は 617mm に達し、名古屋市では 38 万人に避難勧告が出された（気象庁ホームページより、佐藤，2002）。

愛知県内の庄内川、新川・天白川では計画高水位を超える過去最高の水位を記録し、庄内川の枇杷島地点では 12 日 4 時半に計画高水位の 9.18m を上回る 9.46m を記録した。庄内川下流の一式大橋右岸で越水したが破堤には至らなかった。庄内川の支流の新川では河口から 16km の名古屋市西区芦原町付近で左岸堤防が 100m にわたって破堤し浸水面積 19 平方 km、浸水家屋約 18,000 棟の被害を生じた（国土交通省ホームページより）。愛知県では河川の破堤 20 箇所、越水 319 箇所、死者 7 名、住家全壊 18 棟、半壊 154 棟、住家浸水床上 22,078 棟、床下 39,728 棟の被害があった（愛知県地域防災計画）。

本図幅範囲では名古屋市天白区野並地区の天白川支川の藤川、及び郷下川が越水氾濫し広範囲にわたり 2m 以上の浸水が生じ、死者 1 名、住家浸水床上 878 棟、床下 255 棟の被害を生じた。また名古屋市では死者 4 名、住家全壊 4 棟、半壊 98 棟、住家浸水床上 9,818 棟、床下 21,852 棟の被害となった（新修名古屋市史）。

⑥ 平成 20（2008）年 8 月 28 日（豪雨）

8 月 28 日に本州付近に停滞する前線に向かって南から暖かく湿った空気が入り込み、大気の状態が不安定となって東海、関東、中国、東北地方などで記録的な大雨になった。愛知県岡崎市では 29 日の 1 時間降水量が 146.5mm、一宮市では 120mm、名古屋市千種区

で84mmを記録するなど短時間に局地的な大雨となった（気象庁ホームページより）。

愛知県では、広田川で破堤、死者2名、住家全壊5棟、半壊3棟、住家浸水床上2,480棟、床下14,106棟の被害を生じた（愛知県地域防災計画）。

本図幅範囲では庄内川流域の海岸低地から干拓地および、天白川低地で浸水害が発生し、名古屋市全体では住家浸水床上1,175棟、床下9,929棟の被害があった（名古屋市地域防災計画）。

### (3) 地盤沈下

濃尾平野の地盤沈下は昭和34年の伊勢湾台風による高潮被害がゼロメートル地帯に大きな被害を及ぼしたことをきっかけに注目されるようになった。濃尾平野では特に干拓地の造成・土壌改良に伴う大量の地下水のくみ上げなどによって帯水層中の水量が減少し、地盤の沈降が起こったと考えられている。昭和40年代後半には10cm/年以上の沈下が広範囲にわたって認められ、その後国・自治体などによって制定された地下水汲みあげに関わる規制の効果によって、昭和48～49年をピークに昭和50年代半ば以降は沈静化傾向にある（環境省ホームページより）。

本図幅範囲では図幅西側の沖積低地から干拓地にかけての広いエリアで昭和40年代からの累積沈下量が50cm～70cmに達する地域が分布するが、昭和40年代後半から50年代の初頭にかけて最大沈下量を記録し現在は沈静化している（東海三県地盤沈下調査会，2012）。

## 6 調査成果図の見方・使い方

### 6.1 地形分類図

#### (1) 自然地形分類図

自然地形分類図は、既存の地形分類図等を参考に、空中写真、地形図等を利用して、宅地造成等により土地の人工改変が行われる前の自然地形を含め、地形の形態・形成時期・構成物質等により土地を分類した地図である（表 6-1）。

これまでの地形分類図では、現状の人工地形が優先して表示される場合があり、改変前の自然地形の詳細が把握できない等の問題を抱えていた。そのため、この調査で提供する自然地形分類図は、地形改変により不明瞭になった地形界線を明確に定めると同時に、かつて存在していた池沼や河川の状況、埋立て前の海岸線の状況、盛土される前の低地の地形等を分類・復元することで、現在は失われた過去の地形を読み取ることができるようにしている。土地をその成り立ちや、生い立ち、形態等により分類した地形分類図からは、災害に対するそれぞれの土地の潜在的可能性を知ることができる。

表 6-1 自然地形分類区分

|        | 分類          | 定義   |
|--------|-------------|--|
| 山地・火山地 | 山地斜面等       | 山地・丘陵地の斜面や台地縁辺の斜面等をいう。海岸の磯や岩礁、離れ岩等を含む。                           |
|        | 麓斜面及び崖錐     | 斜面の下方に生じた岩屑または風化土からなる堆積地形。                                       |
|        | 土石流堆積地      | 岩塊、泥土等が水を含んで急速に移動、堆積して生じた地形で、溪床または谷の出口にあるもの。                     |
| 台地     | 砂礫台地（更新世段丘） | 更新世に形成された、地表の平坦な台状または段丘状の地域で、表層が厚く、且つ未固結の砂礫層からなるもの。              |
| 低地     | 扇状地         | 山麓部にあつて、主として砂や礫からなる扇状の堆積地域。                                      |
|        | 緩扇状地        | 上記の扇状地のうち、傾斜が緩やかな地域。   |
|        | 谷底低地        | 山地、丘陵地、台地を刻む河川の堆積作用が及ぶ狭長な平坦地。                                    |
|        | 氾濫原低地       | 扇状地と三角洲・海岸低地の中間に位置し、河川の堆積作用により形成された広く開けた平坦地で、自然堤防、旧河道または湿地を除く低地。 |
|        | 自然堤防        | 河川により運搬されたシルト～中粒砂が、河道及び旧河道沿いに細長く堆積して形成された微高地。                    |
|        | 旧河道         | 過去の河川流路で、周囲の低地より低い帯状の凹地。   |
|        | 湿地          | 自然堤防や、砂州等の後背に位置するため、河川の堆積作用が比較的及ばない沼沢性起源の低湿地。現況の湿地を含む。           |
|        | 三角洲・海岸低地    | 河口における河川の堆積作用で形成された低平地。  |
|        | 砂州・砂堆、礫州・礫堆 | 波、河流または潮流によって生じた砂または礫の堆積した微高地。                                   |
|        | 砂丘          | 風によって生じた、砂からなる波状の堆積地形。   |
|        | 河原・河川敷      | 現況の河原及び河川敷（低水敷・高水敷）をいい、堤内地の旧河原・旧河川敷を含む。                          |
|        | 浜           | 汀線付近の砂や礫で覆われた平坦地（砂浜及び礫浜）をいい、人工改変地内の旧浜を含む。                        |
| 水部     | 現水部         | 現況が海、または河川、水路、湖沼等の水部。干潟を含む。                                      |
|        | 旧水部         | 過去の海または湖沼等で、現存しないもの。   |
| 副分類    | 崖           | 長く延びる一連の急傾斜の自然斜面。  |
|        | 凹地・浅い谷      | 細流や地下水の働きによって台地または扇状地等の表面に形成された凹地や浅い谷。                           |

## (2) 人工地形分類図

人工地形分類図は、宅地造成等に伴って地形が改変されている範囲を最近の空中写真や地形図等を利用して抽出し、土地の改変状況によって「人工平坦地」や「盛土地」等に分類した地図である(表 6-2)。

昨今、特に都市地域では、市街地の拡大に伴って、従来の地形の多くが大きく改変されるとともに、開発から年月が経過し、最近は土地本来の自然の状況(自然地形)がわからなくなっている地域が各地で見られるようになっている。

丘陵地等で住宅団地の開発のため、切り盛り造成等により宅地整備が行われた「人工平坦地」の中には、現在ほとんど平坦な土地であっても、開発前には尾根や谷が入り組んだ起伏のある土地だったところがある。この調査では、そうした人工平坦地内について、かつて谷があった場所を、開発前の状況がわかる地形図や空中写真から調査し、「旧谷線」として表示している。

また低地では、かつて水田等に利用されていた低湿地等に土を盛って造成した「盛土地」や、海岸や池沼等を埋め立てた「埋立地」、浅い海や干潟等を締め切り排水してできた「干拓地」等の人工地形を分類している。こうした情報を自然地形分類と組み合わせることで活用することにより、土地の安全性に関する情報を得ることができる。

表 6-2 人工地形分類区分

| 大分類                | 小分類 | 摘要   |
|--------------------|-----|--|
| 人工平坦地<br>(切り盛り造成地) | 宅地等 | 山地・丘陵地や台地等の斜面を切土または盛土により造成した平坦地や緩傾斜地のうち、主として住宅や工業団地等の造成によるもの。造成に伴って生じた人工斜面を含む。 |
|                    | 農地等 | 上記のうち、主に農地整備、ゴルフ場造成等によるもの。造成に伴って生じた人工斜面を含む。                                    |
|                    | 旧谷線 | 人工平坦地内の山地・丘陵地にかつて存在した谷線。   |
| 改変工事中の区域           |     | 人工的な地形改変が進行している区域及び採石・採土場、採鉱地等及びその跡地。  |
| 盛土地                |     | 低地等に 0.5m 以上盛土して造成された土地。台地上の凹地・浅い谷部分の盛土地を含む。                                   |
| 埋立地                |     | 水部等を埋め立てして造成された土地。   |
| 干拓地                |     | 水部や干潟、湿地等を堤防で締め切り、排水することによって陸化した土地。  |
| 切土地                |     | 山地・丘陵地や台地等の斜面を人工的に平坦化した土地。   |

## (3) 地形分類図から見た土地の安全性

自然地形分類図及び人工地形分類図からは、災害に対するそれぞれの土地の潜在的な可能性を判断することができる。特に人工地形が分布する地域では自然地形分類を合わせて参照し、その土地の元々の地形条件を把握することにより、土地の安全性に関する詳細な情報を得ることができる。

例えば低地の盛土地は、谷底低地、氾濫原低地、旧河道・三角州・海岸低地・湿地といった、盛土施工前の地形を自然地形分類図から判断することにより、表 6-3 に示すような地震の揺れの大きさや液状化の可能性、高潮や洪水氾濫による浸水の可能性等を知ることができる。

表 6-3 地形分類と潜在的な自然災害の可能性

| 分類              |                         | 地震に際して予想される災害   | 大雨・洪水に対して予想される災害   |  |   |
|-----------------|-------------------------|---|--|--|---|
| 自然地形が分布する地域     | 山地                      | 山地斜面  | 崖や急斜面の近くでは、斜面崩壊や落石の可能性はある。   | 急斜面等では斜面崩壊の可能性があり、上部の地質や崩壊の状況により、豪雨時には谷沿いや谷の出口付近で土石流発生の可能性はある。   |   |
|                 |                         | 麓斜面及び崖錐   | 背後に崖や急斜面がある場所では、斜面崩壊や落石の可能性はある。また、地質や傾斜等の状況によっては地すべりが発生する可能性がある。           | 谷沿いや谷の出口付近では、上部に崖錐や麓斜面が多数存在する場合、豪雨時に土石流発生の可能性はある。また、地質や傾斜等の状況によっては地すべりが発生する可能性がある。   |   |
|                 |                         | 土石流堆積地  | 傾斜のある場所では、斜面崩壊や落石の可能性はある。地質や傾斜等の状況によっては地すべりが発生する可能性がある。                    | 豪雨時に土石流発生の可能性はある。また、地質や傾斜等の状況によっては地すべりが発生する可能性がある。   |   |
|                 | 台地                      | 砂礫台地（更新世段丘）   | 台地の縁辺部の斜面では崩壊や地すべりの可能性がある。   | 通常は洪水時に浸水することはないが、凹地などでは浸水することがある。また、低地や近くの水路との間に十分な高さが無い台地では、洪水時に冠水することがある。逆に低地との間に高さがある台地では、縁辺部での斜面崩壊や地すべりの可能性がある。こうした地域では過去の浸水実績や土砂災害実績を知ることも有効である。 |   |
|                 |                         | 扇状地<br>緩扇状地   | 一般的に地盤は良好であるが、末端部では液状化の可能性はある。   | 豪雨時に砂礫の浸食・堆積の可能性はあるが、排水は良好である。上部の状況により、洪水時には土石流発生の可能性はある。  |   |
|                 |                         | 谷底低地  | 低地の中でも堆積物の状況により地震の揺れが増幅される可能性がある。  | 洪水時に冠水するが、概ね排水は速やかである。斜面の近くでは、斜面崩壊の可能性はある。   |   |
|                 |                         | 氾濫原低地   | 低地の中でも地震の揺れが増幅されやすく、液状化の可能性はある。  | 河川洪水、内水氾濫の可能性はある。  |   |
|                 |                         | 自然堤防  | 低地の中でも地震の揺れが増幅されやすく、液状化の可能性はある。  | 異常の洪水時に浸水することがあるが、周囲の氾濫原低地と比べ高く、排水も速やかである。   |   |
|                 |                         | 旧河道   | 低地の中でも地震の揺れが増幅されやすく、液状化の可能性が特に高い地域である。                                     | 明瞭な凹地では洪水の通り道となる場合があり、排水状況も悪いため、浸水時には長く湛水することがある。  |   |
|                 |                         | 三角州・海岸低地  | 低地の中でも地震の揺れが増幅されやすく、液状化の可能性が特に高い地域である。また、津波により浸水することがある。                   | 洪水時に湛水したり、高潮による浸水の可能性はある。  |   |
| 砂州・砂堆、<br>礫州・礫堆 |                         | 地震の揺れが増幅され、砂州と砂州の間の低地では液状化の可能性はある。また、海岸沿いでは、津波の大きさによっては浸水することがある。 | 比高の小さい砂州・砂堆では洪水や異常の高潮等で冠水することがあるが、排水は速やかである。                               |  |   |
| 湿地              | 地震の揺れが増幅され、地盤変異の可能性はある。 | 盛土の状況により違いはあるが、洪水時には排水がきわめて悪く、長時間湛水する可能性がある。                      |  |  |   |
| 人工地形が分布する地域     | 山地・台地等                  | 人工平坦地（宅地等）  | 特に谷埋め盛土地やその周辺では、地盤が変形したり盛土部分が崩壊する可能性がある。                                   | 背後に急傾斜面がある場合では、斜面崩壊の可能性はある。また、盛土地では崩落や地すべりの可能性がある。   |   |
|                 |                         | 人工平坦地（農地等）  | 特に谷埋め盛土地やその周辺では、地盤が変形したり盛土部分が崩壊する可能性がある。                                   | 背後に急傾斜面がある場合では、斜面崩壊の可能性はある。また、盛土地では崩落や地すべりの可能性がある。   |   |
|                 |                         | 改変工事中の区域  | 採石・採土中の切土地周辺では、斜面崩壊の可能性はある。  | 採石・採土中の切土地周辺では、斜面崩壊の可能性はある。  |   |
|                 | 低地                      | 盛土地   | 谷底低地の盛土地   | 低地の中でも地震の揺れが増幅されやすく、高い盛土地ではさらに揺れが増幅される可能性がある。  | 十分な盛土の高さが無い土地では、洪水時に浸水することがあるが、概ね排水は速やかである。       |
|                 |                         |   | 氾濫原低地の盛土地  | 低地の中でも地震の揺れが増幅されやすく、高い盛土地ではさらに揺れが増幅される可能性がある。  | 十分な盛土の高さが無い土地では、河川洪水、内水氾濫のほか、沿岸部では高潮による浸水の可能性はある。 |
|                 |                         |   | 旧河道、三角州・海岸低地、湿地等の盛土地   | 低地の中でも地震の揺れが増幅されやすく、液状化の可能性はある。高い盛土地では、さらに揺れが増幅される可能性がある。  | 十分な盛土の高さが無い土地では、河川洪水、内水氾濫のほか、沿岸部では高潮による浸水の可能性はある。 |
|                 |                         | 埋立地   | 低地の中でも地震の揺れが増幅されやすく液状化の可能性が特に高い土地である。                                      | 周囲の水面に比べ十分に盛土の高さが無い土地では、河川洪水、内水氾濫、高潮等により浸水する可能性がある。  |   |
|                 |                         | 干拓地   | 低地の中でも地震の揺れが増幅されやすく、液状化の可能性が特に高い土地である。また、海岸線に近く標高も低いため津波による浸水の危険性が高い土地である。 | 洪水時に湛水したり、高潮による浸水の可能性はある。  |   |
|                 |                         | 切土地   | 切土斜面が半固結・未固結の場合、地震の揺れによる崩壊の可能性はある。   | 切土斜面が半固結・未固結の急斜面の場合、斜面崩壊の可能性はある。   |   |
|                 |                         | 旧谷線   | 旧谷線の周辺は厚い盛土の可能性があり、地震の揺れが増幅され、地盤が変形したり盛土部分が崩壊する可能性がある。                     | 旧谷線の周辺は厚い盛土の可能性があり、異常降雨時には地盤が緩み、盛土部分が崩壊する可能性がある。   |   |

## 6.2 土地利用分類図

土地利用分類図は、現在から概ね120年前（明治期）及び概ね40年前（昭和40年代）の2時期の旧版地図を判読し、地形図作成当時の土地利用を分類し、その分布状況を表示した地図である。

（第1期）現在から概ね120年前の明治期の地形図には、当時の市街地や集落、森林・農地・河川等が詳細に描かれている。土地利用分類図では、それらを判読し、主要な土地利用ごとに色分けして表示している。

（第2期）わが国では、1960年代後半から空中写真を利用した精度の高い地形図の整備が全国的に開始された。その時代の地形図から作成した土地利用分類図では、現在から概ね40年前の土地利用の状況を読み取ることができる。

なお、明治期、昭和期の2時期の土地利用分類図は、共通の凡例で分類している。そのため、現在の地形図を背景に2時期の土地利用分類図を見比べることにより、その都市の現在の市街地で、かつてどのような土地利用がなされていたかを知ることができる。

表 6-4 土地利用分類区分

| 分類     | 定義   |
|--------|--|
| 田      | 水稻、い草などを栽培している田。季節により畑作物を栽培するものを含む。                                  |
| 沼田     | 泥が深く、ひざまでぬかるような田（この分類は明治期だけに適用）。                                     |
| 畑      | 麦・陸稲・野菜などを栽培する土地をいい、牧草地、芝地を含む。                                       |
| 果樹園    | りんご・梨・桃・ブドウなどの果樹を栽培する土地。   |
| 樹木畑    | 桑、茶を栽培している土地。桐・はぜ・こうぞ・しゅろ等を栽培している畑を含む。                               |
| 森林     | 高さ2m以上の多年生植物の密生している地域。植林地においては樹高が2m未満であっても森林とする。高さ2m以下の竹、笹の密生している土地。 |
| 荒地・海浜等 | 自然の草地からなる土地及び露岩地、崩壊地、砂礫地などで植物に覆われていない土地。万年雪で覆われた土地を含む。               |
| 湿地     | 干上がった湖沼の跡などの排水の悪い土地で、雨期には水をたたえるところ。                                  |
| 建物用地   | 住宅や建物類似の構築物、商業・業務・工業・公共・流通・通信・各種の処理施設等に利用されている土地。                    |
| 交通施設用地 | 鉄道、道路、空港などに利用されている土地。  |
| その他の用地 | 空地、公園緑地、墓地、採石地、採鉱地、自衛隊などの特別な用途に利用されている土地。                            |
| 水部     | 河川、湖沼、ため池等の内水面および海面や干潟。  |

## 6.3 災害履歴図

災害履歴図は、国、地方公共団体、その他関係各機関等が調査した資料に基づき、地域に大きな影響を与えた災害の発生状況や、その被害の様子を示した地図で、災害の種類ごとに分けて作成している。この図では、比較的信頼性の高い情報のうち、最低でも縮尺1/50,000（図上の1cmが現地の500mに相当）レベル以上の精度を持つ資料を選定して表示している。なお、地図には災害状況等の情報とともに、対象とした資料で扱った調査範囲を示している。引用する被害調査図等の資料が不十分なため、地図に掲載されていない災害があるほか、災害の種類や規模等の条件により、調査範囲外の地域でも被害が生じているような場合があり、この地図に全ての災害が表示されているわけではないことに留意する必要がある。

なお、災害履歴図の作成にあたり参照した資料の詳細や、被害の場所等を特定できな

い災害の状況等、その他参考になる事項を、この説明書に記述している。災害履歴図は、地形分類図や土地利用図等と見比べたり、さらに詳しい文献を調べたりすることで、その土地の安全性について理解を深めることができる。

なお、災害発生後の堤防整備や下水道整備、地盤の改良等の防災対策が行われている場合などには、災害発生当時に比べて、現在は土地の安全性が向上している可能性があることにも留意する必要がある。

#### 6.4 成果図面の使い方

本図幅内で今後も想定される自然災害被害としては、本調査の災害履歴等からみて、台風や異常降雨時の高潮や河川氾濫等の浸水被害・土砂災害と、大規模地震発生時の建物倒壊や液状化等の地震災害、津波災害が考えられる。特に、本図幅内では、海面の埋立・干拓によって軟弱な地盤の低地が大きな面積を占めることから、大雨による洪水や高潮、地震による液状化や津波により、甚大な被害が生じることが想定される。出水・高潮・津波の危険に関する危険区域として、1959年伊勢湾台風により激甚な高潮被害を受けた名古屋市南部の臨海地域は1961年には危険区域指定と建築構造規制が行われた。各種の被害想定については、国や各自治体が作成している各種ハザードマップにより、現時点で災害が発生した場合の被害の規模について、ある程度予測することが可能である。

しかし、今後も地形改変をとまなう土地利用の変化が続くと仮定した場合、ハザードマップ等からでは、新たに地形改変が行われた場所でどのような災害被害が発生するかを予測することは困難である。本図幅においては、地理的には名古屋市都心を含み市街地が広がっているものの、地形的には地形改変が行われていない山麓部の小起伏地や低地部の氾濫原低地等もまだ多く残っており、これからも開発余地がある地域といえる。また、すでに人工改変が行われているような場所でも、建築物の更新や再開発等が行われることも考えられる。

そのような場合において、その土地本来の地形や過去の災害履歴から、自然災害に対する危険度が高い地域なのかどうかを事前に知っておくことは非常に重要であり、災害が発生した場合でも被害を最小限に留めるための対策を取ることが可能となる。

本成果図面の使い方としては、一例として以下のような利用方法が考えられる。

- ・現在、本図幅内の土地に住む住民、あるいはこれから住まいを構える住民に対し、その土地の地形特性からみた災害に対する危険性をあらかじめ認識いただき、住民自ら、災害が発生した場合を想定した避難行動や被害を最小限にするための安全対策を考える機会を提供する。
- ・各地域における自治会や自主防災組織等が、自分たちが住む地域の自然災害に対する危険性や過去の被害状況を把握することにより、より具体的な災害状況を想定した避難訓練の実施や、防災物資等の備蓄に役立てることができる。
- ・学校教育や生涯学習等の場を通して、自分たちの住む地域の自然地誌を学ぶとともに、災害と地形との因果関係や過去の災害履歴等から、災害から身を守るための防災教育での資料として活用する。

- ・低地部で新たな開発等を行う場合、地形分類より地盤強度が想定できることから、軟弱地盤の土地においては、計画場所の変更や軟弱地盤対策工法の選択等、事前に対策を講じることが可能となる。また、災害履歴から、その土地における過去の被害程度の把握ができることから、防災・減災に向けた対策の必要性についても事前に検討できる。
- ・緩斜面で切り盛り造成等により人工改変を行う場合、地形分類より地盤強度が想定できることから、麓斜面や崖錐などの落石や地すべり等土砂災害の危険性が高い場所では、計画場所の変更や砂防対策の施工等、事前に対策を講じることが可能となる。また、災害履歴から、その土地と似た地形条件の場所の土砂災害発生履歴が分かることから、防災・減災に向けた対策の必要性についても事前に検討できる。

防災に関しては、これまでは行政の側から語られることが多かったが、近年の市町村合併による行政単位の拡大や、行政改革にともなう行政職員の減少や防災関連費用の削減等により、行政のみではきめ細やかな防災対策の実施が困難な状況となっている。

また、近年では集中豪雨などによる災害の局所化、都市部への人口集中などによる被害の甚大化が予測され、事前の防災対策の必要性・重要性がますます高まっている。

そのため、上記で述べたように、本成果図面を活用することにより、行政だけでなく、地域住民が主体となった防災・減災対策を立てるとともに、新たな土地利用を計画する際に、事前に自然災害に対する危険性を予測し、計画の変更や防災・減災対策の導入に役立てることが望まれる。



## 7 引用資料及び参考文献

### 7.1 引用資料

本調査成果図等の作成にあたっては、以下の資料、文献等を引用または参照した。

#### (1) 人工地形及び自然地形分類図

- ①「自然地形分類図」は、2万5千分の1土地条件図「名古屋南部」(国土地理院、1975)を基礎資料として、以下の既存資料を参考に、空中写真の補足判読により修正・編集した。

国土地理院(1975):1:25000土地条件図「名古屋南部」.

愛知県(1985):5万分1土地分類基本調査(地形分類図)「桑名・名古屋南部」判読に使用した空中写真は、

M197-A-3(複)(昭21.7.16米軍撮影),M198-A-1(複)(昭21.7.18米軍撮影),M554A(昭22.10.13米軍撮影),M628(昭22.11.01米軍撮影),M661-A(昭22.11.21米軍撮影),M1245-A(昭24.3.8米軍撮影)。

- ②「人工地形分類図」は、2万5千分の1地形図「鳴海」(平成13年修正)「名古屋南部」(平成16年更新)「蟹江」(平成16年更新)「飛島」(平成16年更新)の読図及び国土地理院撮影の空中写真(CCB-2000-1X)の補足判読により作成したもので、おおむね平成12年時点の地形の状況を反映している。

なお、本図の作成にあたっては、海津正倫(名古屋大学名誉教授・奈良大学教授)、藤本潔(南山大学教授)、堀和明(名古屋大学准教授)の各氏のご指導をいただいた。

#### (2) 土地利用分類図

「土地利用分類図」は、現在から約120年前(1891年頃)及び約40年前(1970年頃)の2時期を対象に、それぞれの年代に測量された地形図を資料として、当時の土地利用の状況を、資料とした地形図から読み取れる情報の範囲内で分類し、その結果を5万分の1の縮尺精度に編集したものである。「土地利用分類図」の作成にあたっては、以下の地形図を利用した。

##### 【第1期(明治期、1891年頃)】

5万分1地形図「熱田町」「桑名町」明治24年測図(明治33.12.25発行)

##### 【第2期(昭和期、1970年頃)】

5万分1地形図「名古屋南部」昭和45年編集(昭和46.6.30発行)

なお、本図の背景に使用した地形図は、調査時点の最新図(平成12年要部修正)である。

#### (3) 災害履歴図

災害履歴図の作成にあたっては、以下の資料を引用した。

##### 【水害】

- ① 1959年9月水害

- ・昭和 34 (1959) 年 9 月降雨 (伊勢湾台風) による浸水区域を、国土地理院『洪水被害状況図』、名古屋市 (1961)『伊勢湾台風災害誌 (付図 4 浸水区域と交通局施設の被害図)』より編集。
- ② 1972 年 7 月水害
  - ・昭和 47 (1972) 年 7 月降雨 (集中豪雨) による浸水区域を、愛知県 (2001)『境川流域浸水実績図 (昭和 46 年 8 月豪雨、昭和 47 年 7 月豪雨、昭和 51 年 9 月豪雨、平成 3 年 9 月台風 18 号、平成 12 年 9 月豪雨)』より編集。
- ③ 1974 年 7 月水害
  - ・昭和 49 (1974) 年 7 月降雨 (豪雨) による浸水区域を、愛知県 (1983)『昭和 49 年 7 月豪雨、昭和 51 年 9 月豪雨 日光川流域浸水実績図 (筏川・鍋田川流域を含む)』、愛知県 (2001)『昭和 49 年 6 月豪雨、昭和 49 年 7 月豪雨、昭和 51 年 9 月豪雨、平成 3 年 9 月台風 18 号、平成 12 年 9 月豪雨 浸水実績図 (阿久比川, 高浜川, 矢田川 (知多), 大田川始め 43 河川流域)』、愛知県 (2001)『昭和 49 年 7 月豪雨、昭和 50 年 7 月豪雨、昭和 51 年 9 月豪雨、平成 3 年 9 月台風 18 号、平成 12 年 9 月豪雨 浸水実績図 (矢田川・内津川・八田川・堀川・天白川・山崎川・郷瀬川流域)』、愛知県 (2005)『新川流域浸水実績図 (昭和 49 年 7 月豪雨、昭和 51 年 9 月豪雨、平成 3 年 9 月台風 18 号、平成 12 年 9 月豪雨)』より編集。
- ④ 1976 年 9 月水害
  - ・昭和 51 (1976) 年 9 月降雨 (台風 17 号) による浸水区域を、愛知県 (1983)『昭和 49 年 7 月豪雨、昭和 51 年 9 月豪雨 日光川流域浸水実績図 (筏川・鍋田川流域を含む)』、愛知県 (2001)『境川流域浸水実績図 (昭和 46 年 8 月豪雨、昭和 47 年 7 月豪雨、昭和 51 年 9 月豪雨、平成 3 年 9 月台風 18 号、平成 12 年 9 月豪雨)』、愛知県 (2001)『昭和 49 年 6 月豪雨、昭和 49 年 7 月豪雨、昭和 51 年 9 月豪雨、平成 3 年 9 月台風 18 号、平成 12 年 9 月豪雨 浸水実績図 (阿久比川, 高浜川, 矢田川 (知多), 大田川始め 43 河川流域)』、愛知県 (2001)『昭和 49 年 7 月豪雨、昭和 50 年 7 月豪雨、昭和 51 年 9 月豪雨、平成 3 年 9 月台風 18 号、平成 12 年 9 月豪雨 浸水実績図 (矢田川・内津川・八田川・堀川・天白川・山崎川・郷瀬川流域)』、愛知県 (2005)『新川流域浸水実績図 (昭和 49 年 7 月豪雨、昭和 51 年 9 月豪雨、平成 3 年 9 月台風 18 号、平成 12 年 9 月豪雨)』より編集。
- ⑤ 2000 年 9 月水害
  - ・平成 12 (2000) 年 9 月降雨 (台風 14 号: 東海豪雨) による浸水区域を、愛知県 (2001)『境川流域浸水実績図 (昭和 46 年 8 月豪雨、昭和 47 年 7 月豪雨、昭和 51 年 9 月豪雨、平成 3 年 9 月台風 18 号、平成 12 年 9 月豪雨)』、愛知県 (2001)『昭和 49 年 6 月豪雨、昭和 49 年 7 月豪雨、昭和 51 年 9 月豪雨、平成 3 年 9 月台風 18 号、平成 12 年 9 月豪雨 浸水実績図 (阿久比川, 高浜川, 矢田川 (知多), 大田川始め 43 河川流域)』、愛知県 (2001)『昭和 49 年 7 月豪雨、昭和 50 年 7 月豪雨、昭和 51 年 9 月豪雨、平成 3 年 9 月台風 18 号、平成 12 年 9 月豪雨 浸水実績図 (矢田川・内津川・八田川・堀川・天白川・山崎川・郷瀬川流域)』、愛知県 (2005)『新川流域浸水実績図 (昭和 49 年 7 月豪雨、昭和 51 年 9 月豪雨、平成 3 年 9 月台風 18 号、平成 12 年 9 月豪雨)』より編集。

⑥2008年8月水害

- ・平成20(2008)年8月降雨(豪雨)により浸水区域を、愛知県『新川流域浸水実績図(平成20年8月末豪雨)、名古屋市(2010)『(平成22年度)名古屋市水防計画付図(名古屋市浸水実績図)』より編集。

【土砂災害】

① 1976年9月災害

- ・昭和51(1976)年9月降雨(台風17号)による土砂災害発生箇所を、愛知県砂防課提供資料より編集。

② 1991年9月災害

- ・平成3(1991)年9月降雨(台風18号)による土砂災害発生箇所を、愛知県砂防課提供資料より編集。

③ 1999年6月災害

- ・平成11(1999)年6月降雨(梅雨前線豪雨)による土砂災害発生箇所を、愛知県砂防課提供資料より編集。

④ 2000年9月災害

- ・平成12(2000)年9月降雨(台風14号:東海豪雨)による土砂災害発生箇所を、愛知県砂防課提供資料より編集。

【地震被害】

① 1891年濃尾地震被害

- ・建物被害は、飯田汲事(1985)『明治24年10月28日濃尾地震の震害と震度分布』より転載。
- ・液状化被害は、若松加寿江(2011)『日本の液状化履歴マップ 745-2008(DVD-ROM付き)』より転載。

② 1944年東南海地震被害

- ・建物被害は、飯田汲事(1985)『昭和19年12月7日東南海地震の震害と震度分布』より転載。
- ・液状化被害は、『若松加寿江(2011) 日本の液状化履歴マップ 745-2008(DVD-ROM付き)』より転載。

③ 1945年三河地震被害

- ・建物被害は、飯田汲事(1985)『昭和20年1月13日三河地震の震害と震度分布』より転載。
- ・液状化被害は、若松加寿江(2011)『日本の液状化履歴マップ 745-2008(DVD-ROM付き)』(No:JLM1473)より転載。

【地盤沈下】

- ・地盤沈下量は、中部地方整備局『東海三県地盤沈下調査会 地盤沈下データ』より編集。

なお、各地図の作成に当たっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の5万分の1地形図、数値地図50000(地図画像)、数値地図25000(土地条件)及び基盤地図情報を使用した。(承認番号 平23 情使、第492号)

## 7.2 参考文献

本調査説明書の作成にあたっては、以下の資料、文献等を参考とした。

(地形・土地利用)

- 愛知県(1986) 1/50,000 土地分類基本調査(地形分類図)「津島・名古屋北部」, 愛知県企画部土地利用調整課.
- 愛知県(1985) 1/50,000 土地分類基本調査(地形分類図)「桑名・名古屋南部」, 愛知県企画部土地利用調整課.
- 井関弘太郎(1962) 沖積平野の基礎的問題点, 名古屋大学文学部研究論集 XXIV, 51-74.
- 海津正倫(1979) 更新世末期以降における濃尾平野の地形発達過程. 地理学評論 52(4), 199-208.
- 海津正倫(1988) 濃尾平野における縄文海進最盛期頃の海水準と地形変化. 『日本における沖積平野・沖積層の形成と第四紀末期の自然環境とのかかわりに関する研究』, 昭和 61-62 年度文部省科学研究費補助金総合研究(A)報告書, 115-122.
- 海津正倫(1992) 木曾川デルタにおける沖積層の堆積過程と地形発達. 名古屋大学加速器質量分析計業績報告書, 3, 29-36.
- 大矢雅彦(1993) 新訂 河川の開発と平野, 大明堂.
- 小笠原節夫(1963) 愛知県鍋田干拓地の伊勢湾台風被災前後の集落計画. 地理学評論 36(5), 267-279.
- 小野映介(2004) 濃尾平野における完新世後期の海岸線変化とその要因. 地理学評論 77(2), 77-98.
- 活断層研究会(1980) 日本の活断層, 東京大学出版会.
- 活断層研究会(1991) 新編日本の活断層, 東京大学出版会.
- 環境庁(1981) 1/50,000 現存植生図「名古屋南部」, 第2回自然環境保全基礎調査(植生調査). 環境庁.
- 岐阜県(1984) 1/50,000 土地分類基本調査(地形分類図)「岐阜」, 岐阜県企画部土地対策課.
- 岐阜県(1986) 1/50,000 土地分類基本調査(地形分類図)「瀬戸・明智・根羽」, 岐阜県企画部土地対策課.
- 金田章裕(1976) 条里制施行地における島畑景観の形成. 地理学評論 49(4), 249-266.
- 春日井団研グループ(1971) 春日井市付近の地形面. 竹原平一教授記念論文集, 153-161.
- 桑原 徹(1968) 濃尾盆地と傾動地塊運動. 第四紀研究, 7(4), 235-247.
- 経済企画庁(1972) 1/50,000 土地分類基本調査(地形分類図)「豊田」, 経済企画庁.
- 経済企画庁(1974) 地形分類図, 20 万分の 1 土地分類図「愛知県」, 経済企画庁.
- 建設省(1979) 庄内川庄内川治水地形分類図(下流). 建設省庄内川工事事務所.
- 建設省地理調査所(1960) 伊勢湾台風による高潮・洪水と地形との関係. 建設省地理調査所
- 国土交通省(2011) 1/50,000 土地分類基本調査(土地履歴調査)説明書「岐阜」「瀬戸」「名古屋南部」「豊田」. 国土交通省国土政策局国土情報課.
- 国土交通省(2004) 庄内川庄内川治水地形分類図(下流). 国土交通省中部地方整備局庄内川河川事務所.

- 国土庁(1975) 地形分類図, 20 万分の 1 土地分類図「岐阜県」, 国土庁.
- 国土地理院(1968a) 1/25000 土地条件図「名古屋南部」. 国土地理院
- 国土地理院(1968b) 1/25000 土地条件図 (中京地区). 国土地理院技術資料 D-4.
- 国土地理院(1975a) 土地条件調査報告書(濃尾地区). 国土地理院技術資料 D-21.
- 国土地理院(1975b) 1/25000 土地条件図「名古屋南部」. 国土地理院
- 国土地理院 (1996) 1/25000 都市圏活断層図「名古屋南部」. 国土地理院.
- 近藤文男 (2005) 知多半島のため池の歴史・現状・多面的機能. 農業土木学会誌, 73(1), 23-26.
- 坂本 亨・桑原 徹・糸魚川淳二・富田康秀・脇田浩二・尾上 亨(1986) 5 万分の 1 地域地質研究報告「名古屋見南部地域の地質」, 地質調査所, 64p.
- 地震調査研究推進本部地震調査委員会 (2004) 屏風山・恵那山断層帯及び猿投山断層帯の長期評価について. [http://www.jishin.go.jp/main/chousa/04oct\\_byoubu/index.htm](http://www.jishin.go.jp/main/chousa/04oct_byoubu/index.htm)
- 須貝俊彦・杉山雄一(1999) 深層ボーリング (GS-NB-1) と大深度地震探査に基づく濃尾傾動盆地の沈降・傾動速度の総合評価. 地質調査所速報 no. EQ/99/3, 7-87.
- 土質工学会中部支部 編著 (1988) 最新名古屋地盤図. 名古屋地盤図出版会.
- 名古屋港管理組合 (2012) 名古屋港の概要. <http://www.port-of-nagoya.jp/>
- 名古屋市みどりの協会 (2012) 鶴舞公園の歴史.  
[http://www.nga.or.jp/park/tsuru/tsuruma\\_history.html](http://www.nga.or.jp/park/tsuru/tsuruma_history.html)
- 日本地誌研究所(1969) 日本地誌 12 愛知県・岐阜県. 二宮書店.
- 浜 英彦(1989) 人口集中地区, 地理学辞典改訂版. 二宮書店, 319.
- 馬場俊介 (1991) 愛知の埋立:濃尾平野南部の干拓と名古屋港築港. 土と基礎 39(1), 29-36.
- 春山成子・大矢雅彦(1986) 地形分類を基礎とした庄内川, 矢作川の河成平野の比較研究. 地理学評論, 59(9), 571-588.
- 平岡昭利・野間晴雄(2000) 地図で読む百年 中部 1. 古今書院.
- 堀田典裕 (1995) 八事丘陵地における住宅地の形成過程とその空間的特質について : 近代名古屋における郊外住宅地開発(II). 日本建築学会計画系論文集 471, 165-173.
- 町田 貞・太田陽子・田中真吾・白井哲之(1962):矢作川下流域の地形発達史. 地理学評論, 35, 505-524.
- 町田 洋・海津 正倫・松田 時彦・小泉 武栄(2006) 日本の地形 5 中部. 東京大学出版会.
- 松田博幸(1969) 知多半島の地形発達. 東北地理 21(1), 5-16.
- 松田 磐余 (1968) 濃尾平野における空中写真による土質判読, 地理学評論, 41(4), 285-290.
- 安田喜憲(1971) 濃尾平野庄内川デルタにおける歴史時代の地形変化. 東北地理 23(1), 29-36.
- 山口正秋・須貝俊彦・大上隆史・藤原 治・大森博雄 (2006) 高密度ボーリングデータ解析にもとづく濃尾平野沖積層の三次元構造, 地学雑誌, 115(1), 41-50.
- 山野明男 (1998) 入植農家からみた干拓地農業の変容過程-名古屋市近郊鍋田干拓地の事例-. 地学雑誌, 107(1), 25-48.

吉田友彦・奥部雪絵・熊谷 雄・三宅 醇（2000） 愛知県における市街化区域内土地改良事業地区の発生状況. 日本建築学会計画系論文集, 527, 209-215,  
山口恵一郎・沢田 清・清水靖夫・佐藤 侑・中島義一(1974) 日本図誌大系中部 I. 朝倉書店.

(災害履歴)

愛知県（2010）「愛知県史別編自然」.

愛知県（2011）「愛知県地域防災計画」.

飯田汲事（1985）明治 24 年 10 月 28 日濃尾地震の震害と震度分布. 飯田汲事 1985 東海地方地震・津波災害誌（飯田汲事教授論文選集）.

飯田汲事（1985）昭和 19 年 12 月 7 日東南海地震の震害と震度分布. 飯田汲事 1985 東海地方地震・津波災害誌（飯田汲事教授論文選集）.

飯田汲事（1985）昭和 20 年 1 月 13 日三河地震の震害と震度分布. 飯田汲事 1985 東海地方地震・津波災害誌（飯田汲事教授論文選集）.

井口隆（2002）2000 年 9 月東海豪雨による土砂災害の発生状況. 防災科学技術研究所主要災害調査, No. 38, pp. 177-195.

井口隆（2009）伊勢湾台風災害の特徴. 防災科学技術研究所研究報告, No. 75, pp. 1-10.

一宮市（2013）「地域防災計画」.

宇佐美龍夫（2003）最新版日本地震被害総覧 416-2001. 東京大学出版会, 605p.

環境省水・大気環境局（2011）平成 22 年度全国の地盤沈下の概況.

佐藤照子（2002）2000 年東海豪雨災害における都市型水害被害の特徴について. 防災科学技術研究所主要災害調査, No. 38, pp. 99-162.

地震調査研究推進本部地震調査委員会（2009）日本の地震活動－被害地震から見た地域別の特徴. 第 2 版, 496p.

鈴木真一(2002)2000 年 9 月に東海地方で発生した豪雨のメソ  $\alpha$  スケールの特徴について. 防災科学技術研究所主要災害調査, No. 38, pp. 5-16.

瀬尾佳美・佐藤照子（2002）都市型水害としての東海豪雨災害：意識調査報告. 防災科学技術研究所主要災害調査, No. 38, pp. 163-176.

高村博・西口哲夫・木下武雄・富永雅樹・福園輝旗・大倉博（1977）1976 年台風第 17 号による長良川地域水害調査報告. 防災科学技術研究所主要災害調査, No. 12, pp. 1-92.

東海三県地盤沈下調査会（2012）平成 23 年における濃尾平野の地盤沈下の状況.

内閣府（2008）中央防災会議「災害教訓の継承に関する専門調査会」第 2 期報告書【風水害】1059 伊勢湾台風.

内閣府（2005）中央防災会議「災害教訓の継承に関する専門調査会」第 1 期報告書【地震・津波災害】1854 安政東海地震・安政南海地震.

内閣府（2005）中央防災会議「災害教訓の継承に関する専門調査会」第 1 期報告書【地震・津波災害】1891 濃尾地震.

中根和郎（2002）東海豪雨における豪雨と中小河川水位の関係. 防災科学技術研究所主要災害調査, No. 38, pp. 17-98.

名古屋市（2010）「新修名古屋市史資料編自然」.

名古屋市（2010）「地域防災計画」.

春山成子, 大矢雅彦 (1986) 地形分類を基礎とした庄内川, 矢作川の河成平野の比較研究. 地理学評論 Ser. A, 59(10), pp. 571-588.

米谷恒春 (2002) 東海地方豪雨災害の概要, 防災科学技術研究所主要災害調査, No. 38, pp. 1-4.

若松加寿江 (2011): 日本の液状化履歴マップ 745-2007 (DVD+解説書), 東京大学出版会, 90p.

環境省ホームページ「全国地盤環境情報ディレクトリ (平成 22 年度版)」  
([http://www.env.go.jp/water/jiban/dir\\_h22/index.html](http://www.env.go.jp/water/jiban/dir_h22/index.html)) (平成 23 年)

気象庁ホームページ「気象統計情報」  
(<http://www.jma.go.jp/jma/menu/report.html>)

気象庁ホームページ「災害をもたらした気象事例」  
(<http://www.data.jma.go.jp/obd/stats/data/bosai/report/index.html>)  
(<http://www.data.jma.go.jp/obd/stats/data/bosai/report/index2.html>) (平成 23 年)

国土交通省中部地方整備局庄内川河川事務所「9.12 災害の概要」  
(<http://www.cbr.mlit.go.jp/shonai/tanto/kasen/suigai/shonai/2000/gaiyo.html>)



# 資料

災害年表（地震災害）

災害年表（水害）

## 災害年表(地震災害)

| 西暦<br>(和暦)                  | 地域<br>(地震名称)                      | 震央位置(°)        |                | 規模<br>(M)    | 記事   |   |
|-----------------------------|-----------------------------------|----------------|----------------|--------------|--|---|
|                             |                                   | 北緯             | 東経             |              | 愛知県  | 出典  |
| 715年7月5日<br>(霊龜1年5月26日)     | 三河                                | 34 4/5         | 137.4          | M6.5~<br>7.0 | 正倉47破潰、百姓の廬舎陥没したものあり、三河の国府(現豊川)を中央にとる。   | 新編日本被害地震総覧<br>[416]-2001                                      |
| 1498年9月20日<br>(明応7年8月25日)   | 東海道全般                             | 34             | 138            | M8.2~<br>8.4 | 紀伊から房総にかけての海岸と甲斐で新道大きく、熊野本宮の社殿倒れ、那智の坊舎崩れ、遠江では山崩れ地裂けた。震害に比して津波の被害が大きく、津波は紀伊から房総の海岸を襲った。   | 新編日本被害地震総覧<br>[416]-2001                                      |
| 1586年1月18日<br>(天正13年11月29日) | 畿内・東海・東山・北陸諸道<br>(天正地震)           | 36.0           | 136.9          | M≒7.8        | 飛騨白川谷の保木脇で大山崩れ、掃雲山城を含めて倒家埋没300余戸で死者多数。大垣、尾張、近江長浜、阿波でも被害があり、余震は翌年まで続いた。   | 新編日本被害地震総覧<br>[416]-2001<br>※参照 地震名称：日本の地震活動―被害地震から見た地域別の特長―  |
| 1605年2月3日<br>(慶長9年12月16日)   | 東海・南海・西海諸道<br>(慶長地震)              | A33.5<br>B33.0 | 138.5<br>134.9 | M7.9         | 2つの地震A、Bが生じたものと考えられる。震害の記録は見当たらないが、津波は犬吠岬から九州に至る太平洋岸に押し寄せ、家屋流失や死者などの被害が大きかった。  | 新編日本被害地震総覧<br>[416]-2001<br>※参照 地震名称：国立天文台編(2011)「理科年表 平成24年」 |
| 1707年10月28日<br>(宝永4年10月4日)  | 五畿七道<br>(宝永地震)                    | 33 1/5         | 136            | M8.4         | わが国最大級の地震の1つ。家屋倒潰地域は、駿河中央部・甲斐西部・信濃・東海道・美濃・紀伊・近江・畿内・播磨・大聖寺・富山、および中国・四国・九州に及ぶ。津波は伊豆半島から九州に至る太平洋沿岸及び大阪湾・播磨・伊予・防長を襲った。三河・尾張で死者19人、家屋全潰8,573棟、破損・半壊5,918棟の被害があった。 | 新編日本被害地震総覧<br>[416]-2001                                      |
| 1854年12月23日<br>(安政1年11月4日)  | 東海・東山・南海諸道<br>(安政東海地震)            | 34             | 137.8          | M8.4         | 被害区域は関東から近畿に及び、震害の最もひどかったのは沼津から伊勢湾にかけての海岸で、倒潰率は10%以上、過半に達する宿も多かった。この地震による津波が房総から土佐までの沿岸を襲い、大きな被害があった。  | 新編日本被害地震総覧<br>[416]-2001                                      |
| 1854年12月24日<br>(安政1年11月5日)  | 畿内・東海・東山・北陸・南海・山陰・山陽道<br>(安政南海地震) | 33.0           | 135.0          | M8.4         | この地震は安政東海地震の32時間後に起き、近畿地方及びその周辺での震害や津波の様子をはっきりと2つに区別できない。被害区域は中部から九州に及ぶ。   | 新編日本被害地震総覧<br>[416]-2001                                      |
| 1891年10月28日<br>(明治24)       | 愛知県・岐阜県<br>(濃尾地震)                 | 35.6           | 136.6          | M8.0         | 仙台以北を除き日本中で有感。激震地域は根尾川・揖斐川上流地方。三河・尾張で死者 2,339、負傷者 4,594、家屋全潰 68,899に及ぶ。  | 新編日本被害地震総覧<br>[416]-2001                                      |

| 西暦<br>(和暦)            | 地域<br>(地震名称)    | 震央位置(°) |       | 規模<br>(M) | 記事  |                          |
|-----------------------|-----------------|---------|-------|-----------|---|--------------------------|
|                       |                 | 北緯      | 東経    |           | 愛知県   | 出典                       |
| 1944年12月7日<br>(昭和19)  | 東海道沖<br>(東南海地震) | 33.8    | 136.6 | M7.9      | 被害は静岡・愛知・岐阜・三重に多く、滋賀・奈良・和歌山・大阪・兵庫にも小被害があった。津波が伊豆半島から紀伊半島にかけて襲い、特に三重県・和歌山県の被害が大きかった。愛知県の被害は、死者461人、負傷者1,188人、住家全壊6,968戸、住家半壊19,676戸、非住家全半壊15,129棟、浸水家屋150。 | 新編日本被害地震総覧<br>[416]-2001 |
| 1945年1月13日<br>(昭和20)  | 愛知県南部<br>(三河地震) | 34.7    | 137   | M6.8      | とくに渥美湾岸の幡豆郡の被害が大きかった。振動は急激だったようで、福地・吉田・一色では全壊家屋が少なく、山地の室場・豊坂・三和・幡豆では多くなっている。小津波が発生、蒲郡で約1m、千間で30cmであった。  | 新編日本被害地震総覧<br>[416]-2001 |
| 1946年12月21日<br>(昭和21) | 南海道沖<br>(南海地震)  | 33      | 135.6 | M8.0      | 被害は中部地方から九州にまで及び、津波は房総半島から九州に至る沿岸を襲った。愛知県では、死者10名、負傷者19名、住家全半壊197戸の被害があった。  | 新編日本被害地震総覧<br>[416]-2001 |

※被害実数は文献により差異があります。

災害年表(風水害) 江戸時代以前

| 和暦   |    | 西暦   |    |    | 記事(愛知県災害誌)   | 出典  |
|------|----|------|----|----|--|---|
| 年号   | 年  | 年    | 月  | 日  |  |   |
| 和銅   | 2  | 709  | 7  |    | 東海道・近畿地方(長雨)。  | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM   |
| 和銅   | 6  | 713  | 11 | 27 | 三河・尾張では暴風のため、樹木が倒れ、農作物に被害があった。このため穀物は減収。   | 愛知県の気象(1961)<br>愛知県史別編自然_付録CD-ROM                           |
| 神亀   | 3  | 726  |    |    | この年尾張に洪水があって、ききんとなり、飢民2,242戸に達した。遠江の5都も水害によりききん。   | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM   |
| 神護景雲 | 1  | 767  |    |    | この年、尾張に洪水があり、中島・海部郡に大被害が出た。ききんとなる。   | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM   |
| 神護景雲 | 3  | 769  | 9  | 17 | 木曾川の洪水により、葉栗・海部・中島3郡が水害をこうむった。   | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM   |
| 神護景雲 | 3  | 769  | 10 | 15 | 木曾川の洪水により、葉栗・海部・中島の3郡に水害をこうむり、家屋浸水・水田を冠水。また、国府・国分寺(2寺)が流失し、大きな被害があった。  | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM   |
| 宝亀   | 6  | 775  | 9  | 21 | 尾張・伊勢・美濃の3か国が暴風雨により、大被害を受けた。木曾川氾濫のため、沿川の地では、死者300余人、牛馬1,000余頭、国分寺・諸寺院19、その他家屋の被害は非常に多かった。  | 愛知県の気象(1961)<br>天正14年(1586年)の洪水による木曾川河道の変遷と天正地震の影響について      |
| 延暦   | 15 | 796  | 8  |    | 大雨・洪水があり、尾張では、ききんとなる。  | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM   |
| 嘉祥   | 3  | 850  |    |    | 尾張に被害があった。   | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM   |
| 仁寿   | 4  | 854  | 3  |    | 尾張の河川が氾濫した。この年、沿川の地では水難に苦しみ、ききんとなる。なお、この年ごろから、河川上流山地の植樹が完成期に入った。   | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM   |
| 貞観   | 8  | 866  | 5  |    | 尾張、長雨のため水害を被る。   | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM   |
| 仁和   | 3  | 887  | 9  | 12 | 伊勢湾に高潮があったもよう。   | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM   |
| 長祿   | 2  | 1458 | 10 | 26 | 尾張・三河に暴風雨、洪水があったもよう。   | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM   |
| 寛正   | 6  | 1465 | 9  | 14 | 尾張・三河に暴風雨、洪水があったもよう。   | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM   |
| 文明   | 18 | 1486 | 9  | 10 | 東海道・近畿諸国暴風雨。   | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM   |
| 明応   | 1  | 1492 | 7  | 2  | 東海道・近畿諸国大雨・洪水。   | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM   |
| 明応   | 5  | 1496 | 10 | 2  | 暴風雨・洪水があり、伊勢湾沿岸では高潮被害があったもよう。  | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM   |
| 永正   | 14 | 1517 | 8  | 10 | 諸国、暴風、洪水被害あり。  | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM   |
| 天文   | 1  | 1532 | 9  | 26 | 洪水により、矢作川の支流・青木川・伊賀川(岡崎)の堤防が破壊された。   | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM   |
| 天文   | 9  | 1540 | 9  | 21 | 尾張・三河、暴風雨。ところどころで大木が倒れ、高潮により豊川川口の前芝・元梅敷では大被害をこうむった。  | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM   |
| 天文   | 10 | 1541 | 9  | 11 | 尾張・三河、暴風雨・洪水。  | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM   |
| 天文   | 13 | 1544 | 8  | 7  | 三河・尾張は、暴風雨・洪水となったが、特に三河では、人や家屋の被害が甚大であった。尾張でも木曾川の氾濫により、起町に水害があった。  | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM   |
| 弘治   | 2  | 1556 | 10 | 4  | 尾張で小田井川(庄内川支流)が氾濫し、沿川の地域が浸水した。   | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM   |
| 元亀   | 1  | 1570 | 9  | 30 | 三河・遠江で特に家屋や農作物の被害が大きかった。尾張でも知多郡では、家屋の被害があった。   |   |
| 元亀   | 2  | 1571 | 9  | 19 | 東海道・近畿諸国、暴風雨。  | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM   |
| 天正   | 2  | 1574 | 8  | 28 | 尾張、暴風雨。  | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM   |
| 天正   | 14 | 1586 | 8  | 9  | 木曾川が大洪水となり、尾張・美濃両国の沿川地域は大水害をこうむった。美濃国各務郡前渡村と尾張国葉栗郡草井村(現江南市内)の間から西で、河道が現在のように変わった。尾張の葉栗・中島両郡では激流が村里をつらぬいて、人や家を流し、新しい河道ができ、富田庄・三谷郷等は新河道となった。 | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM<br>天正14年(1586年)の洪水による木曾川河道の変遷と天正地震の影響について |
| 文祿   | 4  | 1595 | 6  | 16 | 尾張・美濃、洪水。  | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM   |

| 和暦 |    | 西暦   |    |       | 記事(愛知県災害誌)  | 出典                                |
|----|----|------|----|-------|---|-----------------------------------|
| 年号 | 年  | 年    | 月  | 日     |   |                                   |
| 慶長 | 1  | 1596 | 9  | 26    | 東海道・近畿諸国、暴風雨。   | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |
| 慶長 | 2  | 1597 |    |       | 庄内川の出水により、右岸が破堤した。また、木曾川の出水により、丹羽郡山那村(現扶桑町山那)の田畑・家屋に被害があった。   | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |
| 慶長 | 9  | 1604 | 8  | 28    | 東海道・四国諸国、暴風雨。   | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |
| 慶長 | 9  | 1604 | 9  | 7     | 尾張・美濃・伊勢・近江、暴風雨。  | 愛知県の気象(1961)<br>愛知県史別編自然_付録CD-ROM |
| 慶長 | 9  | 1604 | 9  | 28    | 尾張・伊勢・美濃、暴風雨。   | 愛知県の気象(1961)                      |
| 慶長 | 10 | 1605 | 9  | 3     | 尾張・三河・美濃・伊勢・近江では、被害があったが、木曾川はあまり出水しなかった。  | 愛知県の気象(1961)                      |
| 慶長 | 11 | 1606 | 6  | 30    | 東海道・関東諸国、暴風雨。三河では、ところどころで堤防が決壊したが、尾張・美濃では大して被害はなかった。  | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |
| 慶長 | 12 | 1607 | 10 | 4     | 三河・尾張、(東海道諸国)、暴風雨・洪水。矢作川では、ところどころで堤防が決壊し、橋が落ちた。   | 愛知県の気象(1961)<br>愛知県史別編自然_付録CD-ROM |
| 慶長 | 13 | 1608 | 6  | 3     | 尾張・美濃、暴風雨・洪水。(東海道諸国、暴風雨・洪水)。  | 愛知県の気象(1961)<br>愛知県史別編自然_付録CD-ROM |
| 慶長 | 14 | 1609 | 9  | 7     | 尾張・三河・美濃、暴風雨。   | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |
| 慶長 | 14 | 1609 | 9  | 14    | 三河に大雨があり、矢作川堤防が挙母村(現豊田市内)内で決壊した。  | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |
| 慶長 | 15 | 1610 | 6  | 23・27 | 6月23日・27日・7月8日、木曾川が洪水。7月8日、西美濃で大雨。7月16日、三河に洪水。西三河(矢作川)では、慶長14年8月の出水よりも水位が約90cm低かった。                                   | 愛知県の気象(1961)<br>愛知県史別編自然_付録CD-ROM |
| 慶長 | 15 | 1610 | 7  | 31    | 長雨が続き、さらに大雨が降って、木曾川・庄内川、その他、尾張の各河川が出水して大氾濫した。・木曾川は、尾張側の堤防が、決壊した。犬山から、中島郡加賀野井(現一宮市)の間で数か所決壊した。・庄内川が氾濫して、流域の被害は甚だしかった。  | 愛知県の気象(1961)<br>愛知県史別編自然_付録CD-ROM |
| 慶長 | 17 | 1612 | 5  |       | 木曾川の尾張側堤防がところどころ決壊した。   | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |
| 慶長 | 17 | 1612 | 7  | 20    | 近畿・東海道・奥羽諸国、暴風雨。朝、東風が強く、正午から16時ごろにかけて、暴風雨となった。特に伊勢・尾張・美濃で強く、伊勢湾では破船2・30隻、熊野灘で破船7・80隻の海難があった。津島には、立田村の堤防が破壊して、川水が浸入した。 | 愛知県の気象(1961)<br>愛知県史別編自然_付録CD-ROM |
| 慶長 | 17 | 1612 | 7  | 24    | 尾張・美濃に洪水があった。立田村の堤防が決壊して、津島まで川水が浸入した。   | 愛知県の気象(1961)                      |
| 慶長 | 17 | 1612 | 8  | 19    | 尾張・三河・近江・美濃に洪水があった。   | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |
| 慶長 | 17 | 1612 | 9  | 26    | 近畿・東海道諸国、暴風雨。未明から午後にかけて、近江・伊勢・美濃・尾張では風が強く、西の吹き返しの風がとくに強かった。尾張では住家に被害があった。   | 愛知県の気象(1961)<br>愛知県史別編自然_付録CD-ROM |
| 慶長 | 19 | 1614 | 6  | 4     | 近畿・東海道、大雨・洪水。5月31日から6月4日にかけて大雨が降り、4日夜には洪水となった。尾張・海東郡・勝幡では堤防が決壊し、田畑に被害があった。  | 愛知県の気象(1961)<br>愛知県史別編自然_付録CD-ROM |
| 慶長 | 19 | 1614 | 6  | 19    | 近畿・東海道諸国、大雨・洪水。18日に大雨が降り、19日には大洪水となった。尾張・美濃・近江・摂津・河内・和泉の6か国では、4月の水害に加えて被害が大きかった。                                      | 愛知県の気象(1961)<br>愛知県史別編自然_付録CD-ROM |
| 慶長 | 19 | 1614 | 7  | 10    | 近畿・東海道諸国・摂津・河内・美濃、長雨・洪水。摂津・河内・美濃では被害が大きかった。   | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |
| 慶長 | 19 | 1614 | 10 | 1     | 近畿・東海道・関東諸国、暴風雨・洪水。遠江・三河では風は強くなかった。名古屋城本丸天守の北東の石垣約140mがくずれた。  | 愛知県の気象(1961)<br>愛知県史別編自然_付録CD-ROM |
| 寛永 | 1  | 1624 | 8  | 12    | 庄内川・矢作川が氾濫した。庄内川右岸の東春日井郡上條村(現春日井市)地内で破堤した。  | 愛知県の気象(1961)<br>愛知県史別編自然_付録CD-ROM |
| 寛永 | 3  | 1626 | 5  | 8     | 庄内川が氾濫し、生棚(現名古屋市北区内)では、数haの農地に土砂が流入した。  | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |
| 寛永 | 3  | 1626 | 9  |       | 庄内川が、東春日井郡上條村(現春日井市)地内で氾濫した。  | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |
| 寛永 | 4  | 1627 | 9  | 15    | 東海道・関東、大雨・洪水。   | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |

| 和暦 |    | 西暦   |    |             | 記事(愛知県災害誌)   | 出典  |
|----|----|------|----|-------------|--|---|
| 年号 | 年  | 年    | 月  | 日           |  |   |
| 寛永 | 9  | 1632 | 10 | 1           | 16日間降り続いた大雨のため、庄内川が特に大增水し、枇杷島橋が流失した。本川では、成願寺・福德(現名古屋市)右岸の味鏡・大野木堤が決壊し、支川の五条川・合瀬川では、六ツ師・熊之庄(現北名古屋市)で破堤。このため、小田井・比良・平田(現名古屋市)、沖・九之坪(現西春村)の諸村をはじめ、尾張20か村が水害をこうむった。   | 愛知県の気象(1961)<br>愛知県史別編自然_付録CD-ROM   |
| 寛永 | 10 | 1633 | 6  | 9           | 9日から16日まで、大雨が降り続き、木曾川の派川佐屋川(明治30年以降降川)が破堤して、尾西地方一帯に浸水した。田畑の被害は約3万石に達した。  | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM   |
| 寛永 | 11 | 1634 | 7  |             | 尾張では、長雨・洪水。  | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM   |
| 寛永 | 13 | 1636 | 9  | 12          | 尾張・三河・京都・近江、暴風雨・洪水。伊勢湾・三河湾に高潮がおこった。高潮により、熱田の海岸堤防が決壊して、新田に被害があり、道路は交通途絶した。名古屋城にも被害があった。三河吉田(現豊橋市)の船町の住家の大半が流失し、死者が出た。   | 愛知県の気象(1961)<br>愛知県史別編自然_付録CD-ROM   |
| 寛永 | 14 | 1637 | 9  | 25          | 東海道・関東諸国、暴風雨・洪水。   | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM   |
| 正保 | 2  | 1645 |    |             | 矢作川が出水し、拳母村(現豊田市)内で破堤した。   | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM   |
| 正保 | 3  | 1646 | 9  | 14          | 矢作川が出水氾濫した。矢作川は数日來の雨で増水し、14日午後には水勢がにわかに加わり、夕方、碧海郡六ツ美村上青野(現岡崎市)西の堤防約4・50mが決壊して、氾濫した。寺院・民家約20軒が流失し、死者14・5人、田畑は不毛の地となった。  | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM   |
| 慶安 | 3  | 1650 | 9  | 26          | 九州・近畿・東海道諸国、大雨・洪水。木曾・長良・揖斐の三川が大出水し各所で破堤した。特に美濃の沿川地方では大被害をこうむった。これをく大寅の洪水とよぶ。尾張では、木曾川堤防が加賀野井(現一宮市)で決壊した。また、佐屋川堤防が決壊して、海東・海西郡へ流入し、尾西地方一帯の住家・田畑に大被害があり、多数の人・馬が死んだ。(尾張領の田畑被害20万石)この洪水以降、尾張の御囲堤はますます強固にされた。このほか、三河でも出水があった。 | 愛知県の気象(1961)<br>愛知県史別編自然_付録CD-ROM<br>天正14年(1586年)の洪水による木曾川河道の変遷と天正地震の影響について |
| 慶安 | 4  | 1651 | 9  | 18          | 尾張・三河、暴風雨・洪水。尾張・海東・海西部では佐屋川の大出水により、家屋が流失し、多くの人・馬が死んだ。  | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM   |
| 承応 | 2  | 1653 | 6  | 30          | 東海道、暴風雨。30日夜半から翌朝にかけて、暴風雨となった。名古屋城・犬山城に被害があり、尾張領内の民家の被害は、22,000軒におよび、人・馬の死ぬもの多数だったという。   | 愛知県の気象(1961)<br>愛知県史別編自然_付録CD-ROM   |
| 承応 | 2  | 1653 | 9  | 27          | 中国・東海道諸国、暴風雨。  | 愛知県の気象(1961)<br>愛知県史別編自然_付録CD-ROM   |
| 明暦 | 1  | 1655 | 9  | 9           | 東海道諸国(三河から関東南部)、暴風雨。矢作川が拳母村(現豊田市)内で破堤した。三河吉田城(現豊橋市)も風雨と落雷で大被害。   | 愛知県の気象(1961)<br>愛知県史別編自然_付録CD-ROM   |
| 万治 | 1  | 1658 | 8  | 31          | 近畿・東海道諸国、暴風雨・洪水。おもに近畿地方に風水害。尾張・三河での被害については不明。  | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM   |
| 万治 | 3  | 1660 | 6  |             | 尾張・美濃、雷雨・洪水。諸国、長雨・洪水。連日、大雷雨があり、尾張・美濃では水害や落雷による被害が多かった。7月21日には、雷雨がはげしく、住家・田畑の浸水、破堤などの水害があり、名古屋城では、落雷による被害を受けた。  | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM   |
| 万治 | 3  | 1660 | 8  | 12          | 諸国、暴風雨・洪水。名古屋では、12日明方から暴風雨となり、住家の風による被害が大きかった。名古屋から江戸へ向かう途中の大船8隻が破船。また、美濃大垣付近でも水害を受けた。   | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM   |
| 万治 | 3  | 1660 | 9  | 24          | 近畿・東海道・関東諸国、暴風雨・洪水。  | 愛知県の気象(1961)<br>愛知県史別編自然_付録CD-ROM   |
| 万治 | 3  | 1660 | 10 | 24          | 四国・近畿・東海道・関東諸国、暴風雨。名古屋では、城内および城下に建物、住家の被害があり、堀川には海水が逆流して、白鳥の材木が多く流された。尾張全般の家屋・田畑に風水害をこうむった。  | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM   |
| 寛文 | 4  | 1664 | 11 |             | 三河、大雨・洪水。矢作川の堤防が拳母村(現豊田市)で破堤した。  | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM   |
| 寛文 | 6  | 1666 | 8  | 16・17・28・29 | 尾張・美濃、大雨・洪水。各河川が出水したが、特に庄内川は大出水した。尾張各所の田畑が水害を受けた。  | 愛知県の気象(1961)<br>愛知県史別編自然_付録CD-ROM   |

| 和暦 |    | 西暦   |    |       | 記事(愛知県災害誌)   | 出典                                |
|----|----|------|----|-------|--|-----------------------------------|
| 年号 | 年  | 年    | 月  | 日     |  |                                   |
| 寛文 | 6  | 1666 | 8  | 30    | 尾張・美濃、暴風雨・洪水により、大水害をこうむった。死者6名、家屋流失・倒壊245軒。  | 愛知県の気象(1961)<br>愛知県史別編自然_付録CD-ROM |
| 延宝 | 2  | 1674 | 9  | 15    | 九州・四国・中部・関東諸国、暴風雨・洪水。木曾川の洪水で美濃・尾張の沿川地方は大水害となった。人よんでく小寅の洪水>という。庄内川右岸破堤。(被害については不詳)。   | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |
| 延宝 | 4  | 1676 | 8  | 13    | 近畿・東海道・関東諸国、暴風雨・洪水。尾張藩領内で農地浸水、田(442,634石相当)、畑(約2,023ha)、家屋流失2,417戸、死者18人、水死した馬30頭の風水害をこうむった。   | 愛知県の気象(1961)<br>愛知県史別編自然_付録CD-ROM |
| 延宝 | 6  | 1678 | 9  | 19    | 九州・四国・東海道諸国、暴風雨・洪水。尾張・美濃、水害。尾張藩領内では、田畑(85,600石余相当)、堤防約4,600m、家屋68戸に被害があり、3人と馬3頭が水死した。  | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |
| 延宝 | 7  | 1679 | 8  | 6・21  | 中国・中部諸国、暴風雨・洪水。  | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |
| 天和 | 1  | 1681 | 9  | 2     | 伊勢・尾張・北陸諸国、暴風雨・洪水。尾張では家屋の被害があった。このあと、18日の暴風雨とあわせて、この年、田畑の被害が大きかった。(ききんとなる)。  | 愛知県の気象(1961)<br>愛知県史別編自然_付録CD-ROM |
| 天和 | 1  | 1681 | 9  | 18・25 | 18日尾張・江戸等、25日伊勢・尾張諸国、暴風雨。尾張では、8月とこの2回の暴風雨が田畑の農作物へ与えた被害は大きく、ききんとなった。  | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |
| 貞享 | 3  | 1686 | 3  | 17    | 尾張では、夕方雷雨がはげしく、名古屋城下で落雷により家屋1軒が焼失した。   | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |
| 貞享 | 3  | 1686 | 8  | 28    | 尾張、雷雨。名古屋城下に落雷があり、建中寺に被害があった。  | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |
| 貞享 | 4  | 1687 | 10 | 1     | 庄内川が出水し、支川の矢田川で1人水死した。   | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |
| 貞享 | 4  | 1687 | 10 | 4     | 尾張、四国・近畿・北陸・東海道関東諸国、暴風雨・洪水。  | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |
| 元禄 | 4  | 1691 | 7  | 8     | 名古屋城下で落雷により1人死亡した。   | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |
| 元禄 | 7  | 1694 | 9  | 6     | 紀伊・尾張、暴風雨。   | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |
| 元禄 | 10 | 1697 | 7  | 27    | 名古屋城下に雷雨があり、落雷により家屋2軒焼失。   | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |
| 元禄 | 10 | 1697 | 8  | 26    | 尾張に雷雨があり、落雷により、家屋2軒焼失、1軒破損した。  | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |
| 元禄 | 11 | 1698 | 12 | 28    | 尾張・三河、大雨・洪水。   | 愛知県の気象(1961)<br>愛知県史別編自然_付録CD-ROM |
| 元禄 | 12 | 1699 | 7  | 27    | 尾張、前日夕方から、27日朝にかけて暴風雨となった。   | 愛知県の気象(1961)                      |
| 元禄 | 13 | 1700 | 4  | 14    | 名古屋城下で落雷により、家屋1軒焼失。  | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |
| 元禄 | 14 | 1701 | 6  | 21    | 名古屋城下から熱田にかけて、突風・降ひょう(梅の実大)を伴ない、各所に落雷があり、熱田では突風により、家屋や樹木の被害もあった。22日夜には庄内川が出水し、田畑に被害があった。   | 愛知県の気象(1961)<br>愛知県史別編自然_付録CD-ROM |
| 元禄 | 14 | 1701 | 8  | 2     | 尾張、暴風雨。  | 愛知県の気象(1961)<br>愛知県史別編自然_付録CD-ROM |
| 元禄 | 14 | 1701 | 9  | 11    | 連日の降雨で、尾張・美濃の諸川は出水氾濫し、堤防破損53か所におよんだ。庄内川水系では、五条川合流点(五条川は改修の結果、新川に合流するようになったが、天明以前は庄内川に合流)の杵(いり)、法界門(新川・甚目寺境)の堤防右岸が破堤し、甚目寺はじめ海部郡一帯が浸水した。この時勝川堤も破壊した。14日、名古屋では、昼前(09~12時ごろ)、昼過ぎ(15時ごろ)ごろと夜(19時ごろ)に雷を伴って雨が強く、天白川の堤防が鳴海の方へ決壊した。           | 愛知県の気象(1961)<br>愛知県史別編自然_付録CD-ROM |
| 元禄 | 14 | 1701 | 9  | 19    | 四国・近畿・東海道・関東・奥羽諸国、暴風雨・洪水。名古屋では、18日明方から風雨が強く、特に9時ごろから昼過ぎまで大雨となった。このため、各所で浸水し、田畑の被害も甚だしかった。また、矢田川堤防が稲生で決壊した。(庄内川・矢田川合流点の矢田川左岸、現名古屋市)。三河では大水害となり、岡崎では、矢作川堤防約900mが決壊し、田畑(2万石相当)に氾濫した。流失家屋32軒、倒壊家屋52軒、小橋3か所が落ちた。渥美郡泉村(現渥美町)では新田堤防約180m破堤。 | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |

| 和暦 |    | 西暦   |    |    | 記事(愛知県災害誌)   | 出典  |
|----|----|------|----|----|--|---|
| 年号 | 年  | 年    | 月  | 日  |  |   |
| 元禄 | 14 | 1701 | 10 | 1  | 尾張、暴風雨。  | 愛知県の気象(1961)<br>愛知県史別編自然_付録CD-ROM                           |
| 元禄 | 15 | 1702 | 8  | 21 | 四国・中国・尾張、暴風雨。  | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM   |
| 元禄 | 15 | 1702 | 9  | 20 | 尾張、暴風雨・洪水。佐屋川水系の海東郡津島の兼平堤が見越地内で破堤し、海部郡は大被害をこうむった。  | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM   |
| 元禄 | 15 | 1702 | 11 | 20 | 名古屋付近に朝から昼過ぎにかけて(08時すぎ~12時すぎ)大雨が降り、名古屋の東郊は被害をこうむった。天白川堤防が破堤して、鳴海等へ氾濫した。  | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM   |
| 宝永 | 1  | 1704 | 7  | 19 | 三河・尾張・遠江、大雨・洪水。東春日井郡和爾良村字御油東(現春日井市内)で庄内川右岸堤防が約180m破堤した。  | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM   |
| 宝永 | 2  | 1705 | 8  | 15 | 三河・尾張・遠江、暴風雨・洪水。岡崎藩領内では、矢作川堤防約1,800m、田(32,540石相当)、家屋倒壊270戸、流失家屋92戸、死者13人の被害があった。   | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM   |
| 宝永 | 3  | 1706 | 9  |    | 三河・尾張、大雨・洪水。東春日井郡和爾良村字御油東(現春日井市)で庄内川右岸堤防が約90m破堤した。   | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM   |
| 宝永 | 4  | 1707 | 9  | 14 | 尾張、暴風雨。明け方から夕方まで南東の風が強かった。(午後、最も強かった)  | 愛知県の気象(1961)<br>愛知県史別編自然_付録CD-ROM                           |
| 宝永 | 4  | 1707 | 10 | 6  | 尾張・四国・中国諸国、暴風雨・洪水。尾張では家屋の被害などがあつたもよう。  | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM   |
| 宝永 | 5  | 1708 | 8  | 17 | 近畿・東海道諸国、暴風雨・高潮・洪水・竜巻。こののちききんとなる。三河湾・伊勢湾に高潮があつたもよう。尾張・半田では新田の堤防が決壊した。  | 愛知県の気象(1961)<br>愛知県史別編自然_付録CD-ROM                           |
| 正徳 | 2  | 1712 | 9  | 18 | 近畿諸国・尾張・三河、暴風雨・洪水。尾張・三河では、家屋の倒壊が多かつたもよう。   | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM   |
| 正徳 | 2  | 1712 | 10 |    | 尾張・三河、暴風雨・洪水。家屋の倒壊が多かつたもよう。  | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM   |
| 正徳 | 3  | 1713 | 7  | 27 | 尾張、暴風雨・洪水。27日夜半、犬山城の天守閣が落ちた。家屋被害12,000戸。28、29日尾張西部から浸水し、家屋・人馬の被害が大きかった。  | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM<br>天正14年(1586年)の洪水による木曾川河道の変遷と天正地震の影響について |
| 正徳 | 4  | 1714 | 9  | 16 | 近畿・東海道・奥羽諸国、暴風雨・高潮・洪水・ききん。名古屋では午後(16時ごろ)から夜半にかけて暴風雨となる。庄内川が大出水し、味鏡堤(現名古屋市)が破堤して、氾濫した。伊勢湾沿岸に高潮がおこり海西郡愛知郡の新田(神戸・鳥ヶ地・甚兵衛・伝馬・大宝等)堤防を破堤した。尾張・三河とも家屋の倒壊、流失、死者、田畑の被害は甚大で、天和以来の暴風雨といわれる。こののち稲はみのらず、ききんとなる。 | 愛知県の気象(1961)<br>愛知県史別編自然_付録CD-ROM                           |
| 正徳 | 5  | 1715 | 6  | 18 | 尾張、暴風雨・洪水。庄内川・矢田川が出水して、氾濫した。佐屋川(木曾川派川、のちに廢川)堤防が津島町付近で破堤した。   | 愛知県の気象(1961)<br>愛知県史別編自然_付録CD-ROM                           |
| 正徳 | 5  | 1715 | 7  | 30 | 尾張に雷雨があり、落雷により、死者が出た。また、愛知郡中津村では住家が焼失した。   | 愛知県の気象(1961)<br>愛知県史別編自然_付録CD-ROM                           |
| 享保 | 2  | 1717 | 9  | 19 | 東海道・関東・奥羽諸国、暴風雨・高潮。名古屋では、前夜から雨が降っていたが、朝(08時ごろ)から正午ごろまで南東の風雨が強くなり、屋根をふき破り、小屋をふき飛ばした。昼すぎ(13時ごろ)風向は南西にかわって、また強く被害が出た。尾張・三河ともに家屋・田畑等に風水害があつたもよう。   | 愛知県の気象(1961)<br>愛知県史別編自然_付録CD-ROM                           |
| 享保 | 3  | 1718 | 10 | 5  | 東海道諸国、暴風雨・高潮。尾張・三河は暴風雨となり、渥美湾に高潮がおきた。  | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM   |
| 享保 | 4  | 1719 | 5  | 16 | 尾張・津島で落雷により、大木が折れた。  | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM   |
| 享保 | 6  | 1721 | 9  | 6  | 東海道諸国、暴風雨・洪水。尾張・三河は暴風雨になり、寛文以来の大洪水といわれ、庄内川が大出水して氾濫した。尾張藩領内の被害は田畑の損害高162,000石相当、堤防などの破損約4,000m、蛇籠(じゃかご)の破損流失約25,000m。家屋流失74軒、同倒壊659軒、杵(いり)の損失41か所。  | 愛知県の気象(1961)<br>愛知県史別編自然_付録CD-ROM                           |



| 和暦 |    | 西暦   |    |    | 記事(愛知県災害誌)   | 出典                |
|----|----|------|----|----|--|-------------------|
| 年号 | 年  | 年    | 月  | 日  |  |                   |
| 享保 | 7  | 1722 | 9  | 24 | 近畿・東海道諸国、暴風雨・洪水・高潮。尾張・三河の風水害は激甚で正徳4年9月以来の暴風雨といわれた。24日は朝から雨が降り続き、夜半(24時)ごろから南東の暴風雨となり、翌朝(06時ごろ)おさまったが、風が強くこれによる家屋の被害も大きかった。三河吉田(現豊橋市)から東では風はそれほど強くはなかったようである。伊勢湾・渥美湾の沿岸は高い高潮の来襲にあい、各新田をはじめ内陸部まで大打撃を受けた。また矢作川をはじめ、各河川が出水して、氾濫し、その水害を受けた。 | 愛知県の気象(1961)      |
| 享保 | 7  | 1722 | 12 | 15 | 尾張、強風雨。熱田では小舟20余隻が破損した。  | 愛知県の気象(1961)      |
| 享保 | 11 | 1726 |    |    | 知多方面、大雨・洪水。岩滑村(現半田市)内の川の堤防が決壊し、浜新田に荒廃地が生じた。  | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM |
| 享保 | 12 | 1727 | 5  | 3  | 夜、佐屋川(木曾川派川)が出水し、堤防が決壊し、海東・海西郡に氾濫した。麦作皆無となる。   | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM |
| 享保 | 15 | 1730 |    |    | 碧海郡小川村(現安城市)では、干ばつと大雨・洪水により、農作物の収穫が減少した。   | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM |
| 享保 | 16 | 1731 | 9  | 10 | 矢作川堤防が、拳母村内(現豊田市)で破堤した。そのほかにも水害があったもよう(碧海郡木戸村(現安城市)に水害による木綿減収検見引の免状がある)。   | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM |
| 享保 | 20 | 1735 | 8  | 9  | 近畿諸国・三河、暴風雨・洪水。矢作川が出水して、小川村・木戸村(現安城市)などで水害があった。  | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM |
| 元文 | 1  | 1736 | 9  | 21 | 近畿・東海道・関東諸国、暴風雨・洪水。(三河)17日、16時ごろから夜半(24時ごろ)まで、北風の暴風雨となり、矢作川が大出水した。   | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM |
| 元文 | 3  | 1738 |    |    | 尾張・三河、暴風雨・洪水。佐屋川(木曾川派川)堤防が海西郡赤目村(現八開村)で破堤し、田畑は水害を受けた。尾張・半田付近は大水害となった。英比川が決壊し、下半田全部が浸水、下半田・上半田ともに水田に損害を受けた。   | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM |
| 元文 | 4  | 1739 | 10 | 1  | 尾張、大雨・洪水。2日と3日の大雨により、庄内川堤防が萬場の南の左岸で破堤し、名古屋市西部一帯の稲葉地、中村以南がドロ海となった。また、山崎川の堤防も破堤した。(名古屋では、3日は夕方から22時ごろまで雷雨)。矢作川下流右岸の伏見屋新田で破堤した。   | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM |
| 元文 | 5  | 1740 | 9  | 6  | 矢作川・豊川その他の小河川が出水して、氾濫し、三河一帯に水害をこうむった。矢作川堤防が拳母村(現豊田市)で破堤した。   | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM |
| 元文 | 5  | 1740 | 9  | 12 | 尾張・三河、暴風雨。夜20時ごろから風が強くなり、夜半(24時ごろ)にはさらに強く、13日夜明けまで吹いた。家屋の倒壊、大木の倒れたものも多く、農作物の被害は大きかった。三河横須賀では住家の倒壊145戸、付属家、土蔵、へい、社寺等の被害が多数あった。  | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM |
| 寛保 | 1  | 1741 |    |    | 木曾川が出水して、下流の鯛浦(現弥富町)で堤防が決壊した。十四山・飛島・永和各村の海岸部分は大水害をこうむった。   | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM |
| 寛保 | 2  | 1742 | 8  | 28 | 近畿・関東・東海・北陸諸国、暴風雨・洪水。矢作川が出水して、氾濫したもよう。   | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM |
| 寛延 | 1  | 1748 | 10 | 9  | 三河、大雨・洪水。夜、矢作川が出水して、三河・額田郡能見村(現岡崎市)で堤防約50mが決壊した。他にも矢作川流域で水害があったもよう。  | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM |
| 寛延 | 3  | 1750 | 5  | 18 | 尾張・三河、大雨・洪水。庄内川が大出水して、生棚(現名古屋市北区楠町内)で堤防が決壊し、土砂が数haの農地に流入した。また、八田川(庄内川支川)の堤防も一部破堤して、味鏡・如意(現名古屋市北区楠町)は浸水した。矢作川下流の伏見屋新田(現碧南市)も浸水した。   | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM |
| 宝暦 | 1  | 1751 | 7  | 19 | 尾張・東春日井郡小牧村(現小牧市)から、北東の17か村に大雨が降って、山地から土石の流出が甚だしく、田畑を荒廃した。   | 愛知県の気象(1961)      |
| 宝暦 | 2  | 1752 | 6  | 13 | 矢作川右岸の中嶋・北野(現岡崎市)の堤防が破堤し、被害甚大であった。   | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM |
| 宝暦 | 3  | 1753 | 7  | 4  | 4日夜から5日の大雨で、5日夜佐屋川の津島神社の神領堤が約45m決壊し、付近の民家の軒まで浸水した。(水位としてはそれほど高いものではなかった)。  | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM |
| 宝暦 | 3  | 1753 | 9  | 13 | 夜、大雨が降り、中島郡・海東郡・海西郡の木曾川筋では洪水となる。   | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM |
| 宝暦 | 4  | 1754 | 9  | 9  | 矢作川の堤防が拳母村(現豊田市)内で破堤し、下流でも氾濫があったもよう。   | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM |
| 宝暦 | 6  | 1756 | 10 | 24 | 矢作川が出水し、岡崎の伊賀川堤防が、伊賀八幡宮の前で破堤した。  | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM |

| 和暦 |    | 西暦   |    |             | 記事(愛知県災害誌)   | 出典                                |
|----|----|------|----|-------------|--|-----------------------------------|
| 年号 | 年  | 年    | 月  | 日           |  |                                   |
| 宝暦 | 7  | 1757 | 5  |             | 東海道・関東・奥羽諸国、長雨・大雨・洪水・ききん。尾張・三河では、この年、2月中ごろから、雨がしばしば降り夏作は不作となる。4月中ごろからは、ことに雨天が多く(旧暦)4月27日から、5月5日ごろまでは、連日降り続き、なかでも5月2、3、4日は大雨が降って、3日・4日は大洪水となり、全般的に大水害をこうむった。〈宝暦の洪水〉   |                                   |
| 宝暦 | 7  | 1757 | 7  | 30          | 30日大雨が降り、31日出水して、矢作川の堤防が決壊した。死者が多数出た。  | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |
| 宝暦 | 8  | 1758 | 6  | 30          | 三河、長雨・洪水・ききん。連日雨が降り続き各地に水害が発生した。前年の水害に続いて夏作は凶作となる。矢作川の川端堤が決壊し、国江村(現豊田市)などの田畑が埋没した。   | 愛知県の気象(1961)<br>愛知県史別編自然_付録CD-ROM |
| 宝暦 | 8  | 1758 | 9  | 28          | 尾張、大雨・洪水。庄内川水系で堤防の決壊した所があった。   | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |
| 宝暦 | 11 | 1761 | 5  | 20          | 三河、大雨・洪水。矢作川の堤防が拳母村(現豊田市)内で破堤した。   | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |
| 宝暦 | 13 | 1763 | 10 | 8           | 尾張・三河、暴風雨。8日夜半から9日未明にかけて暴風雨となる。  | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |
| 明和 | 2  | 1765 | 6  | 3           | 山城・尾張・三河・江戸、大雨・洪水。連日の雨で、4日庄内川が出水し、味鏡(現名古屋市北区楠町)付近で右岸堤防が決壊して氾濫し、西春日井郡如意・豊場から丹羽郡岩倉・五条川端にいたる尾張30余か村が水害をこうむった。三河では4日矢作川の拳母堤防が決壊した。   | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |
| 明和 | 2  | 1765 | 8  | 21          | 三河、大雨・洪水。矢作川堤防が拳母村内で破堤した。  | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |
| 明和 | 2  | 1765 | 9  | 16・17・21・22 | 四国・近畿・東海道・関東諸国、暴風雨・洪水。尾張では連日の大雨で17日、庄内川が氾濫して、名古屋・熱田は一面に浸水し、東は奥田町から浜街道、西は佐屋街道から津島にいたる一帯が水害をこうむった。矢作川も拳母(現豊田市)で氾濫し、家屋80軒が流失、人が多く死んだ。   | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |
| 明和 | 3  | 1766 | 8  | 2           | 尾張、大雨・洪水。五条川が出水して、熊之庄(現北名古屋市)で堤防約10mが決壊した。   | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |
| 明和 | 3  | 1766 | 8  | 18          | 三河、大雨・洪水。矢作川右岸の渡刈堤防(現豊田市)が決壊して、家屋6戸が流失した。  | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |
| 明和 | 4  | 1767 | 8  | 4           | 尾張・三河、大雨・洪水・山津波。4日から6日にかけて大雨があり、6日夜、庄内川は右岸の比良・大野木(現名古屋市)、土器野松原(現新川町)などで破堤して、氾濫し、味鏡・如意など一帯がドロ海となる(宝暦の洪水と同様)。矢作川は猪子石で破堤し、名古屋の巾下門前まで氾濫。名古屋の北東部から西部にかけて低地全部が浸水。(長母寺北で山くずれ)。名古屋城西の道路上で水深1.5m余になり、数日間船で往来したという。このため、のち大幸川の開さく工事が行われた。名古屋南部は天白川の氾濫で、鳴海あたりまで浸水し、鳴海付近では、家屋の水害が大きかった。東海道上の水深は約1.8m。藩は舟を出して救助に努め、小屋を建てて、被災民の救済にあたった。この他、中島郡奥村などで木曾川の水が尾張側へ浸水したようである。同日、瀬戸の赤津や猿投山に山津波があった。矢作川では、渡村・下矢作片町・大門・日名・青木・細川・仁木入江・阿波寺等で破堤し、拳母・岡崎付近に浸水したほか、田畑の損害、人畜の死傷も多かった。また下流の伏見屋・平七新田(現碧南市)でも氾濫した。〈明和の洪水〉 |                                   |
| 明和 | 4  | 1767 | 8  | 21          | 矢作川堤防が、拳母村(現豊田市)内で破堤した。  | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |
| 明和 | 5  | 1768 | 6  |             | 矢作川堤防が、拳母村(現豊田市)内で破堤した。  | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |
| 明和 | 8  | 1771 | 8  | 6           | 三河、大雨・洪水。岡崎の菅生川が門前組へ氾濫して、付近の家屋が浸水した。   | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |
| 明和 | 8  | 1771 | 8  | 19          | 三河、大雨・洪水。矢作川が出水した。   | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |
| 明和 | 9  | 1772 | 8  | 30          | 東海道・関東諸国、暴風雨。尾張・半田では英比川の堤防が大破損した。江戸など東国の被害大。   | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |
| 安永 | 2  | 1773 | 8  | 7           | 伊勢・尾張・三河、暴風雨・洪水。尾張・三河では、7日0時ごろから暴風雨となる。矢作川が出水し、拳母村内(現豊田市)で破堤。岡崎・門前組破堤。橋の落ちたところもあった。矢作川流域では田畑に被害があったもよう。  | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |
| 安永 | 2  | 1773 | 8  | 28          | 三河、大雨・洪水。矢作川出水。  | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |
| 安永 | 3  | 1774 | 9  | 28          | 三河、大雨・洪水。矢作川堤防が拳母村(現豊田市)内で破堤した。  | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |

| 和暦 |   | 西暦   |    |       | 記事(愛知県災害誌)   | 出典                                |
|----|---|------|----|-------|--|-----------------------------------|
| 年号 | 年 | 年    | 月  | 日     |  |                                   |
| 安永 | 3 | 1774 | 10 | 5     | 三河、大雨・洪水。矢作川が出水した。   | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |
| 安永 | 6 | 1777 | 9  | 21    | 尾張・三河で14時ごろから暴風雨となり(雷を伴う)、家を流したという。(不詳)。   | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |
| 安永 | 8 | 1779 | 9  | 3     | 尾張・三河、暴風雨・洪水・竜巻。   | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |
| 安永 | 8 | 1779 | 9  | 29    | 尾張・三河、大雨・暴風雨・洪水。29日から4日にかけて連日大雨。4日は暴風雨となり、東海道(尾張・三河)・関東・奥羽諸国、洪水となる。尾張では庄内川・天白川が、三河では矢作川が氾濫して、大水害をこうむった。  | 愛知県の気象(1961)<br>愛知県史別編自然_付録CD-ROM |
| 天明 | 1 | 1781 | 9  |       | 尾張、大雨・洪水。庄内川が出水して、右岸の和爾良村字北御油(現春日井市)で約270m破堤した。  | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |
| 天明 | 2 | 1782 | 8  | 1     | 尾張、大雨・洪水・(凶作)。1日夜半(24時ごろ)、五條川左岸で、清洲村の朝日付近から下流へ8か所、また合瀬川が六ツ師村で2か所(約180m)、それぞれ破堤して、田畑に氾濫した。その後8月21日(陽暦9月27日)までに4回の出水氾濫があった。このため不作となる。この年尾張・三河をはじめ全国的に凶作となる。矢作川では、拳母村内で破堤。その後7月18日(陽暦8月26日)、7月23日(陽暦8月31日)にも出水した。 |                                   |
| 天明 | 3 | 1783 | 5  |       | 津島付近に大雨が降り、天王橋が流失した。   | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |
| 天明 | 3 | 1783 |    |       | 尾張・三河、大雨・暴風雨・洪水。連日の大雨のため庄内川が出水し、大野木(現名古屋市区山田町)で堤防がくずれた。さらに暴風雨となり、決壊氾濫の危険が増したが、幸いに大事にいたらずにすんだ。そのほかにも尾張および三河南西部の各地に被害があったもようだが不明。  | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |
| 天明 | 4 | 1784 | 9  | 21    | 尾張・三河、大雨・洪水。庄内川が出水し、和爾良・上條(現春日井市)で破堤氾濫した。浸水のため付近一帯に2、3日間は通行不能になった。また、鳴海から三河の知立あたりまで浸水して、東海道は海のようになり通行不能となる。各地の農作物が被害を受けた。  | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |
| 天明 | 5 | 1785 | 7  | 22    | 22日矢作川が出水して、拳母村(現豊田市)内で破堤した。   | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |
| 天明 | 5 | 1785 | 9  | 15    | 近畿・東海道、大雨・洪水。  | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |
| 天明 | 6 | 1786 | 3  | 15・26 | 尾張、大雨・洪水。冬にしては大雨が降り、15日夜佐屋川が増水して、津島神社神領の杵(いり)と工事中の堤防が、22時ごろ決壊した。また、28日夜にも同様決壊し、津島神社の床上まで浸水した。  | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |
| 天明 | 6 | 1786 | 9  | 21    | 四国・中国・近畿・北陸諸国・尾張、暴風雨。尾張では、農作物の被害が大きかった。  | 愛知県の気象(1961)<br>愛知県史別編自然_付録CD-ROM |
| 天明 | 6 | 1786 | 9  | 28    | 四国・中国・近畿・関東・奥羽諸国・尾張・三河、暴風雨・洪水。28日昼前から(10時ごろ)、尾張・三河では暴風雨となり、各河川は出水した。矢作川は拳母村内で破堤した。尾張・三河の農作物に大きな被害があった。   | 愛知県の気象(1961)<br>愛知県史別編自然_付録CD-ROM |
| 天明 | 7 | 1787 | 10 | 6     | 三河、大雨・洪水。矢作川が出水して、拳母村(現豊田市)内で破堤した。   | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |
| 天明 | 8 | 1788 | 7  | 20    | 三河、大雨・洪水。矢作川出水、碧海郡小川村(現安城市)付近でところどころ破堤して、田畑に氾濫し、被害が大きかった。  | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |
| 天明 | 8 | 1788 | 9  | 24    | 三河、大雨・洪水。青木川(矢作川支流)が出水した(被害不明)。なお、土用中、雨が降り続き、その後もまた、7月下旬から8月中旬(陽暦8月下旬~9月中旬)まで雨が降り続いた。  | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |
| 寛政 | 1 | 1789 | 8  | 8     | 美濃・三河・遠江、大雨・洪水。矢作川が大出水して、拳母村(現豊田市)内の青木堤、宗定村などで破堤して、氾濫した。また、矢作古川でも破堤し、上流から下流にわたって氾濫したため被害が大きかった。岡崎藩の米の収納は前年より15,702俵減収であった。吉田藩でも14,263俵減収だったので、被害は大きかったものと考えられる(詳細不明)。  | 愛知県の気象(1961)<br>愛知県史別編自然_付録CD-ROM |
| 寛政 | 1 | 1789 | 9  | 26    | 東海道、暴風雨・洪水。庄内川が大出水して、東山畑(現名古屋市区楠町)で決壊し、また、矢作川の宗定堤(現豊田市上郷町)が2か所決壊した。  | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |
| 寛政 | 2 | 1790 | 9  | 27    | 三河、暴風雨・洪水。矢作川が出水し、青木堤・八町橋上の堤・そのほかの堤防が決壊した。岡崎付近が浸水し、家屋・田畑の被害が大きかった。   | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |

| 和暦 |    | 西暦   |    |       | 記事(愛知県災害誌)   | 出典                                |
|----|----|------|----|-------|--|-----------------------------------|
| 年号 | 年  | 年    | 月  | 日     |  |                                   |
| 寛政 | 3  | 1791 | 9  | 17    | 尾張・暴風雨・高潮・洪水。夕方前(16時ごろ)から暴風雨となり、夜半(23時ごろ)まで続いた。このため風による家屋の倒壊などの被害があったが、伊勢湾に高潮がおこり、海岸地方では死者94人、倒壊・流失家屋5,825軒におよぶ大きな被害となった。  | 愛知県の気象(1961)                      |
| 寛政 | 4  | 1792 | 10 | 23    | 23日夜、尾張に暴風雨があったが、被害などは不明。  | 愛知県の気象(1961)                      |
| 寛政 | 6  | 1794 | 7  |       | 矢作川が出水して、矢作右川の堤防が決壊した。被害甚大。  | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |
| 寛政 | 7  | 1795 | 10 | 12    | 尾張では、樹木がたおれ、田畑に被害があった。   | 愛知県の気象(1961)                      |
| 寛政 | 10 | 1798 | 5  | 23・29 | 美濃・伊勢・尾張、長雨・大雨・洪水。4月はじめからの長雨に加えて23日大雨となり、美濃では水害が甚大であった(尾張については不詳)。   | 愛知県の気象(1961)                      |
| 寛政 | 10 | 1798 | 8  | 27    | 尾張、大雨・洪水。  | 愛知県の気象(1961)                      |
| 寛政 | 11 | 1799 | 9  | 18    | 三河、大雨・洪水。矢作川が出水して、拳母村(現豊田市)内で破堤した。   | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |
| 享和 | 1  | 1801 | 9  | 16    | 尾張西部、雷雨・落雷・洪水。夜20時ごろから雷雨がおこり、中島郡起・小信(現一宮市)方面に10か所ほど落雷した。このとき、強雨を伴い、木曾川堤防がとところどころでくずれた。奥村用の井げたを越水・古川が洪水のため、中島・小原・高野島・野府では浸水が甚だしかった。菟安賀新田では全戸、大平では3、4戸を残してほとんど、また東西西城・富田・今村もそれぞれ浸水した。古川通り下流の法立・丸淵辺も11日堤防が決壊した(現一宮市内の被害)。 |                                   |
| 享和 | 1  | 1801 | 9  | 18    | 三河、大雨・洪水。菅生川・青木川(矢作川支川)のところで、堤防が決壊した。  | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |
| 享和 | 2  | 1802 | 7  | 26    | 尾張・三河、暴風雨・高潮・洪水。熱田新田をはじめ伊勢湾沿岸では高潮により、家屋が流され死者も多かったという。岡崎城内や額田郡久後村(現岡崎市)は水害を受け、岡崎の殿橋は半壊した。  | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |
| 享和 | 2  | 1802 | 9  | 2     | 三河、暴風雨・洪水。矢作川が出水し、3日拳母村(現豊田市)内で破堤した。   | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |
| 享和 | 3  | 1803 | 9  | 30    | 尾張・三河、大雨・洪水。30日夜大雨となり、扇川・大高川(天白川支川)が出水、堤防が6か所(約280m)が決壊し、大高で倒壊家屋2軒の被害があった。1日矢作川が出水し、拳母村内で破堤した。   | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |
| 文化 | 1  | 1804 | 10 | 1     | 尾張・三河、暴風雨・洪水。矢作川が出水し、拳母村内で破堤した。下流の碧海郡小川村(現安城市)付近でも氾濫があったもよう。   | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |
| 文化 | 1  | 1804 | 10 | 20    | 三河、大雨・洪水。矢作川が出水し、岡崎の矢作橋東方で約90m破堤した。  | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |
| 文化 | 4  | 1807 | 10 | 17    | 尾張、三河、暴風雨。名古屋では尾張藩主の邸宅を破損、岡崎では社寺の建物樹木など被害があった。   | 愛知県の気象(1961)<br>愛知県史別編自然_付録CD-ROM |
| 文化 | 5  | 1808 | 9  | 15    | 紀伊・東海道・関東諸国・尾張・三河、暴風雨・洪水。  |                                   |
| 文化 | 6  | 1809 | 9  | 15    | 三河、暴風雨。岡崎では、土べい約120mが倒れた。  | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |
| 文化 | 8  | 1811 | 8  | 12    | 尾張、雷雨・強雨、竜巻。数日間雷雨が続き、この日名古屋城下へ多数の落雷があり、強雨が降って浸水したところもある。また熱田の沖に、竜巻が発生した(被害はなかったもよう)。   | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |
| 文化 | 11 | 1814 | 8  | 14    | 三河、大雨・洪水。14日夜半前(22時ごろ)から、降り出した雨は強風を伴ない、翌15日の早朝には、矢作川水系が出水した。午後には青野堤・川島の大帳堤さらに各所の堤防が相ついで決壊し、夕方には人家に浸水した。雨は16日になってもやまず、矢作川水系の堤防決壊は10か所におよんだ。この方面の人家や田畑のこうむった被害は大きかった。  | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |
| 文化 | 12 | 1815 | 7  | 31    | 近畿・東海道諸国、大雨・洪水。31日から8月3日まで大雨が降り続き、尾張・美濃の諸川が氾濫して被害は大きかった。三河でも矢作川が氾濫した。美濃高須・八神・竹ヶ鼻付近は最も惨害をきわめた。  | 愛知県の気象(1961)                      |
| 文化 | 13 | 1816 | 9  | 24    | 四国・近畿・東海道・関東諸国、暴風雨・洪水。23日夜から風雨が強くなり、24日朝(8時ごろ)から北東の風が激しくなる。家屋の被害など出はじめる。   |                                   |
| 文政 | 2  | 1819 | 8  | 16    | 尾張、雷雨・落雷。連日、名古屋とその周辺に雷雨・落雷があり、特に19日には大雷雨となり、落雷によって各地に火災が発生した。(名古屋・前津、愛知県山崎村、知多郡横須賀村(30軒焼失)など)。   | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |
| 文政 | 4  | 1821 | 9  | 3     | 三河、大雨・洪水。矢作川が出水し、拳母村(現豊田市)内で破堤した。  | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |

| 和暦 |    | 西暦   |    |    | 記事(愛知県災害誌)   | 出典                                |
|----|----|------|----|----|--|-----------------------------------|
| 年号 | 年  | 年    | 月  | 日  |  |                                   |
| 文政 | 5  | 1822 | 9  | 10 | 三河、大雨・洪水。矢作川が出水し、拳母村内で破堤して、氾濫した。倒壊家屋25戸、死者2人、負傷者35人の被害があった。  | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |
| 文政 | 6  | 1823 | 9  | 21 | 三河、大雨・洪水。矢作川が出水した。   | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |
| 文政 | 7  | 1824 | 8  | 18 | 三河、大雨・洪水。矢作川出水。  | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |
| 文政 | 8  | 1825 | 5  | 31 | 三河、大雨・洪水。矢作川が増水し、碧海郡上青野村(現岡崎市)地内の本光寺西方で、堤防約180mが決壊した。青野村はもちろん、安藤・福穂・高畑・三ツ木・在家の各村が浸水して被害甚大であった。           | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |
| 文政 | 8  | 1825 | 9  | 25 | 尾張・三河、大雨・洪水。連日の大雨で農作物に被害があった。  | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |
| 文政 | 9  | 1826 | 6  | 21 | 尾張、暴風雨。早朝から夜(20時ごろ)まで風雨が強く、夜中から暴風雨となり、一宮の近村では樹木や家屋が倒れた。  | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |
| 文政 | 11 | 1828 | 6  | 20 | 三河、大雨・洪水。矢作川が出水して、岡崎の大平橋が流失した。   | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |
| 文政 | 11 | 1828 | 8  | 10 | 中部・関東・奥羽、暴風雨・洪水・凶作。矢作川は、10日の暴風雨で満水し、11日各所の堤防が決壊氾濫した。   | 愛知県の気象(1961)                      |
| 文政 | 12 | 1829 | 8  | 17 | 三河、暴風雨。  | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |
| 文政 | 13 | 1830 | 9  | 3  | 京都・尾張、暴風雨・洪水。朝から大雨が降り、庄内川が出水して、名古屋側の左岸で、辻村の堤防が決壊し、名古屋北西部の中下・柳町付近・名古屋城下が浸水した。なお、辻村には、城内用水源としての大杣(いり)があった。 | 愛知県の気象(1961)<br>愛知県史別編自然_付録CD-ROM |
| 天保 | 6  | 1835 | 8  | 29 | 尾張、暴風雨。高潮により、伊勢湾沿岸の新田堤防が9か所決壊して、家屋を流失し、海岸地方はドロ海となった。   | 愛知県の気象(1961)<br>愛知県史別編自然_付録CD-ROM |
| 天保 | 7  | 1836 | 9  | 23 | 近畿・中部諸国・江戸、暴風雨・洪水。三河、暴風雨・洪水・凶作。尾張南部および尾張知多郡方面と三河全般に暴風雨の被害をこうむった。   | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |
| 天保 | 10 | 1839 | 9  |    | 尾張・三河、暴風雨・洪水。庄内川が出水して、大留村杖の口(現春日井市)で約90m破堤して、氾濫した。また渥美郡泉村(現渥美町)地内で田に被害があった。                              | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |
| 天保 | 13 | 1842 | 6  | 26 | 尾張・三河、大雨・洪水。26日、矢作川が出水し、拳母村内で破堤した。起日は不明だが、この年、木曾川の氾濫で、葉栗郡草井村(現江南市)の家屋40軒、耕宅地25haが、流失あるいは被害を受けた。          | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |
| 天保 | 14 | 1843 | 9  | 27 | 三河、大雨・洪水。矢作川が出水して、拳母村(現豊田市)内で破堤した。26日九州諸国・伊勢・江戸・暴風雨。   | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |
| 天保 | 14 | 1843 | 10 | 3  | 東海道(美濃・尾張)・関東諸国、暴風雨・洪水。  | 愛知県の気象(1961)                      |
| 天保 | 15 | 1844 | 5  | 25 | 三河、大雨・洪水。矢作川が出水して、拳母村内で破堤した。   | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |
| 天保 | 15 | 1844 | 9  |    | 尾張、大雨・洪水。庄内川が出水して、東春日井郡和爾良村字北御油(現春日井市)で約140m破堤し、上条村(現春日井市)地方が被害をこうむった。                                   | 愛知県の気象(1961)<br>愛知県史別編自然_付録CD-ROM |
| 弘化 | 2  | 1845 | 9  | 13 | 尾張、暴風雨。半田の英比川堤防が決壊して氾濫し、耕地の被害が大きく、家屋の倒壊も多かった。  | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |
| 弘化 | 3  | 1846 | 8  | 28 | 大雨で庄内川が出水して、東春日井郡下津尾村安丸野(現春日井市)で、右岸堤防が約180m決壊して氾濫した。   | 愛知県の気象(1961)<br>愛知県史別編自然_付録CD-ROM |
| 弘化 | 4  | 1847 | 5  | 24 | 美濃・尾張、暴風雨。美濃・尾張では、暴風で大木が倒され、美濃では大垣などで家屋の被害も多かった。尾張でも民家の海中へふき倒されたものがあった。知多郡大高村では、全壊家屋4戸、半壊家屋1戸の被害があった。    | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |
| 嘉永 | 1  | 1848 | 6  | 24 | 三河・遠江、大雨・洪水。長雨ののち雷を伴った大雨が降り各河川が出水した。矢作川が出水して、岡崎の矢作橋が破損した。  | 愛知県の気象(1961)                      |
| 嘉永 | 1  | 1848 | 9  | 5  | 伊勢・尾張、暴風雨・洪水。尾張の各河川が出水し、ところどころで破堤して氾濫し、家屋の被害もあった。  | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |
| 嘉永 | 2  | 1849 | 9  | 17 | 尾張、長雨・大雨・洪水。8月から大雨が続く、田畑の浸水が甚だしく、作物はほとんど腐った。   | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |
| 嘉永 | 2  | 1849 | 9  | 24 | 三河、大雨・洪水。朝(6時ごろ)から矢作川の堤防が決壊し、民家の床下に浸水し、29日になっても水が引かなかった。   | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |
| 嘉永 | 3  | 1850 | 8  | 28 | 尾張・三河に風水害があった。伊勢・美濃・尾張・三河・遠江・駿河6か国の農地被害概算は約100万石といわれる。   | 愛知県の気象(1961)                      |

| 和暦 |   | 西暦   |    |      | 記事(愛知県災害誌)  | 出典                                |
|----|---|------|----|------|---|-----------------------------------|
| 年号 | 年 | 年    | 月  | 日    |   |                                   |
| 嘉永 | 3 | 1850 | 9  | 8    | 尾張・三河、大雨・暴風雨・洪水。8日から13日までの間大雨が降り(12日夜から13日朝にかけては暴風雨)、その後も17日まで雨はやまなかった。このため、尾張・三河の各河川は全般に出水し、大きな水害となった。   | 愛知県の気象(1961)                      |
| 嘉永 | 3 | 1850 | 10 | 7    | 尾張・三河、暴風雨・高潮・洪水。伊勢湾には高潮がおこり、海西郡の八穂新田の堤防が決壊して、海水が一带に浸入した。矢作川・豊川も出水しているが、水害をおこすほど、水位は高くなかったようである。   | 愛知県の気象(1961)                      |
| 嘉永 | 5 | 1852 | 9  | 4・25 | 三河、暴風雨。岡崎では、9月4日夜半から5日正午ごろまで(南東の風)、9月25日10時ごろから、10月5日夜それぞれ暴風雨となった。矢作大橋は約50m破損した(どの暴風雨によるものか不明)。9月4日、四国・近畿・関東、9月25日、紀伊・安芸、10月5日、中国・近畿・江戸、暴風雨。  | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |
| 嘉永 | 5 | 1852 | 9  | 21   | 三河、大雨・洪水。矢作川が出水し(夜20時ごろ)、額田郡天白村大曲(現岡崎市)で約220m破堤した。このため、在家・三ツ木(現岡崎市)および近隣の各村は床上1m位も浸水したが、中之郷・上青野・赤湊・高橋の各村は、やや高地のため早く水が引いた。<天白切れ>   | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |
| 嘉永 | 6 | 1853 | 9  |      | 尾張、大雨・洪水。庄内川が出水し、右岸の東春日井郡神領村字海東(現春日井市)で約270m破堤した。   | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |
| 嘉永 | 7 | 1854 | 6  |      | 尾張、大雨・洪水。庄内川が出水し、東春日井郡松河戸村(現春日井市)一ツ橋で約390m破堤した。   | 愛知県の気象(1961)<br>愛知県史別編自然_付録CD-ROM |
| 嘉永 | 7 | 1854 | 9  |      | 尾張、大雨・洪水。庄内川が出水し、東春日井郡神領村字海東(現春日井市)で約360m破堤した。  | 愛知県の気象(1961)<br>愛知県史別編自然_付録CD-ROM |
| 安政 | 2 | 1855 | 9  | 7    | 尾張・三河、暴風雨(大雨)・洪水。7日朝から大雨が降り、夜に入っても降り続き、8・9日はやんだ。しかし、9日夜には再び豪雨になり、10日まで続いた。(7日と10日は暴風雨)。このため各所の堤防が決壊したが、前年の大地震後の復旧が完了していなかったため被害が大きくなった。   | 愛知県の気象(1961)                      |
| 安政 | 2 | 1855 | 9  | 30   | 四国・近畿・東海諸国、暴風雨。尾張・三河、暴風雨・高潮・洪水。名古屋、30日午後から暴風雨となり、夜になって最も強くなった。夜22時ごろ伊勢湾・渥美湾に高潮がおこり、伊勢湾沿岸の新田堤防や海岸堤防91か所が決壊した(知多半島から海部郡まで)。流失家屋130軒、死者20人の被害があり、とくに甚だしかったのは堀川・庄内川の間の築地前・熱田前・稲富・永徳・神宮寺の新田であった。                                   | 愛知県の気象(1961)                      |
| 安政 | 3 | 1856 | 8  | 29   | 尾張、大雨・洪水。庄内川が出水し、東春日井郡勝川村字松ノ内(現春日井市)で約50m破堤した。  | 愛知県の気象(1961)<br>愛知県史別編自然_付録CD-ROM |
| 安政 | 4 | 1857 | 6  | 8    | 美濃・尾張、大雨・洪水。各河川が氾濫した。   | 愛知県の気象(1961)                      |
| 安政 | 4 | 1857 | 9  | 2    | 尾張、大雨・洪水。尾張横須賀代官管内28か村、鳴海代官管内29か村が水害をこうむった。   | 愛知県の気象(1961)                      |
| 安政 | 4 | 1857 | 9  | 18   | 尾張、暴風雨・洪水。庄内川が出水して、東春日井郡勝川村(現春日井市)の東切野と西切野で約130m破堤した。   | 愛知県の気象(1961)<br>愛知県史別編自然_付録CD-ROM |
| 安政 | 6 | 1859 | 7  |      | 尾張、大雨・洪水。庄内川が出水して、松川戸村(現春日井市)で約370m破堤した。木曾川・佐屋川破堤のため、この二川にはさまれた輪中に大被害があった(水深3m余になる)。  | 愛知県の気象(1961)<br>愛知県史別編自然_付録CD-ROM |
| 万延 | 1 | 1860 | 6  | 29   | 美濃・尾張、暴風雨・洪水。伊勢湾に高潮がおこり、新田に被害があったが、あまり著しいものではなかった。中島郡起村(現一宮市)では、全壊家屋2戸、半壊家屋6戸の被害があり、そのほか尾張地方に建物や人の被害があったもようだが詳細は不明。尾張藩領内の被災村数は115か村、農作物被害高は12万石。三河では、矢作川水系が出水し、大平橋(現岡崎市)をはじめ橋の流失があった。また乙川の大平橋下流で浸水した。また上流の拳母村(現豊田市)内でも破堤している。 | 愛知県の気象(1961)<br>愛知県史別編自然_付録CD-ROM |
| 万延 | 1 | 1860 | 7  | 29   | 尾張・三河、暴風雨・凶作・ききん。稲など農作物に強風が被害を与えたらしい。この年は余り強くはなかったが何度も暴風がふき農作物の収穫に影響した。   |                                   |
| 文久 | 1 | 1861 | 9  | 24   | 三河、暴風雨・洪水。24日夜から暴風雨になり、25日夕方雨はあがる。矢作川支川の大平川(乙川)が出水し、大平橋が流失した。岡崎は一部住家が浸水したもよう。   | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |
| 文久 | 1 | 1861 | 11 | 7    | 三河、大雨・洪水。7日夜大雨、8日未明(3時ごろ)矢作川は満水となり、大平川(乙川)の大平橋(仮橋)は7時ごろ流失した。  | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |

| 和暦 |   | 西暦   |    |    | 記事(愛知県災害誌)   | 出典                                |
|----|---|------|----|----|--|-----------------------------------|
| 年号 | 年 | 年    | 月  | 日  |  |                                   |
| 文久 | 2 | 1862 | 8  | 19 | 三河・駿河、暴風雨・洪水。岡崎では、24日から雨が降り、夕方から南東の風が強くなって、終夜続く。25日朝、一部に住家の浸水がはじまり、次第に甚だしくなる。風向は南東から北、そして西にかわり、西の吹きかえしが甚だしく強かった。矢作川の水位は低かったが、菅生川の水位は格段に高かった。                         |                                   |
| 文久 | 3 | 1863 | 10 | 7  | 尾張、大雨・洪水。庄内川が出水し、東春日井郡勝川村字松ノ内(現春日井市)で約50m破堤した。   | 愛知県の気象(1961)<br>愛知県史別編自然_付録CD-ROM |
| 元治 | 1 | 1864 | 8  | 12 | 三河、雷雨・落雷・竜巻。岡崎およびその周辺に多数の落雷があり(10か所余)、4人もの死者が出た。碧海郡隣勝寺村(現豊田市)付近に、竜巻が発生し、家屋を倒し、死者数人が出た。   | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |
| 慶応 | 1 | 1865 | 7  | 10 | 美濃・尾張・三河、大雨・洪水。庄内川が出水し、左岸の瀬古村(現名古屋守山区)・中切村(現名古屋西区)、右岸の味鏡村(現名古屋北区)・勝川村(現春日井市)で破堤して氾濫、一帯に大水害をこうむった。  | 愛知県の気象(1961)<br>愛知県史別編自然_付録CD-ROM |
| 慶応 | 2 | 1866 | 6  | 26 | 尾張・三河、強風雨。田植期の26日夜から27日にかけて風雨が強く、竹・木が折れる。夏作は不作となる。   | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |
| 慶応 | 2 | 1866 | 7  | 18 | 三河、暴風雨・洪水。刈谷の高須新田(猿渡川下流)が冠水し、三河の海岸地方では農作物に被害があった。  | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |
| 慶応 | 2 | 1866 | 8  | 10 | 三河、暴風雨・洪水。岡崎では、10日は雨だったが、夕方(18時ごろ)から風雨が強くなり、夜半(22時ごろ)には、川が氾濫して、一部住家に浸水した。  | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM                 |
| 慶応 | 2 | 1866 | 9  | 14 | 尾張・三河、大雨・暴風雨・洪水。尾張・三河では、13日夜から15日まで大雨が降り続き、15日は夜(20時ごろ)から翌朝(7時ごろ)まで暴風雨であった。尾張では、家屋・樹木・農作物の被害が大きかった。岡崎では河川の出水により、家屋の浸水もあり、三河の農作物も大きな被害を受けた。                           | 愛知県災害誌(1970)                      |
| 慶応 | 3 | 1867 | 9  | 27 | 尾張、暴風雨・洪水。庄内川が出水し、松河戸村(現春日井市)八反田で破堤した。   | 愛知県災害誌(1970)                      |
| 慶応 | 4 | 1868 | 5  |    | 近畿・東海道・関東地方、長雨(大雨)・洪水・凶作。尾張・三河とも、閏4月中旬から連日雨が降り続き、5月に入ってさらに甚だしくなった。このため、低地の浸水や諸川の氾濫がおこったが、ことに丹羽郡入鹿池堤防の決壊による被害は甚大であった<入鹿切れ>。この雨で、この年は凶作となる。これは、多雨型の梅雨とその末期の大雨によるものである。 | 愛知県災害誌(1970)                      |
| 慶応 | 4 | 1868 | 9  | 16 | 尾張、大雨・洪水。庄内川水系が出水し、庄内川の上・中・下志段味村、ほかの各所で堤防が決壊した。矢田川でも瀬戸村・瀬古村・成願寺村・中切村・福徳寺村等で破堤して、家屋流失や死者も出た。名古屋も巾下付近で家屋の浸水が甚だしく、本町・広小路・赤塚(当時は小川や溝が多かった)も床下浸水した。また、一宮等尾張西部地方でも低地が浸水した。 | 愛知県災害誌(1970)                      |

※被害実数は文献により差異があります。

災害年表(風水害) 明治時代以降

|    |    |      |    | 愛知県  |     |     |   |  |                   |
|----|----|------|----|------|-----|-----|---|--|-------------------|
| 和暦 | 西暦 | 開始日  |    | 気象概要 | 気象値 |     |   | 事象   | 出典                |
|    |    | 年    | 月  |      | 日   | 降水量 | 風速等                                       |  |                   |
| 年  | 西暦 | 月    | 日  | 日    | 指標  | 観測局 | 値   |  |                   |
| 明治 | 10 | 1877 | 10 |      |     |     |   | 愛知県下全般に暴風雨。死者13人、負傷者9人、家屋全壊1,058戸、家屋半壊233戸の被害があった。   | 愛知県の気象(1961)      |
| 明治 | 22 | 1889 | 9  | 11   |     |     |   | 紀伊半島から名古屋付近を通過した台風により、三河湾・伊勢湾に高潮が起きた。熱田では11日19時頃に高潮が来襲し、豊田・柴田・笠寺・伝馬・星崎の名新田一帯が浸水した。県一般での暴風雨と沿岸での水害により、死者876人、負傷者79人、家屋全壊・倒壊7191戸、流失家屋7,132戸、浸水家屋31,730戸という被害を出した。 | 愛知県史別編自然_付録00-ROM |
| 明治 | 25 | 1892 | 9  | 4    |     |     | 最大風速<br>10.1m<br>(20分間<br>平均)             | 愛知県下全般に暴風雨。三河の渥美・宝飯・八名・額田郡で甚大な被害があった。  | 愛知県の気象(1961)      |
| 明治 | 27 | 1894 | 8  | 23   |     |     |   | 尾張西部に落雷があり、中島郡で死傷者2人、気絶者7人があった。  | 愛知県の気象(1961)      |
| 明治 | 28 | 1895 | 8  | 13   |     |     |   | 強い雷雨が続き、合計234ヶ所へ落雷し、死傷者4人、気絶者6人などの被害があった。  | 愛知県の気象(1961)      |
| 明治 | 29 | 1896 | 8  | 30   | 8   | 31  | 最大風速<br>18.8m<br>(20分間<br>平均)             | 紀伊半島西部から若狭湾に進んだ台風により、尾張地方を中心に死者33人、負傷者63人、全壊住家2,104戸の被害が出た。海岸地方では高潮により新田に大きな被害。  | 災害記録日比川           |
| 明治 | 29 | 1896 | 9  | 4    | 9   | 11  |   | 長雨と集中豪雨により、矢作川以西の河川が破堤・氾濫した。愛知・東春日井・西春日井・中島・海東5郡の被害が甚大であった。  | 愛知県災害誌(1970)      |
| 明治 | 30 | 1897 | 6  | 16   | 6   | 17  | 総雨量<br>名古屋 762mm<br>名古屋 129mm<br>熱田 139mm | 強い雷雨で、住家の全壊3棟、建物破損7棟。また大雨で名古屋市内の約1,500戸が浸水した。  | 愛知県災害誌(1970)      |
| 明治 | 30 | 1897 | 9  | 29   |     |     |   | 四国北部から名古屋の南を通った台風に伴い、大雨が降った。海西郡開治村(現愛西市)で佐屋川の堤防が決壊し、死傷者4人、床上浸水10,604棟の被害を出した。  | 災害記録日比川           |
| 明治 | 31 | 1898 | 8  | 1    |     |     |   | 集中豪雨により名古屋市内で1,658戸が浸水。  | 愛知県の気象(1961)      |



| 愛知県   |      |    |    |     |    |   |                               |                     |   |  |                       |
|-------|------|----|----|-----|----|---|-------------------------------|---------------------|---|--|-----------------------|
| 和暦    | 開始日  |    |    | 終了日 |    |   | 気象概要                          |                     |   | 事象   | 出典                    |
|       | 年    | 西暦 | 月  | 日   | 月  | 日 | 気象値                           |                     |   |  |                       |
|       |      |    |    |     |    |   | 指標                            | 観測局                 | 値 |  |                       |
| 明治 35 | 1902 | 9  | 28 |     |    |   | 最大風速<br>13.8m<br>(20分間<br>平均) |                     |   | 尾張西部と関東地方を相次いで北上した2つの台風により、尾張地方で強い暴風雨となった。   |                       |
| 明治 36 | 1903 | 7  | 7  | 9   |    |   | 最大風速<br>22.0m<br>(20分間<br>平均) |                     |   | 土佐沖から若狭湾に進んだ台風に伴う大雨と暴風雨で、死者・行方不明者8人、負傷者39人、などの被害が出た。東春日井郡神坂村の内津川や西加茂郡拳母町・根川村の矢作川が破壊した。   |                       |
| 明治 37 | 1904 | 7  | 9  | 7   | 11 |   | 最大風速<br>14.8m<br>(20分間<br>平均) |                     |   | 10日、和歌山の東方から彦根付近に進んだ台風に伴う暴風雨で、豊川・矢作川等に氾濫被害が出た。台風の通過後も雨が続き、11日には東春日井郡篠木村と高間村で庄内川が破壊し、名古屋市内の住家1,082戸、非住家110棟が浸水した。被害が大きかったのは三河地方で、死者39人はすべて東三河でのものである。 |                       |
| 明治 39 | 1906 | 7  | 10 | 7   | 16 |   |                               |                     |   | 大雨により庄内川・矢作川流域で、堤防決壊の被害が出た。  | 愛知県の気象(1961)          |
| 明治 41 | 1908 | 8  | 7  |     |    |   | 最大風速<br>10.6m<br>(20分間<br>平均) | 総雨量<br>名古屋<br>168mm |   | 伊勢湾に入った台風の影響により、名古屋市内で床上浸水179戸、床下浸水6,379戸の住家被害が出た。   | 愛知県史別編自然-<br>付録CD-ROM |
| 明治 44 | 1911 | 6  | 19 |     |    |   | 最大風速<br>23.1m<br>(20分間<br>平均) |                     |   | 神戸付近から新潟に進んだ台風の暴風雨により、県下で死者65人、負傷者43人、全壊住家373戸などの被害が出た。  | 愛知県史別編自然-<br>付録CD-ROM |
| 明治 44 | 1911 | 8  | 4  |     |    |   | 最大風速<br>14.5m<br>(20分間<br>平均) |                     |   | 三河湾に上陸した台風の暴風雨により、東春日郡高蔵寺町ほか、西春日井郡川中村で庄内川・矢作川が破壊した。また天白川・山崎川が氾濫し右岸の愛知郡笠寺村・熱田町等で浸水した。床下浸水は、名古屋警察管内で3,671戸、熱田警察所管内で2518戸に及んだ。                          |                       |
| 明治 45 | 1912 | 4  | 19 |     |    |   |                               |                     |   | 丹羽郡・中島郡・海東郡を中心に激しい降雹があり、農作物に被害を与えた。降雹と同時に強い突風が起り、丹羽郡大口村から古知野村にかけて死者1人、全壊住家11棟の被害となった。  | 愛知県の気象(1961)          |
| 大正 1  | 1912 | 8  | 13 |     |    |   |                               |                     |   | 尾張地方で落雷30箇所、即死2人、家屋全焼1戸。   | 愛知県史別編自然-<br>付録CD-ROM |

| 愛知県   |      |    |    |     |    |        |      |     |       |                               |   |                    |     |
|-------|------|----|----|-----|----|--------|------|-----|-------|-------------------------------|---|--------------------|-----|
| 和暦    | 開始日  |    |    | 終了日 |    |        | 気象概要 | 気象値 |       |                               | 事象  | 出典                 |     |
|       | 年    | 西暦 | 月  | 日   | 月  | 日      |      | 指 標 | 降水量   |                               |   |                    | 風速等 |
|       |      |    |    |     |    |        |      |     | 観測局   | 値                             |   |                    |     |
| 大正 1  | 1912 | 9  | 22 | 9   | 23 | 暴風雨・高潮 | 総雨量  | 名古屋 | 103mm | 最大風速<br>28.2m<br>(20分間<br>平均) | 大坂湾から若狭湾へ進んだ台風に伴う暴風雨と高潮で被害が出た。「大正元年の台風」と呼ばれる。日光川が1,500mにわたって決壊破損し、海東郡南陽町、神守村、蟹江町の住宅は屋根だけを残して濁流におおわれた。 | 愛知県地域防災計画<br>木曾川町史 |     |
| 大正 2  | 1913 | 10 | 3  |     |    | 暴風雨    | 総雨量  | 名古屋 | 78mm  | 最大風速<br>12.1m<br>(20分間<br>平均) | 熱田警察署管内で床上浸水912戸、床下浸水761戸、一宮警察署管内で床上浸水40戸、床下浸水1,815戸。   |                    |     |
| 大正 6  | 1917 | 7  | 16 |     |    | 落雷     |      |     |       |                               | 東加茂郡、八名郡で落雷によって2人が死亡、住家1棟が全焼した。   |                    |     |
| 大正 6  | 1917 | 7  | 26 |     |    | 落雷・洪水  |      |     |       |                               | 尾張で落雷、死者3人、家屋消失20戸の被害を出した。また大雨も降り、57戸で床下浸水。   | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM  |     |
| 大正 8  | 1919 | 7  | 18 |     |    | 強雨・落雷  |      |     |       |                               | 名古屋付近で短時間の集中豪雨で名古屋市内およびその周辺で広範囲にわたって浸水被害が発生した。  | 愛知県の気象(1961)       |     |
| 大正 9  | 1920 | 7  | 27 |     |    | 落雷     |      |     |       |                               | 落雷により東春日井郡内で3人が死亡、家屋2戸が焼失した。  |                    |     |
| 大正 10 | 1921 | 6  | 30 | 7   | 1  | 暴風雨    |      |     |       | 最大風速<br>18m<br>(20分間<br>平均)   | 梅雨前線と低気圧の影響で、県下で死者5人、負傷者10人、全壊家屋362戸、半壊家屋132戸、浸水家屋199戸の被害が出た。   | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM  |     |
| 大正 10 | 1921 | 7  | 14 |     |    | 大雨     |      |     |       |                               | 雷を伴う大雨が降り、名古屋市と鳴海町を中心に2,625戸の浸水被害が出た。   | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM  |     |
| 大正 10 | 1921 | 7  | 18 |     |    | 大雨     | 総雨量  | 名古屋 | 107mm |                               | 雷を伴う大雨が降り、江川と菟瀬川が氾濫した。名古屋市街を中心に9,116戸の浸水被害が出た。  |                    |     |
| 大正 10 | 1921 | 7  | 26 | 7   | 28 | 大雨・洪水  |      |     |       |                               | 雷を伴う激しい雨で瀬戸川が増水氾濫し、瀬戸町で約700戸が浸水した。鳴海町・天白村では天白川・扇川の堤防が決壊し、床上浸水200戸、床下浸水1500戸の被害となった。                   | 愛知県の気象(1961)       |     |
| 大正 10 | 1921 | 9  | 25 | 9   | 26 | 暴風雨・高潮 | 総雨量  | 名古屋 | 39mm  | 最大風速<br>18.5m<br>(20分間<br>平均) | 紀伊半島を北上した台風の影響で暴風雨となり、伊勢湾北部に高潮が起った。海部郡から名古屋南部にかけて、高潮と日光側の氾濫による被害が甚大で、3,050haにわたり、10日～2ヶ月間も浸水した。       |                    |     |
| 大正 14 | 1925 | 8  | 14 | 8   | 15 | 大雨・洪水  | 総雨量  | 名古屋 | 181mm |                               | 低気圧の影響で住内川・矢作川流域に激しい雨が降った。西加茂郡拳母町などで河川が破堤氾濫し、付近一帯が浸水した。東春日井郡瀬戸町でも、堤防の決壊で57戸が倒壊する被害が出た。                | 愛知県災害誌(1970)       |     |

| 開始日 |    |      |    |    | 終了日 |    |     |       |                           | 愛知県 |     |   |               |               |     |
|-----|----|------|----|----|-----|----|-----|-------|---------------------------|-----|-----|---|---------------|---------------|-----|
| 和暦  | 年  | 西暦   | 月  | 日  | 和暦  | 年  | 月   | 日     | 気象概要                      | 気象値 |     |   | 事象            | 出典            |     |
|     |    |      |    |    |     |    |     |       |                           | 指標  | 降水量 |   |               |               | 風速等 |
|     |    |      |    |    |     |    |     |       |                           |     | 観測局 | 値   |               |               |     |
| 大正  | 14 | 1925 | 8  | 16 | 8   | 17 |     |       | 強風雨・竜巻                    |     |     |   |               | 愛知県災害書誌(1970) |     |
| 大正  | 14 | 1925 | 9  | 11 |     |    | 名古屋 | 187mm | 最大風速<br>22.8m<br>(20分間平均) |     |     | 和歌山から舞鶴付近に進んだ台風の影響で、名古屋市で床上浸水50戸、床上浸水1,159戸などの被害が出た。また海部郡佐織村では竜巻も発生し、負傷者も出た。  | 愛知県災害書誌(1970) |               |     |
| 昭和  | 4  | 1929 | 8  | 14 | 8   | 15 | 名古屋 | 118mm | 最大風速<br>17.5m<br>(20分間平均) |     |     | 伊勢湾を北上し名古屋付近を通った台風により、沿岸部と平野部を中心に暴風雨となり、死者7人、行方不明5人、負傷者3人、家屋の全壊52戸、半壊16戸、浸水約2万戸の被害が出た。                                      |               |               |     |
| 昭和  | 4  | 1929 | 9  | 10 |     |    | 名古屋 | 195mm | 最大風速<br>7.8m<br>(20分間平均)  |     |     | 大阪湾から若狭湾へ進んだ台風で、矢作川上流部に豪雨が降った。西尾町の付近で矢作川古川の堤防が大きく決壊し、1,500余戸の浸水家屋を出した。  |               |               |     |
| 昭和  | 5  | 1930 | 7  | 19 |     |    |     |       | 大雨・洪水                     |     |     | 南海上を進んだ台風の影響で大雨が降り、江川警察署管内だけでも1,399戸の浸水家屋を出した。  |               |               |     |
| 昭和  | 5  | 1930 | 7  | 23 |     |    |     |       | 大雨・洪水                     |     |     | 台風から変わった日本海を東進した温帯低気圧の影響で、庄内川の中流や上流域の高地に短時間に激しい雨が降った。東春日井郡高蔵寺町で内津用水が氾濫し、死者7人、重傷者2人を出した。このほか東春日井郡を中心に、西春日井郡、丹羽郡方面で大きな水害となった。 | 愛知県の気象(1961)  |               |     |
| 昭和  | 6  | 1931 | 10 | 13 |     |    |     |       | 大雨・洪水                     |     |     | 飛騨川、長良川ぞいに南下した雷雲が名古屋市北部に達し、尾張北部の落雷は100余件に上った。雷鳴とともに豪雨となり、名古屋市内だけでも数千戸が浸水した。   |               |               |     |
| 昭和  | 7  | 1932 | 7  | 8  |     |    |     |       | 大雨                        |     |     | 室戸岬から名古屋付近を通過した台風に伴う大雨で、東春日井郡味岡村の入居用水から出る葉師川が氾濫するなどして、尾張西部と北部を中心に、多数の浸水家屋を出した。  |               |               |     |
| 昭和  | 7  | 1932 | 9  | 13 | 9   | 16 |     |       | 長雨                        |     |     | 低気圧と前線の影響で、庄内川や日光川流域で激しい雨が降り、名古屋をはじめ各所で多くの浸水被害が出た。庄内川流域では堤防、橋などが破損決壊する大きな被害が生じた。  |               |               |     |
| 昭和  | 8  | 1933 | 8  | 24 |     |    |     |       | 大雨・洪水                     |     |     | 9月初旬からの長雨に驟雨性の豪雨が重なり、名古屋市内だけでも約2,000戸の浸水家屋を出した。   |               |               |     |
| 昭和  | 8  | 1933 | 8  | 24 |     |    |     |       | 大雨・洪水                     |     |     | 尾張平野とその周辺一帯に激しい雷雨があり、一宮市で浸水家屋2,000余戸を出した。東春日井郡では住家の全壊と半壊の被害が各1件発生した。  |               |               |     |

| 愛知県  |      |    |    |     |    |   |      |     |       |                               |  |                   |
|------|------|----|----|-----|----|---|------|-----|-------|-------------------------------|--|-------------------|
| 和暦   | 開始日  |    |    | 終了日 |    |   | 気象概要 |     |       | 事象                            | 出典   |                   |
|      | 年    | 西暦 | 月  | 日   | 月  | 日 | 気象値  |     |       |                               |  |                   |
|      |      |    |    |     |    |   | 指標   | 観測局 | 値     |                               |  | 風速等               |
| 昭和8  | 1933 | 9  | 14 |     |    |   |      |     |       |                               | 名古屋地方で大雷雨となり、床上浸水80戸、床下浸水6,380戸の被害が出た。   |                   |
| 昭和9  | 1934 | 9  | 8  | 9   | 9  |   | 総雨量  | 名古屋 | 31mm  | 最大風速<br>15.8m<br>(20分間<br>平均) | 台風から変わって日本海を北上した温帯低気圧に伴う強風で、風に飛ばされたり、飛来物にあたるなどして、死者2人、負傷者1人を出した。                       |                   |
| 昭和9  | 1934 | 9  | 21 |     |    |   | 総雨量  | 名古屋 | 24mm  | 最大風速<br>32.9m<br>(20分平<br>均)  | 室戸岬から雷山湾に進んだ台風に伴う暴風で、名古屋署管内だけでも死者4人、負傷者51人の被害が出た。河川の出水による被害は少なかったが、海岸地方では高潮の被害が出た。     |                   |
| 昭和9  | 1934 | 11 | 1  |     |    |   |      |     |       |                               | 猛烈な雨で、江川署管内116戸、笹島署管内697戸、熱田署管内280戸の浸水被害が出た。   |                   |
| 昭和10 | 1935 | 10 | 27 |     |    |   |      |     |       |                               | 低気圧の影響で豪雨となり、名古屋市全体で1万戸以上が浸水した。天白村では天白川への転落行方不明者1人を出した。                                |                   |
| 昭和11 | 1936 | 10 | 2  | 10  | 3  |   | 総雨量  | 名古屋 | 198mm | 最大風速<br>18.6m                 | 南海上を進んだ台風の影響で大雨が降り、名古屋市内だけでも12,686戸の浸水家屋を出した。  |                   |
| 昭和12 | 1936 | 7  | 13 | 7   | 15 |   |      |     |       |                               | 梅雨前線が活発化した豪雨の影響で、一宮市で5,000戸の浸水家屋を出したのをはじめ、多くの浸水被害が発生した。                                | 木曾川町史             |
| 昭和12 | 1937 | 9  | 11 |     |    |   |      |     |       | 最大風速<br>26.7m                 | 足摺岬から鳥取沖へ進んだ台風の影響で風雨が強まり、名古屋市内で飛散物による死者2名が出た。  |                   |
| 昭和13 | 1938 | 7  | 3  | 7   | 5  |   |      |     |       |                               | 低気圧が通るたびに梅雨前線が活発になって豪雨が続き、名古屋市内で3,409戸の浸水家屋を出した。                                       |                   |
| 昭和14 | 1939 | 8  | 7  |     |    |   |      |     |       |                               | 名古屋付近で大雷雨があり、市内で4,561戸が浸水した。   | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM |
| 昭和15 | 1940 | 6  | 16 | 6   | 17 |   | 総雨量  | 名古屋 | 192mm |                               | 千天の大雨で庄内川が大増水し、名古屋市内で1,600余戸の家屋が浸水した。  |                   |
| 昭和16 | 1941 | 6  | 27 | 6   | 29 |   |      |     |       |                               | 梅雨前線の長雨が激しい雨となり、山間部でがけ崩れ、平野部で河川の氾濫、堤防の決壊などの大きな被害が出た。名古屋市内で床下浸水家屋2,000余戸、西加茂郡で重要道路通行不能。 |                   |
| 昭和16 | 1941 | 7  | 10 | 7   | 12 |   |      |     |       |                               | 太平洋洋に発生した前線が活発化し、庄内川上中流域に激しい雨が降った。名古屋市内で死者3人、浸水家屋1,100棟の被害が出た。                         |                   |
| 昭和19 | 1944 | 10 | 7  | 10  | 8  |   | 総雨量  | 名古屋 | 80mm  | 最大風速<br>21.7m                 | 伊勢湾から名古屋付近に上陸した台風の影響で、濃尾平野はかなりの被害を受けた模様であるが、資料不足のため詳細不明。                               |                   |

| 愛知県  |      |    |    |     |    |   |                    |            |       |   |   |              |
|------|------|----|----|-----|----|---|--------------------|------------|-------|---|---|--------------|
| 和暦   | 開始日  |    |    | 終了日 |    |   | 気象概要               | 気象値        |       |   | 事象  | 出典           |
|      | 年    | 西暦 | 月  | 日   | 月  | 日 |                    | 降水量        |       | 風速等   |   |              |
|      |      |    |    |     |    |   |                    | 指標         | 観測局   |   |   |              |
| 昭和20 | 1945 | 9  | 18 |     |    |   | 台風第16号<br>(枕崎台風)   | 総雨量<br>名古屋 | 40mm  | 最大風速<br>29.7m                                 | 猛烈な台風の影響で20m以上の暴風となり、急造のパラックが多数倒壊し、死者も4人あった。  |              |
| 昭和20 | 1945 | 10 | 5  |     |    |   | 台風第19号             | 総雨量<br>名古屋 | 217mm | 最大風速<br>14.7m                                 | 紀伊半島をかすめて東海道沖を東進した台風の雨雲の影響で、広範囲に水害が発生した。  |              |
| 昭和20 | 1945 | 10 | 11 |     |    |   | 台風第20号<br>(阿久根台風)  | 総雨量<br>名古屋 | 229mm | 最大風速<br>18.3m                                 | 台風に刺激された前線の影響で大雨が降り、水害が発生した。  |              |
| 昭和23 | 1948 | 11 | 19 |     |    |   | 台風第34号             | 総雨量<br>名古屋 | 21mm  | 最大風速<br>15.4m                                 | 東海道沖を海岸沿いに進んだ台風により、風水害を生じた。   |              |
| 昭和24 | 1949 | 8  | 31 | 9   | 1  |   | 台風第10号             |            |       |   | 八丈島方面から小田原の西に上陸した台風の大雨で、名古屋市内と中島郡方面を中心に浸水の被害を出した。   |              |
| 昭和25 | 1950 | 7  | 28 | 7   | 30 |   | 台風第9号・<br>熱帯低気圧    |            |       |   | 九州の南海上で停滞した台風と熱帯低気圧に伴う大雨の影響で、1,600余戸の浸水被害が出た。   | 愛知県災害誌(1970) |
| 昭和25 | 1950 | 9  | 3  |     |    |   | 台風第28号<br>(シエーン台風) | 総雨量<br>名古屋 | 47mm  | 最大風速<br>26.7m/s<br>(10分平均)<br>最大瞬間風速<br>36.0m | 室戸岬から若狭湾に進んだ台風に伴う暴風で、名古屋市、一宮市、西加茂郡で計6人の死者を出した。  | 愛知県災害誌(1970) |
| 昭和27 | 1952 | 6  | 23 | 6   | 24 |   | 台風第2号              | 総雨量<br>名古屋 | 177mm | 最大風速<br>15.6m                                 | 紀伊半島南端に上陸し渥美半島に進んだ台風と、それに刺激された梅雨前線の影響で、東海道地方全域に大雨が降り、長良川下流域で堤防が決壊して大災害となった。               |              |
| 昭和27 | 1952 | 7  | 10 | 7   | 11 |   | 豪雨・洪水              |            |       |   | 前線の活動が活発になり、庄内川中流域から名古屋にかけて大雨が降った。名古屋近郊の天白川、山崎川が増水氾濫し、名古屋市で床上浸水2,353戸、床下浸水38,757戸の被害となった。 |              |
| 昭和28 | 1953 | 7  | 17 | 7   | 20 |   | 大雨                 |            |       |   | 日本海から延びた前線の通過に伴い局地的に豪雨が降り、名古屋市で1,500余戸の浸水被害が出た。   | 愛知県災害誌(1970) |

| 開始日 |    |      |    |    | 終了日 |    |   | 愛知県  |     |       |  |  |              |
|-----|----|------|----|----|-----|----|---|------|-----|-------|--|--|--------------|
| 和暦  | 年  | 西暦   | 月  | 日  | 日   | 月  | 日 | 気象概要 |     | 事象    | 出典   |  |              |
|     |    |      |    |    |     |    |   | 指標   | 観測局 |       |  |  |              |
| 昭和  | 28 | 1953 | 9  | 25 |     |    |   | 総雨量  | 名古屋 | 178mm | 最大風速<br>22.6m/s<br>(10分平均)<br>最大瞬間<br>風速<br>30.4m<br>最高潮位<br>2.27m | 熊野灘から知多半島に進んだ台風により県下全体で暴風となった。大潮の時期に高潮が重なり、暴風による波浪とともに海岸堤防を破壊し被害が大きくなった。名古屋市をはじめとして6市26町76村に災害救助法が適用された。 | 愛知県災害誌(1970) |
| 昭和  | 29 | 1954 | 7  | 30 |     |    |   |      |     |       |  | 飛騨川下流域から南下した雷雲が名古屋市北西部に達し、移動経路上で短時間の豪雨を降らせた。名古屋市の北部、西部の限られた狭い地域で5,000戸を超える家屋が浸水した。                       |              |
| 昭和  | 29 | 1954 | 8  | 31 | 1   |    |   |      |     |       |  | 数多くの雷が発生し、入鹿池周辺や中島郡、海部郡、名古屋市などに大雨を降らせた。尾張西部を中心に床上浸水289戸、床下浸水11,730戸の被害が出た。                               |              |
| 昭和  | 29 | 1954 | 9  | 18 | 9   | 19 |   | 総雨量  | 名古屋 | 91mm  | 最大風速<br>18.7m  | 紀伊半島南端をかすめ御前崎に上陸した台風に伴う暴風雨で死者4人の被害が出た。   |              |
| 昭和  | 29 | 1954 | 9  | 25 | 9   | 26 |   | 総雨量  | 名古屋 | 115mm | 最大風速<br>31.8m  | 台風が刺激された本州南岸の前線が、名古屋付近から知多半島にかけて激しい雨を降らせ、名古屋市で5人の負傷者、3,448戸の浸水家屋が出た。                                     |              |
| 昭和  | 30 | 1955 | 10 | 20 |     |    |   | 総雨量  | 名古屋 | 34mm  | 最大風速<br>32.0m  | 田辺付近に上陸し、強い勢力を保ったまま名古屋と岐阜の間に進んだ台風の暴風で、74戸の家屋が全半壊した。これに伴う死者3人、負傷者18人という被害が、名古屋市を中心に出了た。                   |              |
| 昭和  | 31 | 1956 | 7  | 7  |     |    |   |      |     |       |  | 寒冷前線の通過に伴う強い雨で、名古屋市を中心に浸水被害が発生した。  |              |
| 昭和  | 31 | 1956 | 9  | 26 | 9   | 27 |   | 総雨量  | 名古屋 | 136mm | 最大風速<br>20.0m  | 潮岬から東海道沖を通過して御前崎に上陸した台風により、名古屋市で全半壊家屋4戸、浸水家屋3,559戸の被害が出た。  |              |
| 昭和  | 32 | 1957 | 8  | 7  | 8   | 8  |   |      |     |       |  | 名古屋から多治見の狭い地域に短時間の集中豪雨があり、庄内川が増水、付近の小河川や池が氾濫した。瀬戸市、高蔵寺町を中心に死者33人、負傷者44人、全壊家屋76戸、床下浸水23,961戸という被害となった。    | 愛知県災害誌(1970) |
| 昭和  | 33 | 1958 | 8  | 25 | 8   | 26 |   | 総雨量  | 名古屋 | 140mm | 最大風速<br>24.1m  | 和歌山県白浜付近から琵琶湖西岸を通過した台風により、各地で浸水被害が起きた。   | 下山村史資料編I     |

| 愛知県 |     |       |  |    |   |     |                        |  |              |    |
|-----|-----|-------|--|----|---|-----|------------------------|--|--------------|----|
| 和暦  | 年   | 西暦    | 開始日                                      |    |   | 終了日 |                        |  | 気象概要         | 出典 |
|     |     |       | 日  | 月  | 日 | 日   | 月                      | 日  |              |    |
|     |     |       | 気象値                                      |    |   |     |                        |  |              |    |
| 指 標 |     | 観測局   |  | 値  |   | 風速等 |                        | 事 象  |              |    |
| 総雨量 | 名古屋 | 234mm | 岐阜県養<br>老町<br>牧田川決<br>壊<br>最大風速<br>17.7m |    |   |     |                        |  |              |    |
| 昭和  | 34  | 1959  | 8  | 12 | 8 | 14  | 大雨                     | 太平洋岸の前線と北上する台風第7号の影響で大雨が降り、負傷者1人、家屋全半壊25戸、床上浸水14戸、床下浸水8,826戸の被害が出た。  |              |    |
| 昭和  | 34  | 1959  | 9  | 26 |   |     | 台風第15号<br>(伊勢湾台<br>風)  | 潮岬から高山湾に進んだ台風によって猛烈な暴風雨となった。また高潮による異常潮位が伊勢湾奥で基準面上4mに達した。急激な洪水波と高潮で、木曾川、庄内川、矢作川などが破堤し、死者3,280人、負傷者59,045人、住家全壊23,334戸、住家半壊97,049戸、流失家屋3,194戸、浸水家屋10万戸以上という未曾有の被害を出した。 | 愛知県災害誌(1970) |    |
| 昭和  | 35  | 1960  | 8  | 11 | 8 | 13  | 台風第11号<br>、第12号        | 相次いで室戸岬から日本海へ進んだ台風の影響で、海部郡立田村で長良川が氾濫し1戸が流失した。また名古屋市北区で突風が吹き1戸が倒壊した。  |              |    |
| 昭和  | 36  | 1961  | 6  | 24 | 6 | 27  | 大雨・洪水                  | 梅雨前線が北上し、熱帯低気圧の影響もあって激しい雨が降り、伊勢湾台風以来の大きな水害となった。尾張西部ではほとんどの小河川が氾濫し、名古屋でも約3,000戸が床上浸水した。   | 災害記録目比川      |    |
| 昭和  | 36  | 1961  | 9  | 15 | 9 | 16  | 台風第18号<br>(第2室戸台<br>風) | 室戸岬に上陸し若狭湾に進んだ台風の暴風雨で、飛散物や倒壊物による多数の負傷者が出た。知多郡大府町内に竜巻が発生し、愛知郡豊明方面で消滅した。この竜巻で8工場が倒壊、14人が重軽傷を負い、家屋120戸が破損した。また尾張平野の北部や西部で小河川が溢水、破堤して浸水被害が発生した。                          |              |    |
| 昭和  | 37  | 1962  | 7  | 2  | 7 | 5   | 大雨・洪水                  | 北上し活発化した梅雨前線の影響で名古屋方面で大雨となり、千種区の松野池の堤防が決壊するなどした。尾張地方で全壊1戸、半壊1戸、床上浸水892戸、床下浸水13,182戸の被害が出た。   |              |    |
| 昭和  | 37  | 1962  | 7  | 27 | 7 | 28  | 台風第7号                  | 潮岬西方に上陸し衰弱しながら伊吹山方面に進んだ台風の影響で大雨が降り、名古屋南部に浸水被害が発生した。  |              |    |
| 昭和  | 37  | 1962  | 8  | 26 | 8 | 27  | 台風第14号                 | 尾簾付近に上陸し北上した台風の暴風で、家屋が倒壊し負傷者も発生した。また名古屋方面で浸水家屋が発生した。   |              |    |

| 愛知県  |      |    |    |     |    |   |          |     |     |       |      |   |  |  |
|------|------|----|----|-----|----|---|----------|-----|-----|-------|------|---|--|--|
| 和暦   | 開始日  |    |    | 終了日 |    |   | 気象概要     | 気象値 |     |       | 事象   | 出典  |  |  |
|      | 年    | 西暦 | 月  | 日   | 月  | 日 |          | 指 標 | 降水量 |       |      |   | 風速等  |  |
|      |      |    |    |     |    |   |          |     | 観測局 | 値     |      |   |  |  |
| 昭和39 | 1964 | 8  | 3  |     |    |   | 落雷・洪水・突風 |     |     |       |      | 炎天と上空の寒気の影響で猛烈な雷雨が発生した。名古屋市中区では、中心部で地下街へ浸水したのをはじめ、床上浸水265戸、床下浸水9,814戸の被害が出た。また中区や千種区での落雷により、全焼家屋3棟、半焼家屋2棟の被害、海部郡蟹江町では突風により家屋が倒れて負傷者1名が出た。 |  |  |
| 昭和40 | 1965 | 5  | 27 |     |    |   | 台風第6号    |     |     |       |      | 東海道沖を込んだ台風が前線の活動を強め、強い雨が降って名古屋市中および周辺地域に浸水被害が発生した。  |  |  |
| 昭和40 | 1965 | 9  | 17 |     |    |   | 台風第24号   | 総雨量 | 名古屋 | 189mm | 最大風速 | 27.0m   | 志摩半島尖端に上陸し伊良湖岬に進んだ台風と前線による大雨で、名古屋市などで多くの浸水家屋が発生した。   |  |
| 昭和41 | 1966 | 9  | 19 |     |    |   | 大雨       |     |     |       |      |   | 台風第21号から変わった低気圧が停滯前線上を進んだ影響で、名古屋付近から矢作川流域にかけて強い雨が降り、名古屋市内で浸水約1,600戸の被害があった。  |  |
| 昭和42 | 1967 | 7  | 2  | 7   | 3  |   | 大雨       | 総雨量 | 名古屋 | 83mm  |      |   | 梅雨前線上を東進した低気圧の影響で雨が強くなり、小牧市の台瀬川右岸堤防が約1m崩壊し決壊寸前となった。名古屋市と庭郡で床上浸水3戸、床下浸水1,200戸の被害が出た。  |  |
| 昭和42 | 1967 | 7  | 9  | 7   | 10 |   | 大雨       |     |     |       |      |   | 台風第7号から変わった温帯低気圧が前線を活発化させ、雷を伴った強雨となった。小河川の氾濫や排水不良のため、主に尾張地方で16,000棟を超える住家浸水があった。また中央線高蔵寺一定光寺間で山側のコンクリート壁が崩れて線路を埋めたところにも普通電車が衝突し19名が負傷した。 |  |
| 昭和42 | 1967 | 10 | 28 |     |    |   | 台風第34号   | 総雨量 | 名古屋 | 146mm | 最大風速 | 20.8m   | 志摩半島の先端をかすめて渥美湾に上陸した台風に伴う大雨で、名古屋市では南区を中心に18,000戸の住家浸水があった。   |  |
| 昭和43 | 1968 | 8  | 29 |     |    |   | 台風第10号   |     |     |       | 最大風速 | 18.2m   | 台風の前線で前線が活発になり長雨が降った。台風本体の雨は主に三河地方北東部に降ったが、名古屋市周辺でも約2,000戸の住家浸水があった。   |  |
| 昭和45 | 1970 | 6  | 14 | 6   | 16 |   | 大雨       | 総雨量 | 名古屋 | 179mm | 最大風速 | 11.3m   | 九州の西で発達した低気圧が梅雨前線を活発化させて大雨を降らせ、名古屋市中およびその周辺市町村での住家浸水を主とする災害となった。   |  |
| 昭和45 | 1970 | 7  | 29 | 7   | 30 |   | 集中豪雨     | 総雨量 | 名古屋 | 124mm | 最大風速 | 11.3m   | 九州の南海上で台風6号となった熱帯低気圧の影響で、名古屋市東南部での集中的な大雨となった。天白川水系が氾濫するなどして、約4万棟の浸水家屋が生じ、昭和区、緑区内ではがけ崩れのため2人が死亡した。  |  |



| 開始日 |    |      |   |    | 終了日 |    |   | 気象概要                         | 気象値           |     |   | 事象   | 出典           |
|-----|----|------|---|----|-----|----|---|------------------------------|---------------|-----|---|--|--------------|
| 和暦  | 年  | 西暦   | 月 | 日  | 月   | 日  | 日 |                              | 降水量           |     | 風速等   |  |              |
|     |    |      |   |    |     |    |   |                              | 指標            | 観測局 |   |  |              |
| 昭和  | 46 | 1971 | 7 | 18 |     |    |   |                              |               |     |   | 日本海と太平洋の2つの前線の影響で強い雷雨となった。春日井市内で落雷による死者2人、名古屋市内で2,318棟の浸水被害が出た。  |              |
| 昭和  | 46 | 1971 | 8 | 30 | 8   | 31 |   | 総雨量<br>名古屋 322mm<br>大沼 464mm | 最大風速<br>19.5m |     | 速度が遅く、強雨域の広い台風の影響で記録的な大雨となった。土砂崩れにより豊田市で死者2人、名古屋市内で3万戸を超える浸水被害となった。 |  |              |
| 昭和  | 46 | 1971 | 9 | 7  |     |    |   |                              |               |     |   | 台風が秋雨前線を刺激して大雨となった。  |              |
| 昭和  | 46 | 1971 | 9 | 26 |     |    |   |                              |               |     |   | 時速70kmの速さで北上し紀伊半島から名古屋市の南海上を通り抜けた台風が、短時間に強い雨を降らせ、名古屋市内およびその周辺市町村での住家浸水が発生させた。  |              |
| 昭和  | 47 | 1972 | 7 | 10 | 7   | 15 |   | 総雨量<br>猿投 458mm              |               |     |   | 東海地方に停滞した梅雨前線の活動が活発で強い雨が長く続いた。とくに西三河の山間部において記録的な集中豪雨となり、各地で山崩れや河川の氾濫が発生し、埋没・倒壊・流出する家屋が続出した。西加茂郡小原村、藤岡村、豊田市などで死者68人の被害を出した。前線の活動が一服した後の台風通過に伴う大雨被害とあわせて、住家の全壊271棟、半壊287棟、床上浸水2,075棟、床下浸水12,077棟という被害となった。 | 愛知県災害誌(1980) |
| 昭和  | 47 | 1972 | 9 | 16 | 9   | 17 |   |                              | 最高潮位<br>2.7m  |     |   | 紀伊半島を縦断して米原付近に進んだ台風の前線の影響も加わって、風雨が強まり高潮も発生した。名古屋市内などで飛来物による死者2人、負傷者106人、住家の半壊795棟にのぼった。  |              |
| 昭和  | 48 | 1973 | 8 | 4  | 8   | 5  |   | 小牧(名古屋航空測候所)<br>総雨量 194mm    |               |     |   | 飛騨川流域から南下した雷雲が小牧付近で発達し名古屋市から北東へ進んだ。激しい雷雨により名古屋市内の地下鉄がマヒしたほか、名古屋市内およびその周辺市町村に5万戸以上の住家浸水が発生した。   |              |
| 昭和  | 49 | 1974 | 7 | 24 | 7   | 25 |   | 総雨量<br>名古屋 140mm             |               |     |   | 動きの遅い低気圧に伴う大雨の影響で、名古屋市内およびその周辺市町村に約5万戸の住家浸水が発生した。  | 愛知県災害誌(1980) |
| 昭和  | 50 | 1975 | 7 | 3  | 7   | 4  |   | 総雨量<br>春日井 142mm             |               |     |   | 四国南岸から東海道へ前線を進んだ低気圧の影響で強い雨が降り、瀬戸市内で崖崩れが多発して、負傷者4人を出した。濃尾平野南部でも多数の浸水被害が発生した。  |              |
| 昭和  | 51 | 1976 | 7 | 28 |     |    |   | 総雨量<br>坂下 78mm               |               |     |   | 寒冷前線の雷雨で、落雷による住家の全壊1世帯、名古屋市内と東海市で床上浸水95世帯、床下浸水4,400世帯の被害が発生した。   |              |

| 開始日 |    |      |    |    | 終了日 |    |   | 気象概要 | 気象値     |       |     | 事象 | 出典 |   |
|-----|----|------|----|----|-----|----|---|------|---------|-------|-----|----|----|---|
| 和暦  | 年  | 西暦   | 月  | 日  | 月   | 日  | 日 |      | 降水量     |       | 風速等 |    |    |   |
|     |    |      |    |    |     |    |   |      | 指標      | 観測局   |     |    |    | 値 |
|     |    |      |    |    |     |    |   | 総雨量  | 名古屋     | 58mm  |     |    |    |   |
|     |    |      |    |    |     |    |   | 総雨量  | 一宮      | 682mm |     |    |    |   |
| 昭和  | 51 | 1976 | 9  | 8  | 9   | 13 |   | 総雨量  | 蟹江      | 642mm |     |    |    |   |
|     |    |      |    |    |     |    |   | 総雨量  | 小牧      | 523mm |     |    |    |   |
|     |    |      |    |    |     |    |   | 総雨量  | 名古屋     | 423mm |     |    |    |   |
| 昭和  | 52 | 1977 | 8  | 16 | 8   | 18 |   | 総雨量  | 一宮      | 140mm |     |    |    |   |
| 昭和  | 53 | 1978 | 9  | 16 |     |    |   | 総雨量  | 一宮      | 91mm  |     |    |    |   |
| 昭和  | 54 | 1979 | 9  | 24 | 9   | 25 |   |      |         |       |     |    |    |   |
| 昭和  | 55 | 1980 | 7  | 7  | 7   | 10 |   | 総雨量  | 東海      | 137mm |     |    |    |   |
| 昭和  | 55 | 1980 | 8  | 26 | 8   | 27 |   | 総雨量  | 中(名古屋市) | 174mm |     |    |    |   |
| 昭和  | 57 | 1982 | 8  | 7  | 8   | 8  |   |      |         |       |     |    |    |   |
| 昭和  | 58 | 1983 | 7  | 8  |     |    |   |      |         |       |     |    |    |   |
| 昭和  | 58 | 1983 | 9  | 27 | 9   | 29 |   | 総雨量  | 名古屋     | 234mm |     |    |    |   |
| 昭和  | 62 | 1987 | 9  | 25 |     |    |   |      |         |       |     |    |    |   |
| 昭和  | 62 | 1987 | 10 | 16 | 10  | 17 |   |      |         |       |     |    |    |   |

停滯前線と東シナ海をゆっくりと北上し、北上市から延びた台風の影響で、西濃山地や鈴鹿山脈の東側が強い集中豪雨域となり、1週間に年間雨量の約1/3の雨が降った。県西部で中小河川が氾濫し、日光川支流の目比川右岸が破堤するなどして、10万戸以上の浸水被害が出た。海部郡佐織町では1週間近くも浸水状態が続いた。また名古屋市中川区・海部郡大治町では突風による家屋倒壊の被害もあった。

前線と弱い熱帯低気圧の影響で大雨が降り、県西部地域で家屋の半壊1棟、床上浸水、床下浸水などの住家被害が発生させた。

台風第18号から変わった弱い熱帯低気圧の影響で強い雨が降り、名古屋のほか県西部域の22市町で家屋の床上および床下浸水が発生した。

南岸沿いの前線と台風16号の影響で、局地的に短時間の強い雨が降り、名古屋、東海市、豊明市などで床上・床下浸水の被害が発生した。

活発化した前線上を通過した低気圧の影響で強い雷雨となり、名古屋市北区、中区、昭和区、東区を中心に約1,000世帯の床上、床下浸水被害が出た。

日本海の低気圧から延びた前線の通過に伴い、名古屋で局地的集中豪雨となった。名古屋では、中川区、熱田区、港区を中心に、床上浸水413戸、床下浸水13,028戸の被害となった。

上空の寒気の影響で激しい雷雨となり、名古屋市を中心とした尾張地方各地で、床上浸水、床下浸水が多発した。

日本海と南岸を東進した低気圧の上空に流れ込んだ寒気の影響で、名古屋市東部と春日井市を中心に大雷雨となり、床上浸水41棟、床下浸水1,053棟が発生した。

台風10号から変わった熱帯低気圧が四国南岸から本州の南を進んだ影響で、名古屋市を中心とする県西部で集中的な豪雨となり、死者5人をはじめ大きな被害が出た。

九州の南から本州南岸を東進した低気圧の影響で、名古屋市を中心に雷を伴った激しい雨となり、名古屋市で床上浸水127棟、床下浸水2,380棟の住家被害があった。

台風19号では死者1人、負傷者1人、いずれも東三河。

愛知県

愛知県災害誌(1980)

| 愛知県  |      |    |    |     |    |   |         |     |     |               |   |   |                          |  |
|------|------|----|----|-----|----|---|---------|-----|-----|---------------|---|---|--------------------------|--|
| 和暦   | 開始日  |    |    | 終了日 |    |   | 気象概要    | 気象値 |     |               | 事象  | 出典  |                          |  |
|      | 年    | 西暦 | 月  | 日   | 月  | 日 |         | 指標  | 降水量 |               |   |   | 風速等                      |  |
|      |      |    |    |     |    |   |         |     | 観測局 | 値             |   |   |                          |  |
| 昭和63 | 1988 | 8  | 24 |     |    |   | 大雨      |     |     |               | 気圧の谷の通過に伴う寒気の影響で、県内のほぼ全域で雷雨となり、県西部を中心に住家の浸水被害が多く出た。           |   |                          |  |
| 昭和63 | 1988 | 9  | 20 |     |    |   | 大雨      |     |     |               | 本州上を東進した低気圧に湿った空気が流れ込んだ影響で、県西部を中心に短時間に激しい雨が降り、多くの住家の浸水被害を出した。 |   |                          |  |
| 平成2  | 1990 | 9  | 17 | 9   | 18 |   | 大雨      | 総雨量 | 東海  | 276mm         |   | 台風19号からの暖気の流入で秋雨前線が活発化しながら近づき、県下全域で大雨が降り、とくに尾張、知多地方で強い雨に伴う浸水被害が多く発生した。                              |                          |  |
| 平成2  | 1990 | 9  | 19 | 9   | 20 |   | 台風19号   |     |     |               |   | 大型で強い勢力の台風が和歌山県白浜から愛知県内を進み、暴風雨となった。県西部では負傷者5人、住家の半壊2棟などの被害が出た。                                      |                          |  |
| 平成2  | 1990 | 11 | 30 | 12  | 1  |   | 台風第28号  |     |     |               |   | 和歌山県白浜町に上陸し岐阜県北部へ進んだ台風で県内は暴風雨となり、県西部で床上浸水30棟、床下浸水1,033棟の被害となった。人的被害はなかった。                           |                          |  |
| 平成3  | 1991 | 9  | 18 | 9   | 19 |   | 台風第18号  | 日雨量 | 名古屋 | 218mm         |   | 沖繩の東から隼子沖に高進した台風に伴い、南岸の秋雨前線が活発化した。太平洋側各地で記録的な大雨となり、名古屋市や春日井市で床上浸水1,846棟、床下浸水7,351棟などの被害が出た。         |                          |  |
| 平成6  | 1994 | 7  |    | 8   |    |   | 干害      |     |     |               |   | 死者・行方不明者8人。   | 愛知県史別編自然_付録CD-ROM        |  |
| 平成6  | 1994 | 9  | 17 | 9   | 18 |   | 大雨      |     |     |               |   | 上空に寒気を伴った低気圧が停滞した影響で、激しい雷雨となり、名古屋市はじめ36市町で床上浸水、床下浸水計6,048棟が発生した。                                    |                          |  |
| 平成10 | 1998 | 9  | 21 | 9   | 23 |   | 台風第7・8号 |     |     | 最大風速<br>42.6m |   | 和歌山県西部に上陸した台風8号により激しい雨となり、続いて上陸した台風7号が愛知県西方を通ったことから暴風雨となった。名古屋市と一宮市で死者3人、県西部地方を中心に重軽傷者151人などの被害が出た。 | 愛知県地域防災計画                |  |
| 平成12 | 2000 | 9  | 11 | 9   | 12 |   | 大雨      | 総雨量 | 東海  | 589mm         |   | 秋雨前線に台風第14号の影響が加わって、非常に激しい雨が降り、死者7人、重軽傷者107人の被害を出した。  | 愛知県地域防災計画                |  |
| 平成16 | 2004 | 9  | 4  | 9   | 5  |   | 東海豪雨    | 総雨量 | 名古屋 | 567mm         |   |   |                          |  |
| 平成16 | 2004 | 9  | 4  | 9   | 5  |   | 大雨      | 日雨量 | 名古屋 | 136mm         |   | 日本海の停滞前線に暖湿気流が流れ込んだ影響で、名古屋市付近で短時間に局地的な大雨が降り、床上浸水250棟、床下浸水1,584棟の被害を出した。                             |                          |  |
| 平成20 | 2008 | 8  | 28 | 8   | 30 |   | 8月末豪雨   | 総雨量 | 名古屋 | 237mm         |   | 名古屋市で住家の損壊8棟、床上浸水1,175棟、床下浸水9,929棟の被害が出た。一宮市では軽傷者1人もあった。  | 愛知県の災害の記録<br>平成20年(2009) |  |

| 愛知県 |    |      |     |   |     |        |     |    |       |    |   |           |
|-----|----|------|-----|---|-----|--------|-----|----|-------|----|---|-----------|
| 和暦  | 年  | 西暦   | 開始日 |   | 終了日 | 気象概要   | 気象値 |    |       | 事象 | 出典  |           |
|     |    |      | 年   | 月 |     |        | 日   | 月  | 日     |    |   | 降水量       |
| 指標  | 値  | 指標   | 観測局 | 値 | 指標  | 観測局    | 値   | 指標 | 観測局   | 値  |   |           |
| 平成  | 21 | 2009 | 10  | 8 |     | 台風第18号 | 総雨量 | 東海 | 206mm |    | 強い勢力を維持したまま多半島に上陸した台風の影響で、非常に強い風が吹いた。重軽傷者19人、住家の全半壊47棟、一部破損2,092棟、床上浸水246棟、床下浸水1,235棟の被害となった。 | 愛知県地域防災計画 |

※被害実数は文献により差異があります。

土地分類基本調査（土地履歴調査）  
説明書

**名古屋南部**

5万分の1

平成24年3月

国土交通省国土政策局国土情報課

土地分類基本調査（土地履歴調査）の成果は、国土交通省  
ホームページからご利用いただけます。